
モノクロームな風景

夢追い人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノクロームな風景

【Nコード】

N8235X

【作者名】

夢追い人

【あらすじ】

恋愛に不器用な幸一が大学生になり、京都で一人暮らしをしている。偶然、祖母の宅に遊びに来ていた、高校時代に別れた真理に偶然出会う。昔話をした後、妹の秋子と一緒に住んでいると言う祖母の家に遊びに行くが、その夜から秋子が失踪してしまった。二人は秋子を探しながら、お互いに幼かった高校時代を振り返りながら、再び距離が近づいて行く。

一方、秋子はなぜ失踪したのか……。母親の過去とも絡みながら謎は深まっていく。

第一話 夕風になびくもの 一（前書き）

昭和の時代背景です。携帯電話もネットもありません。

第一話 夕風になびくもの 一

恋人達の佇む堤が、薄紫色の夕暮れにすっぽりと抱擁されてしまった。賀茂川の川面にも街の灯がとまり始めていた。昼間の蒸し暑さからは想像も出来ない程の涼やかな風が、川面に小波を立てながら、撫でるように川下へと吹き流れて行った。西の空はまだ明るく、山の淵が影絵のようにくっきりと浮かんでいる。

三浦幸一みづら こういちが京都のS大学に入学し、京都は西賀茂の学生アパートで独り暮らしを始めてから早くも一年半余りの歳月が流れていた。彼は今、二度目の夏休みを迎えている。夏休みだというのに別段やることもなく、毎日を自由気ままに、のんびんだらりと過ごしていた。夏休みの初期は、アパートの連中と一日中騒いで過ごしていたが、八月になると連中もみんな帰郷してしまった。

時代は平成に入って数年が過ぎ、学生生活にも変化が現れてきた。幸一のように、共同キッチン、共同トイレの学生アパートで集団生活をするものもいれば、学生マンションに住んでプライベートを大切にしている学生もかなり増えてきた。まだ、インターネットも携帯電話も普及していない時代であったが、一般加入電話が学生の各部屋に設置されていても、それほど贅沢だと責められる風潮では無くなっていた。

今日は一日中歴史小説を読んでいた。彼の部屋には扇風機どころか団扇もなかった。たった一つの救いは、窓向きの関係で直射日光が当たらないことと、賀茂川の辺にあるため、時々涼しい風が迷い込んでくることである。

日暮れ時になって涼しい風が吹き始めたようなので、部屋を出て足の向くままに歩き始めた。

アパートの玄関を出ると、そこはすぐに賀茂川の堤になっている。道路よりも数メートル下にある散策道まで土手を滑り降りて、スリッパの踵を引きずりながらぶらぶらと歩いた。

多くの恋人達の前を通り過ぎたが、別に羨ましいとも思わないし、自然と心に思い浮かんでくるような恋しい女もいなかった。強いて言えば、高校生の時に一度だけ恋愛の真似事をした穂積真理ほづみ まりを懐かしく思い出す位であろうか……。しかし、それは彼女が懐かしいと言うよりは、波乱と刺激に富んだ高校生活そのものへの懐古なのかも知れなかった。

あの頃の生活に比べて、今の生活の余りに呑気なこと……。彼は柔らかな涼風に吹かれて、全身の不快要素をすべて抜き去られたような快感と安堵を覚えた。幸一はジーンズのポケットから手を出して、思い切り伸びをしてから深い呼吸をした。とても空気が旨い。やや強めの涼風が吹きつけた時、彼はひらりと風上に身体を向けて髪を風に洗う様にして空を仰いだ。このまま天国へでも吸い込まれてしまいそうな軽やかな快感であった。

風が弱くなって、ほんの一瞬間の幻想的な世界にくると背を向けて再び現実の歩みを始めた刹那、彼の鼓動は止まり、彼が心は、現在と過去、現実と夢が織りなす綴れ織りの中を、光ほどの速さで駆け巡って行った。

真理がいる。幸一が心を完全燃焼させた穂積真理が、淡い薄紫の斜陽を受けて、短めの髪を夕風にもてあそばれながらゆっくりと歩んで来る。幸一の足は歩む術を忘れていた。呼吸すら忘れていた。どうにか鼓動が再活動を始めた時、今度は真理の動きが止まった。二つの肉体はまるでマネキン人形のようにその場に立ち尽くした。そして肉体を離れた魂は二年前の世界をさ迷い始めた。

「まさか……」

高校の卒業式の日、これが最後と自覚しながらも、声を掛けられずに遠くから見つめていた真理の姿が今、目の前にある。

「幸一さん……」

真理も幸一の名前を呼ぶのは二年ぶりであった。漸く二人は、万に一つの奇跡的な現実を認識して歩み寄った。

「あっ、そうか。幸一さんはS大やったわね」

真理は、あっさりとその信じ難い出会いを受けとめて、幸一は女の順応能力の高さに今更ながら驚かされた。

「真理ちゃんはどうしてここに？」

幸一も彼女の名を自然と口にした。真理は昔の様に名を呼ばれた羞恥を、相変わらず深く透き通った瞳に漂わせた。

「母の実家が京都にあることは話したでしょう。夏休みやさかい遊びに来てるの。妹も今、祖母の家に住んで京都の大学に通ってるのよ」

と言って真理は前髪をそつと掻きあげた。

「そうか」

幸一はぎこちなく二三歩進んでから、

「座ろか」

と、空いているベンチを目で示した。彼女は柔らかに頷いてから彼の勧めに従った。賀茂の流れも、カップルたちも、二人が再会する前とは何ら変化はなかった。

二人にとっては奇跡であっても、偶然の積み重ねで成立っている大宇宙から見れば、今の出会いなどは、どこにでも転がっているありふれた偶然でしかないであろうか……。幸一の心は、涼やかな自然の風に流されて、過去の思い出に遡っていった。

幸一は、姫路市にある第二高校に通う二年生であった。穂積真理は同じく二年生で幸一とは隣のクラス。

穂積真理は学年でも有名な美少女で人柄も人気があった。男子生徒の憧れは多いものの、どこか男を寄せ付けない雰囲気漂わせていた。だが、決して男子生徒に対して無愛想な訳でもなく、距離をおいている訳でもなく、むしろ愛想は良いし面倒見も良かった。彼氏がいるという噂は聞こえて来ないし、いつも女友達と一緒に遊んでいた。

幾人かの男子が彼女に交際を申し込んだという噂は聞こえてきたが、いずれも実らなかったらしい。いつしか、真理は男子との交際に奥手で、あまり興味もないといった噂がまことしやかに聞こえて来た。

幸一が小耳にしたところでは、中学時代に男に裏切られて以来、男を信用出来なくなっているという、真偽の程は全くわからない風説までもが流れていた。

幸一が真理に興味を持ったのは、二年生の初夏の頃であった。一年生の頃から真理の噂はよく耳にしていたが、部活動のことしか頭になかった彼は、恋愛だの、女子だの、浮いた話題にあまり興味はなかった。

それが、修学旅行先で交わした一度の会話が契機となり、紆余曲折を経て年末に初デートをすることになった。大晦日の夜に書写山しよしゃざんに登って除夜の鐘を聞き、初詣をしようと真理は企画していた。幸一はその夜の初デートのことを懐かしく思い起こしてみた。

『流れ星のほんの一瞬の軌跡が消えた後、漸く二人の白い息が同じ方向に広がった。』

「もうこれで三回目よ」

真理はやや不満気味に呟きながら、登山道から少し離れた所にある、腰の高さ程の台形型の岩石に向かって歩いていった。若い男性のグループが足早に二人を追い抜いていった。

「君が叫んだ時にはもう消えてるよ。一緒に同じ流れ星を見るなんて絶対無理や」

幸一も、懐中電灯と薄い月明かりを頼りにしながら、彼女の真後ろに付いて歩を進めていた。

「少し休みましょう。幸一さんは運動部やさかい、私と歩いているとイライラしはるでしょ」

真理はそう言って台形岩の上部に腰を下ろした。正直なところ幸一は、普段の半分程の歩幅でゆっくりと歩いていた。しかも真理が時々つまずきそうになるので、いつも彼女の足元に気を取られていた。だから、彼女のように折節星空を見上げて、偶然流れ星を見つけたことなど有り得なかった。然るに真理は、発見の都度驚嘆の声を発して幸一に方向を示すが、元より見えるはずもなかった。

「そんなことあらへん。ゆっくり歩くのも楽しいもんや。普段見えへんものまで見えてくる」

幸一は笑顔を浮かべて、彼女に気を遣わせないよう気配りをした。

「こんなに暗い道で何を見はったの？」

「小さな娘と歩くお父さんの気持ちかな」

そう言いながら、幸一も彼女の横に並んで腰掛けた。

「三浦君は優しいお父さんにならるわ」

からかい気味に言葉を放った真理が星空を見上げて、

「星がたくさん見えるわ！」

と、感嘆の声を上げて白い息を吐いた。幸一も漸くゆっくりと夜空を眺める機会を得た。確かに、自宅のベランダから見る星空よりも多くの星が視界に入ってきた。街灯りの影響を受けないためか、深い闇と、そこに浮かぶ星々の光源のコントラストによって、星空が三次元的に幸一に迫って来て、ぼんやり眺めていると宇宙へ吸い込まれてしまいそうであった。

「ほんときれいやわ……」

真理は再び感嘆の息を吐いた。

「俺は毎晩、うちのベランダで星を眺めているから珍しくはないけど、確かに街中で見るよりは断然綺麗や」

「毎晩見てはるの？ 夢見る少女みたいやね」

真理はそう言って、清々しい笑顔を月明かりの中でぼんやりと輝かせて、幸一の瞳を覗いた。幸一が初めて真理に惹かれたのはこの清々しい笑顔であった。

修学旅行で訪れた、上高地は梓川の辺で、さわさわとした新鮮な空気に溶け込み、透明な清流を背景にして、清々しく笑顔を浮かべる真理を目の当たりにした時、幸一は感動さえ覚えた。彼女は、澄んだ透明色が広がる自然の中で、清純な雰囲気を漂わせていた。その氷のように澄んだ情景が、今でも一枚の風景画となって、幸一の脳裏に大切に保存されていた。

「毎晩寝る前にね、星を眺めながら寝酒を引っ掛けて煙草を一服するんや」

「へえ、ロマン溢れる高校男子ね」

そう皮肉った真理は、笑みを浮かべてからハアッと、ゴジラのように白い息を吐いた。

修学旅行の際、河童橋付近で真理の笑顔を発見したものの、その後は見かける機会も、近づくチャンスもなかった。幸一は胸に熱い塊を抱えながらも、上高地散策という団体行動の中で、自然に彼女のことは忘れつつあった。一団が大正池に到着すると、しばらくの間自由行動となった。

幸一は、しばらくの間ふらふらと周囲を徘徊していたが、ふと目に留まった自然の倒木が、ちょうどいいベンチの態を呈していたので、そこに腰を下ろして、何の変化もない、退屈そうな池の面をぼんやりと眺めていた。

大正池の面はとても静かで、記念撮影云々で騒いでいる周囲の若者たちの喧騒など、すべてを吸収してしまって、まるで防音壁に囲まれた部屋のような不思議な静けさに、心まで吸い取られそうであった。

そんな、催眠術にでも掛かってしまいそうな心境のところへ、不意に後ろから女性の声が伝わってきた。

「三浦君、一人で何してはるの？」

ぼんやりと放心していた幸一は少々驚いて、寝ぼけたような瞳で後ろを振り返った。そこには、一年生の時に同じクラスで、テニス部である女子生徒がいたずらっぽく笑っていた。そして驚いたことに、その横には真理が微笑みを浮かべて立っていた。そう言えば、テニス部の彼女と真理は今と同じクラスで、仲が良いのか時々一緒に下校しているところを見掛けたことがあった。

「団体生活が苦手だね」

幸一はそう言って、真理にも笑顔を送った。

「団体戦よりも個人戦が得意なものね」

テニス部の友人がそう言って笑った。

「三浦君、テニス上手やね。この前の練習試合見てたんよ」

と、真理から驚く言葉が吐かれた。自然に名前を呼ばれたこと以上に、自分のことを知っていてくれたこと、しかも試合まで見ていてくれたことが、俄かには信じられない程嬉しかった。

学校での練習試合だったので、通りすがりに少し見てくれただけなのかも知れないが、それでも、幸一の心臓は破裂しそうな鼓動音を発していた。

真理の声は、顔の印象よりもやや大人びていた。わずかに鼻に掛かった響きが、微かに憂いと湿りとを漂わせていた。そんな響きが大人びて感じた訳なのかもしれない。

それから数分の間会話を続けた。初めての会話であるのに、特に自己紹介風のことは行わずに、まるで既知の間柄であるかのように自然に話すことが出来た。会話の中で『夏の大会頑張ってね』

と応援された。正直なところ、幸一は中学時代からテニスのために学校へ来ているような生徒であったから、テニスの話題は嬉しかった。

一年生の時に個人戦で県内ベスト8に入ることが出来た。だから今年はベスト4以上というのが周囲の期待であり、自分の目標でもあった。幸一は、真理が応援している前で目標を達成し『おめでとぅ』と言われる場面を秘かに想像して、益々闘志を燃やしていた。

「星を見ていたら悲しくならへん？」

岩の上で星空を見上げながら、修学旅行の記憶が星空のスクリーンに映し出されているかのように懐古の表情を浮かべて呟いた。

「センチメンタルな高校男子ね」

真理がからかい気味に幸一の瞳を覗いたが、彼は視線を真理には合わずに、星空を見上げたままで深呼吸をした。

修学旅行の後、夏休みまでの期間は、まるで夢のように楽しく充実した期間であった。幸一と真理は、廊下などですれ違ふと自然に挨拶を交わし、時には立話もした。幸一は次第に真理のことで心一杯になり、昼も夜も彼女のことが自然と脳裏に浮かんでくるようになった。そうして、必ず目標を達成して真理に喜んでもらおうと、更に集中力を高めて練習に励んだ。

その頃から、自宅のベランダで星を見つめて真理のことを思い浮かべると、胸を絞られるような心細い切なさを感じ始めていた。幸い、真理に嫌われている訳でもなく、特別な関係になれる可能性が全く無い訳ではなかった。だから、切なくて悲しい気持ちにはなるが、暗い気持ちにはならなかった。

やがて夏休みに入り真理と会う機会が無くなって、すぐに大会が始まった。団体戦は早々と敗れ、個人戦は順調に勝ち進んでベスト16まで進むことが出来た。しかし、次の試合で幸一は戦えなくなった。試合中に怪我をしたのであった。幸一は周囲の期待にも、自分の目標にも、真理の笑顔にも届かなかった。

新学期に入っても、松葉杖を突いているうちは真理に会いたくはなかった。クラスの連中やテニス部のメンバーが慰めてくれるのはありがたいと感じたが、真理には慰められたくはなかったし、こんな惨めな姿を見せたくもなかった。もちろん、真理からわざわざ慰めに来るほどの仲でもなかったので、遠くから彼女を垣間見る以外に会う術は無かった。

その頃に見上げた星空は、悲しみを乗り越えて虚しさで自分への怒りしか無かった。周囲の何かのせいにしたい気持ちはあったが、結局はすべて自分の責めに舞い戻ってしまった。

松葉杖がとれてリハビリも終わり、日常生活に支障が無くなった頃には秋はとくに過ぎ去って、紅葉が朽ち果てた冬に入っていた。

その頃には、真理と立話をする程度には心も回復していたが、テ

ニスの話題を持ち出されることをどこかで恐れていた。だが、いつまでも中途半端な距離感が嫌で、思い切ってデートに誘ってみようかと考えてはみるが、どうせ受け入れられるはずがないと、自分で否定してしまうのが常だった。夏の怪我以来、何をするにも自信がなく、常に悪い結果を予測して動き出さない、情けない自分を克服することが出来なかった。

そうこうするうちに冬休みとなったが、まだテニスをやる気にはならなかった。

ある天気の良い日、突然、いつまでも行動できない自分に腹が立ち、思い切って真理に電話を掛けてみた。幸一は口から心臓が飛び出しそうなほど緊張して足が震えた。年始に初詣にでも行こうと誘ってみた。

『ごめんなさい』

やはり予想した通りの結末であった。年始は、まだ家族の予定が立たないという理由であった。では年末はと食い下がってみたが、忙しいからと断られてしまった。幸一は絶望のどん底に叩き落とされた。この数ヶ月間、色々と辛い思いはしたが、唯一の希望は真理であった。例えわずかでも、親密な仲になれる可能性が残っていれば、遠くから眺めているだけでも幸せであったのに、そんな些細な幸福さえも自ら壊してしまった。

だらだらと冬休みを過ごしているうちに歳の瀬となった。世間も家の中も何かと騒がしくなり、幸一の居場所が無くなってきた。仕方なく、街にでも出掛けようとした時に電話が鳴った。真理からであった。年末の用事が済んで時間が空いたから、一緒に初詣に行こうと誘われた。実際、年末は忙しい様子であった。女子は、幸一のように家で惰眠をむさぼっている訳にもいかず、家事の手伝いで大変な様子であった。幸一は二つ返事で承諾して大晦日の夜を待ち焦がれていた。

「ごめんな」

唐突な幸一の言葉に、真理は小首を傾げて彼の横顔を見つめた。

「夏の大会で負けてしもて」

幸一はずっと胸に溜めていた、鉛の様に重い話題を持ち出した。

「何で三浦君が私に謝らはるの？私は何もしてないし、第一怪我しはったんやから仕方ないわ。ベスト16やってすごいことやと思うわ。私なんか何も得意なものあらへんのに、ほんまにすごいわ」

山の頂き辺りから除夜の鐘が響いてきた。幸一は真理に謝ることは的外れであることはわかっていたが、期待されていると勝手に思い込んでいた彼としては謝らないと気が済まないのも事実で、今漸くこの数ヶ月間溜まっていた不快なものが綺麗に流れ去って、除夜の鐘の音が素直に心に沁みてきた。

「せっかく応援してくれたのに、期待に応えられなかったさかい謝りたかっただけや」

「そう。お疲れ様でした。怪我が完全に治ったら、また頑張らはったらええやないの」

と言った瞬間、真理の表情は俄かに強ばって、

「ごめんなさい。そんな簡単にやり直せるものやないわね」

と、すぐに言葉を撤回した。幸一の表情が一瞬曇ったことを、真理は感じ取ったようであった。

幸一は街の灯りを見下ろした。大晦日だけあって多くの家庭の灯りが燈っていた。だがこんな田舎町では、星空の方が遥かに多くの灯を放っていた。

「君の言う通りや。何度でもやり直さなあかんのや」

除夜の鐘がまた一つ、奥深い星空に吸い込まれていった。

「さあ、もう一踏ん張りや。頑張って歩こうか」

幸一がさっと立ち上がって目で真理を促した。

「あっ」

今度は幸一が流れ星を発見したが真理は見逃した。

二人は登山道になっている六角坂参道を登り切り、湯屋橋を渡った。多くの参拝者がダウンジャケットや厚手のコートに身を包んで、

家族や恋人や友人達と、日常とは違った時間を楽しんでいた。ここ
まで来ると、所々に電燈が燈り、懐中電灯は不要になった。はづき
茶屋で温かい甘酒を飲んだ。正直なところ、幸一は寒くもないし疲
れてもいなかった。むしろ、山道を歩いたので軽く汗ばむ位であっ
た。しかし、真理が寒そうだったので温かいものを飲むことにした。
もっとさっさと歩けば身体も温まるのにと、内心で真理に意見しな
がら甘い飲み物を口にした。

「いくつくらい鐘の音鳴った？」

真理の質問に驚いて、

「さあ、心地良い音やけど、数える気にはならへんなあ」

幸一はそう言いながらも、腕時計で鐘の音の間隔を測ってみた。

「鳴り始めたのが二十三時四十分頃やから、間隔の時間から考えて
五十六くらいかな。今の鐘が五十七や」

「ほんまに？ 数学得意なの？」

真理は柔らかい上目使いで幸一をからかった。今届いてくる鐘の音
は鐘楼に近いためか、山道で聞いた、星空に吸い込まれていくよう
な響きとは違って、直接幸一の心の煩惱に響いてきた。

二人は店を出て魔尼堂まにどうに向かった。元禄元年に建立された魔尼堂
は、参道よりも一段高い所に位置しており、長くて急な石段が伸び
ていた。下から見上げると、壮麗な舞台造りの木造の肌に、部分的
に照明が反射して、優美で幽玄的な雰囲気漂わせていた。新年に
なると魔尼堂で護摩供が行われ、多くの人々が新年の祈願を掛ける
らしい。

「あっ」

石段の真ん中辺りで、真理が突然叫んだ。

「また流れ星？」

「違うわよ。あと、五秒」

彼女は歩みを止めて腕時計を凝視している。

「明けましておめでとう」

真理は、時計から離れた澄んだ瞳で幸一に微笑みかけた。幸一は、

その愛らしい表情にどきりとした。そして至福の感に満たされた。百八つ目の鐘の響きが、新年を迎えた参拝者全員の胸に希望の音色として響き渡った。

魔尼堂に着いた二人は手水所で手を洗い、口をすすいでから参列に加わった。礼拝前に手を洗うなど、幸一には初めての体験であった。線香の香りが漂う中で大勢の参拝客に揉まれながら、ゆっくりと参拝の列に従った。絵馬や御守り、線香や蝋燭など、運勢に関わりそうな物が諸々売られていた。

そろそろ二人の順番が近づいてきた。人込みの中で、真理が白いコートの内側に隠れたウエストポーチを探っている。財布を出そうとして手間取っていた。幸一が、ジーンズの左ポケットから小銭を一掴みして、彼女の前に差し出した。幸一のダウンジャケットは、腰までの長さであったので容易に取り出すことが出来た。真理は、幸一の手のひらにある何種類かの硬貨を見て一瞬躊躇したが、五百円硬貨をつまんでから幸一の瞳を覗きこみ、

「嘘よ」

と言って笑った。そして今度は、十円硬貨をつまんで再び幸一を覗いた。

「百円にしたら？」

という幸一の勧めに、真理は素直に従って、

「ありがとう」

そう言って両手でその硬貨を包んだ。

「幸一さんは何をお祈りしてるの？」

幸一は、唐突に名前を呼ばれた驚きを表情に出さないように気を払いながら、

「俺は参拝なんかしないよ」

と言い放った。今度は真理が素直に驚いて、

「ほな、何しに来はったの？」

と、どうにも合点がいかない表情で、じっと幸一の反論を待った。

「真理ちゃんに会いにきた。話をしにきた」

幸一も、初めて彼女の名前を呼んでみた。一瞬、はにかんだ時間が二人の間に横たわったので、すぐさま幸一が、

「神様にお願ひしたところで運命なんて変わるものやないし、自分が努力もせずに、結果なんて得られるものやないと思う」

と、やや狼狽気味に言葉を発した。真理は軽く笑ってから、彼女の右側に立っている幸一の左腕にそっと自分の右手を添えて、

「幸一さんは強くて頼もしいわ」

と囁いた。ほんのわずかの間、二人の空間を線香の香りが通り過ぎて、心安らぐ平穏な気持ちが広がった。

「幸一さんは、自分の運命は自分で切り開く頼もしい人やけど、うちは……。私は家族の安全や幸せなんて、私の力で何とか出来るものや無いし、神様にお祈りすること位しか能がない女やの。そやさかい私が参拝する間待っててね」

幸一は、彼女の言葉に冷水を浴びせられたような衝撃を覚えた。

自分は家族の安全などに一切無関心であった。自分のことばかりを考えて過ごしてきた。自分の心の幅と、家族の幸福を案じる真理の心の広さを比較して、自分がひどく小さな人間であることを思い知らされた。

幸一は家族に対して愛情はあるが、この家族を大事にしようとか、将来こんな家庭を築こうとかいった思いは一切無かった。真理の言葉が、直感的には少々白々しく感じたが、ごく自然に語る彼女の表情を見ていると、真理が別世界の人間であるかのように感じられた。

二人の順番が来て、真理はそのまま拝殿に向かって行った。灯籠の灯りと提灯、蠟燭の橙色の光で、真理の白い肌が炎に照らされているかのようであった。線香の煙が白く浮かび上がった、神聖な気の満ちる空間に、真理がポカリと浮いているようであった。周囲の誰よりも若々しい美しさを放っていた。

幸一は列から外れて、真理の礼拝する姿を可愛いと思って見つめていた。だが、真剣に祈願する彼女の姿は、彼にとって美しくはあるが、どこか馴染めない違和感があった。

「お待たせ」

清々しい笑顔で真理が小走りに近寄って来て、

「御神籤引きましよ」

と、明るく語尾を上げて、幸一の興味が湧かない提案を次々にしてきた。真理は幸一の気持ちなど聞く耳も持たない様子で、重い表情の彼を強引に導いた。

ここでも短い列が出来ていた。順番に木の筒を振っては中から番号の書かれた棒を引き出し、番号を告げて御神籤を受け取っていた。真理の順番が来た。彼女は無邪気な笑顔を浮かべて、小さな手に余る木の筒を、からからと何度も振ってから棒を引き抜いた。幸一は、筒を受け取るや否やあっさりと棒を取り出した。

「もっと集中しないと……」

「案外、あっさりとした方が結果は良かったりするもんや」

二人は早速灯籠の灯りの方へ歩み寄った。

「ほらな」

幸一は大吉であった。

「うそ。何で？私は末吉やわ」

「でも確率的には大吉よりも末吉の方が低いらしいで」

「そういう問題やないの」

真理は御神籤の内容をじっくり読みながら淡白に答えた。

「これどうしたらええの？」

「大吉やし、持って帰らはっても、枝に結ばはっても構へんわ」

幸一はそばにある、白い御神籤の花がいっぱい咲いた冬枯れの枝にもう一つ花を添えた。

「ちゃんと読まな意味無いやないの。大吉とか凶とか、総合運だけで判断したらあかんのよ。中に書いてある事柄毎によく読んで、普段の生活の参考にするものなんよ」

そう言って、真理はちらりと幸一を見やったが、すぐに自分の御神籤を読むことに集中した。

「読んでも意味がわからん。古文苦手やしな。」

「今度、私が教えてあげるわ」

真理は片手間にそう答えておいてから、丁寧に御神籤を折り畳んでポシェットにしまい込んだ。

「持って帰るの？」

「本当は、凶が出た時にだけ結ぶものなんよ。悪運は持って帰りたくないさかい、神様をお願いするの。そやけど結ぶって行為は縁起がええさかい、みんな凶以外の御神籤も結んでいかはるけど」

「えらい詳しいなあ」

「小さい時から祖母と初詣に来ていたさかい、色々教えてもらたの。みんな祖母の受け売りよ」

そう言って真理は照れくさそうに笑った。

「へえ、お祖母さんは物知りなんやな。で、なんて書いてあった？」
幸一は自分の御籤にも興味が無いのであるから、無論他人の物には全く興味は無かったが、会話の種に聞いてみた。

「内緒」

仕方なく幸一は、他の話題を見つけようと周囲を見渡した。

「一つだけ教えてあげる」

真理の勿体ぶった言葉に、反射的に拒否感を感じたが顔は微笑んでいた。

「恋愛運はね、障害が多いけどそれ乗り越えたら実るって書いてあったわ。幸一さんにもわかるように現代語訳してあげたのよ」

「障害を乗り越えたら実るなんて当たり前のことで、大吉も末吉も違いは無いのと違う？」

真理は笑顔だけ残して踵を返した。この後どうするのか幸一には段取りは無かった。真理が計画したことなので、彼女に従って行動するしかなかった。

二人は再び魔尼堂の石段を降りてから三つの堂の方へ歩み始めた。三つの堂は山奥の方へ進んで行くので、次第に明かりも少なくなり、再び懐中電灯が必要になってきた。

「幸一さんは兄弟いたはるの？」

「うん。妹が一人。まだ小学六年生やけど」

「へえ、優しいお兄ちゃんなんでしょうね、幸一さんは。私も一つ違いの妹がいるの」

真理は襟元についている白いフアーに首を埋めるように肩をすぼめて歩いていった。

「一つ違いなら、友達みたいなものやな」

幸一はジャケットのポケットに両手を突っ込んで、足を擦りながらだらだらと歩いていた。

「そやさかい、細かなことでよく喧嘩もするわ。親にはいつも私が叱られるの。お姉ちゃんやからって。一つしか違わへんのに不公平やわ」

そう言って、心持口を尖らせて拗ねた表情を浮かべた。幸一は話を聞くよりも彼女の拗ねた横顔を眺めている方が楽しかった。

二人は三つの堂の境内に足を踏み入れた。大講堂と常行堂そして食堂がコの字型に配置されていて、その昔、弁慶が若い頃に修行をしていた場所でもあった。いくら大晦日とは言え三つの堂はすべて閉ざされていて特別な催しは無かった。いつもの夜の様子であった。そうしてどこにも人影は見当たらなかった。

「誰もおらへんわね。なんか怖いわ」

「他人がいる方が怖いやろう」

「隠れるところはいっぱいあるわ。床の下とか、お堂の裏とか。誰か隠れているかも？」

真理は幸一を怖がらせて喜んだ。そして、怖いと言った割にはすたすたと歩んで大講堂の石段を数段上がった。幸一も周囲を警戒しながらゆっくりと近づいた。くるりと振り向いた真理は、黙ったまま星空を見上げた。この境内はほとんど明りが無く、月明かりと懐中電灯の明かりだけがすべての光源であった。二人の持つ電灯がまるで蛍の光のように、この広い境内でぼんやりと浮かんでいた。

「お父さんはどんな仕事したはるの？」

幸一は、深夜の外出を許す父親がどんな人間なのか、ヒントを得た

くて質問してみた。

「税理士の仕事。中小企業の税金の相談にのる仕事みたい。去年の夏から単身赴任で東京に行ったはるわ。東京に本社がある企業の仕事が忙しいらしいの。詳しいことはわからへんけど……」

「それだけ知っていたら十分や」

幸一は合点がいった。単身赴任で不在であるから、母親の判断だけで許されたのだろう。父親が側にいたら絶対許されない気がした。自分の妹が高校生になって、同じような行動を取るとしたら絶対に許さないだろうと自分では感じていたからだ。

「幸一さんとこのお父さんは？」

幸一は石段には上がらなかったから、真理の声がやや上から降りて来た。

「ごくありきたりの会社員で営業してるわ。いつも遅くまでがんばってくれている」

「へえ、感謝してはるんや、お父さんに」

真理は星空を見上げたまま、ひとり言の如く呟いた。

「感謝はしてるけどな……」

幸一は真暗な足元を見ながら呟いた。

「あんな風にはなりたくない？」

と、相変わらず、真理が星を目で追いながら呟いた。幸一は本音を言い当てられてどきりとしたが、足元を見続けながら腕組みをした。

「男の子はそれで良いのよ。無意識のうちに父親を超えたいと思っている。だから感謝や尊敬の気持ちとは別に、どこかで認めたくない気持ちもある。認めてしまうと自分の目標レベルが具体的に見えて、自分の限界を見ってしまうような気がするから……。そんな感じかな？ 可愛い少年くん」

と、真理がからかうように微笑んで、視線を星から幸一に落とした。

「真理ちゃんは歳をごまかしているやろ」

足元を見ていた幸一が真理を見上げた。

「失礼ね。心理学に興味があって少し勉強しただけよ」

二人は視線を合わせて笑い声を上げた。幸一は、真理への視線から方向を変えて夜空を隅々まで見渡した。

「あっ！」

唐突に幸一が叫んだ。

「何、流れ星？」

真理も慌てて星空を目で走査した。

「年賀状をポストに投函するのを忘れた」

真理はくすつと笑いを零してから、

「明日、自分で配らしたら？」

と言って今度は大きな笑い声を上げた。

幸一と真理は、暗闇にある三つの堂を後にして、ロープウェイ乗場のほうへと引き返した。

途中で小さな池があつて、二人は足を止めた。五メートル四方程の小さな池であつた。表面が凍りついていて、氷の下には数匹の錦鯉が、寒さに堪えるかのようにじっと身を寄せて浮遊していた。

「寒いなら、もっと動かはったら温まるのに」

さっきの茶屋で、幸一が真理に対して思ったことを、彼女が錦鯉に向かって言っている様が可笑しくて、彼は心の端で静かに笑った。

ロープウェイ駅の前に芝生の広場があつて、そこに直径が五メートルくらいの浅い穴を掘って焚火をしていた。他にもドラム缶で三つ四つの焚火があつた。それぞれの炎の周囲には、初日の出を待つ人々が暖を取っていた。地面に穴を掘った一番大きな焚火の周囲にはベンチが集めてあつた。

二人はそのベンチに腰を降ろして、メラメラと赤外線熱を発散している焚火の高揚を眺めていた。炎からは二、三メートル離れてはいるが十分に暖かった。その焚火の炎が真理の瞳の中で揺れていた。真理はじつと炎を見つめている。魔尼堂で、真理の肌に反射していた灯りよりも、より原始的で力強い炎の灯りが、再び真理の白い肌を妖艶な輝きに染めていた。炎の灯りを正面に受けているために、光陰の差がくつきりと映し出されて、彫りの深い彼女の顔立

ちが、より一層深く強調されていた。暖かく力強い灯りに作られた濃い影は艶美にうごめいて、真理の肌から滲んでいる艶の気を反面から強調した。

人々は一様に静かであった。じつと炎を見つめ、在る者は酒を飲み、在る者は煙草を吸い、コーヒーをすすり、人工の灯りがほとんど無いこの広場で、人間としての、動物としての本能に触れているかの如くであった。真理も同様に、まるで催眠術にでもかかった者のように炎に魅入られていた。

「人間は火を使うようになって文明が進歩したらしい」

幸一が、テレビで得た情報を披露してみた。その言葉を聞いて催眠術にかかっていたかも知れない真理が、

「他の動物は火を恐れるのに人間は恐れなかった。こうやってじつと炎を見つめていると、心が安らぐのはどうしてやろうね？人間も動物なら、本能的に恐れても良さそうなもののやのに」

と、実に全うな意見を述べた。幸一は少しの間真剣に考えてみたが答えが見つからなかったので、

「狩をしていた頃から、炎が家族団欒の中心やったんやろう。恐れていた頃の記憶を掻き消すほど、家族の中心は温かいものなのかも知れへんな」

と、何の根拠も無い憶測で答えた。不意に炎がはじけて大きな音が破裂した。その音は山肌に響き渡った後、静かに消滅していった。

「失礼ですが、三浦先輩じゃないですか？」

幸一の遺伝子の記憶ではなく、脳の記憶を刺激する、甘みを帯びた繊細な声が彼の背後で響いた。幸一が振り向くのと同時に真理も幻想から覚めて、現実を把握出来ない表情で周囲の様子を一つずつ認識していった。

「美紀か？久しぶり！どうしてたんや？」

幸一は、唐突に変化した周辺情報を整理できずに、目の前にある劇的な現象にのみ対処していた。

「やっぱり、三浦さんでしたか。本当、お久しぶりです。お元気で

したか？あ、彼女さんですか？」

美紀と呼ばれた少女は、幸一の横で事態の行方を見守ることしか出来ない真理のことを確認した。幸一が、彼女という言葉に一瞬躊躇して回答しあぐねた瞬間に、

「ええ、穂積真理と申します」

と、真理が幸一を驚かす挨拶をした。真理が自ら自分の彼女であると公言してくれたことには感動したが、今はその余韻に浸る余裕はなかった。

第一話 夕風になびくもの 二(前書き)

回想のなか。真理と美紀の二人と心を通わせていた幸一は、とうとう覚悟を決めて美紀と別れる。しかし幸一の行動を誤解して真理が失踪。彼女をを探す中で妹の秋子のピュアな魅力に惹かれる幸一だった。

第一話 夕風になびくもの 二

「中学時代のテニス部の後輩で早川美紀はやかわ みきさんです」
幸一は美紀を真理に紹介した。

「すみません、お二人の時間を邪魔してしまつて」

「いえ、いいのよ。縄文時代の話しをしていただけたやから。どうぞこっちに来て座つて頂戴」

真理はそう言つてベンチの端にずれて、幸一との間に間隔を空けた。
「じゃあ、少しだけお邪魔します」

美紀は、ハイネックの白っぽいセーターの上に革風の紅いジャンパーを着ていた。二人の間に腰掛ける時に、黒いジーンズが幸一の目に入つた。暗いから黒く見えただけで実は濃紺かも知れない。心が動揺している割にはどうでもいいことが幸一の氣に止まつた。

「君は一人で来たの？」

幸一は色々と聞きたいことが頭の中で洪水のように押寄せて来たが、まず現状を確認することから始めた。

「いいえ。兄と一緒にです。正確に言えば、兄と、兄の彼女と三人です。毎年大晦日は、兄とここへ初詣に来る習慣になつていて、今年は彼女がいるから遠慮すると言つたけど、二人が許さなくて……。で、一応氣を遣つて、時々は二人だけの時間を作つてあげている訳です」

「そう、氣を遣う立場だね。でも一人でうろつくと危ないよ」

「幸一さんみたいな人がいるから？」

真理がいきなり口を挟んできた。美紀はくすりと笑つてから、
「大丈夫ですよ、三浦さんは……。三浦さんは実のところ女嫌いで
すから。それに兄達はあそこの焚火にいますしね」

と言つて真理に笑顔を送つた。

「へえ、幸一さんが女嫌いやとは知らなかったわ。男が好きなの？」
今度は、真理が美紀に笑顔を送つた。幸一は、二人の女が仲良くで

きる雰囲気成り立ったことは嬉しかったが、速く次の質問がしたくて、つい会話の流れを無視してしまった。

「学校はどこへいつているの？」

美紀は幸一より一つ年下であった。

「第三高校です」

「何年生？」

真理が再び口を挟んできた。

「俺たちは高校二年生。美紀は俺の後輩で高校生ということとは？」

幸一は少々小馬鹿にしたような口調で真理に問うた。

「一年生。私の妹と同じやわ」

クイズの正解がわかったような明るい口調で真理が答えた。

「え、そうなんですか」

美紀も真理に調子を合わせるような明るい語気で会話をした。

幸一は、この手の女の会話についていけなかった。見ず知らずの女と妹が同じ年であったからといって、そんなに驚いて共鳴することはないだろうに……。

美紀は中学三年の時に突然転校した。幸一は中学時代、姫路市の中心街から西の方へバスで三十分位の所に住んでいたが、高校一年の春に隣の市に引っ越した。中学卒業後もテニス部の後輩指導で何度か中学を訪問したが、その時にはもう美紀はいなかった。転校をしたという事実は聞き出せたが、男子部員には詳しい住所まで知る者はいなかった。

真理と美紀が並んで座っている姿はまるで姉妹のようであった。炎の橙色の灯りが、二人の表情を神秘的で妖美な美しさに仕立てていた。光陰の境目がくっきりとして、エキゾチックな雰囲気を漂わせていたので、話しをしてこの雰囲気を壊すのが憚られたが、美紀の情報を収集したい欲望は抑えられなかった。

「まだテニスを続けているの？」

幸一は美紀の横顔に尋ねた。

「はい。相変わらず下手ですけど。三浦さんは怪我をされたんです

ね、残念でした。去年はベスト8まで進まれたのでしょ、すごいですね」

幸一は、美紀が離れていても自分の情報を知ってくれたことに感動を覚えて、急に熱い思いが胸の中で膨張していった。

「もう続けるのは無理かな」

幸一が真意を含んだ語気で静かに語った。美紀の驚いた表情の向こうに、心配そうな真理の表情が炎の灯りに浮いていた。

「そうですか……」

美紀はあっさりと表情を戻したが、真理は幸一の本心を探るように彼の瞳を見つめていた。

「私、そろそろ失礼します。兄が心配するので」

「一度ゆっくり話そうよ」

幸一の言葉に美紀は微笑んでから真理の方に視線を移した。

「構いませんか？」

と、真理に向かって少し小首を傾げて美紀が尋ねた。

「ええ、どうぞ。相手してあげて頂戴」

美紀はにっこり笑ってから二人に挨拶をして、小走りに去って行った。美紀が去った後の心の空虚に真理の温かい笑みが入ってきて、幸一はやや興奮し過ぎた自分に羞恥を覚えた。

「可愛い人ね」

真理の普段通りの声にやや落ち着きを取り戻した幸一は、

「ごめんな、久しぶりに会ったんで、つい興奮してしまっ……」と照れくさそうに謝った。

「いいわよ、気にせんという。幸一さんは美紀さんのこと好きやったんでしょ？」

真理の突然の追求に彼が窮して固まっていると、真理はくすつと笑って、

「幸一さんてほんまにわかりやすいわ」

と、優しい口調で幸一の緊張をほぐした。彼女の横顔に炎の灯りが艶めかしく揺れた。

「ねえ、美紀ちゃんとのこと聞かせて」

真理が、座る位置を幸一の方にずらせて身体を寄せてきた。

「もう昔の話しや」

「だったら、余計話せるやないの。ねえねえ」

真理は幸一の腕を掴んで揺すり始めた。そんなに他人の恋愛話を聞きたいものなのか不思議でならなかったが、時間もたっぷりあるし、縄文時代の話題も発展しそうにないので、仕方なくぽつりぽつりと語り始めた。

幸一が美紀と出会ったのは、幸一が中学三年生に、美紀が二年生になる直前の春休みであった。春休中のある日、部活の後で幸一は、野球部のグラウンド縁にあるベンチに腰掛けて、野球部の練習試合を観戦していた。暖かい春の正午過ぎで空腹であったが、練習の疲れと春の陽気でうとうと眠気を覚えていた。

「野球が好きなんですか？」

眠りかけた幸一がどきりとして声の持ち主を探すと、白いテニスウェアを着た美紀が眩しく立っていた。白いウェアが眩しいのか、美紀の笑顔が眩しいのか一瞬当惑したが、すぐさま平静を取り戻して、「今投げているエースが友人でね、どの程度の実力か観てやろうと思ってる」

そう言いながら、目の前にいるテニス部らしい女子の名前を思い出そうとしたが無理であった。そもそも最初から知らなかった。女子のテニス部は人気があって大人数だったので、名前どころか顔も覚えられなかった。

「早川美紀、新二年生です」

そう言った彼女は幸一の横に腰掛けた。まだ練習をする積りなのかラケットを持っていた。

「三浦幸一です。新三年生です」

「知ってますよ。三浦先輩は有名ですから」

「そう。男子は人数が少ないからな」

幸一が、美紀の可憐さに動揺した心を落着かせようとした時、わっ

と歓声が起きて、打球がレフト前に勢い良く転がって行った。

「打たれましたね」

「まだストレートしか投げられないそうだよ」

「へえ、そうなんですか。変化球は難しいんでしょうね」

美紀はそう応えながらエースの方をじっと見ていたが、野球には余り興味が無さそうな目をしていた。

「野球はのんびり観戦出来るからいいですね。テニスでは集中して見えないといけないので疲れます」

幸一が、そんな言葉に釣られて愛らしい美紀の横顔をもう一度見つめた時、金属バットの音が鈍く響いた。

「また打たれましたね」

「スピードはあるけど球種がストレートだけじゃ辛いね。いくらコースをうまく突いても、タイミングがみんな同じだから合わせやすい。カーブも練習はしているみたいだけど」

「三浦さん、プロ野球の解説者みたいですね」

そう言った美紀の白い笑顔が春の陽気に照らされて、満開の桜のような華やかさを醸し出していた。

幸一が、突然現れた美紀の可愛さに心を奪われていた時、審判の大きな声がしてバッターが三振となった。

「今のボール落ちませんでした？」

二人は一塁側から見えていたので縦の変化はよく見えた。

「彼のカーブは曲がらないけど落ちるって自慢していた」

「落ちれば十分じゃないですか」

「それが毎回落ちるとは限らないらしい」

「落ちなかったらどうなるんですか？」

「手頃なスピードのストレートとなって、さっきみたいにクリーンヒットされる」

「カーブを投げるのにも勇気がいますね」

そんな他愛もない会話から二人の関係は始まった。幸一は春の陽気のためか、今までに経験したことのない、心の底がわくわくするよ

うな躍動感を覚えた。今までも同級生の女子と二人きりで会話することは時々あったが、こんなにも心が酔わされたのは初めてであった。

次第に美紀との距離は縮まっていった。放課後や部活の後などによく会話した。時間が合うと家路の途中まで一緒に帰ったり、休みの日には買い物に出掛けたり、公園で弁当を広げてランチをしたりした。

幸一は、美紀のことを好きであるという自覚はしていたが、元来がスポーツ馬鹿で、女子とどのように付き合うかなどの情報についてはほとんど興味が無く、少年向けの情報雑誌などもほとんど見たことが無かった。

秋も深まって冬の香りが近づいてきた頃から、だんだんと美紀と話す機会が少なくなってきた。三年生である幸一の部活は夏で終了したので、練習で会うことも無くなった。図書室で勉強しながら美紀が部活を終えるのを待って一緒に帰ることもあったが、次第に美紀が幸一と会うことを避けるようになってきた。理由は良くわからなかったが、何か悪いことを言ったのかと思い、そのうちにゆっくりと話す機会を設けて聞き出そうと思っていた。しかし何度誘っても断られ、ついには学校で会っても無視されるまでになった。当然幸一は深い悲しみに苛まれ、美紀の不可解な態度に身悶えして苦悩した。だが、結局は仲直りすることもなく、嫌われた原因さえも明確にならないまま卒業し、間もなく幸一は故郷を離れた。

「ちゃんと告白したの？」

真理が一通り幸一の話しを聞き終えてから質問した。

「そんなことするわけがない」

「何で？」

「あの頃は愛だの恋だのと言うことが嫌いやった。照れくさかったのかも知れへんな。男がそんな浮ついた言葉を口にするもんやないって本気で考えていた。硬派な男に憧れていたんや」

「可愛い中学生」

真理はそう茶化してから幸一の頬を人差し指で突いた。

「ましてや、自分を慕ってくれる後輩に、恋心を抱くなんて不謹慎やと思っていたし、実際に抵抗があった」

「幸一さんはいったい何時の時代の人？縄文時代？最早理解不能やわ」

真理は笑いを通り越えて呆れ顔になっていた。幸一も、炎から視線を外して彼女の瞳に炎が映っている様を見つめながら、苦笑いを浮かべた。

「自分でもそう思う。多分それまでは女子に興味が無かったんや。テニスばかりしてたから、どう対応するのかわからなかった」

「それで美紀ちゃんは、幸一さんのことを女嫌いやって言わはったんやね。納得したわ。今の幸一さんからは想像もできひんけど」

真理は幸一の頬を軽くつねりながら、まるで小学生でもあやすような柔和な笑顔で幸一に語りかけた。

「でも、その割にはちゃっかりデートしたはるやないの」

と、今度は幸一の鼻を摘みながら指摘した。

「美紀に誘われるがままに従っていただけや」

「なるほどね」

真理は幸一の顔で遊ぶのをやめて、寒空に立ち昇る煙を目で追ってから、

「美紀ちゃんはまだ幸一さんのこと好いたはるわ」

と、幸一に横顔を向けたままで呟いた。幸一も、今夜何度も見上げた星空に視線を移してから、

「俺の話を聞いていた？秋頃から完全に無視され続けたんやで」

と、顎を突き出して星を仰いだままで呟いた。

「好きやから、一時的に嫌いになることもあるんよ」

「それこそ理解不能や」

幸一は、女心の不思議さや、掴みどころのないことを主張する意見には一切興味がなかった。どんなに真剣に聞いても理解出来ないし、最後には腹立ちを覚えるからであった。

「そうやね、幸一さんにはまだ難しいわ。もう少し大人にならばつたらわかるわ」

そう言って真理は幸一の手を握った。

「温かいわ」

「君の手が冷たいんや」

幸一は真理に手を握られて少々動揺した。真理の手は小さかった。こんな小さな手だと生活が不便じゃないかと、今の状況とは全く無縁な疑問が頭の片隅に浮かんだ。

「理解は無理でもいいけど、女の私が言うからほぼ間違いないわよ。美紀ちゃんは、今でも幸一さんのことを好いてはる。どう、嬉しい？」

真理は、優しく幸一の表情を覗き込むようにして反応を待った。

「そりゃあ人に好かれるというのは嬉しいことや」

「あほ。こういう時は、美紀のことはもう関係ないとか、君の方が好きやとか、嘘でもいいから言うものよ」

そう言って真理は幸一の手の甲を強くつねった。

唐突に強風が走り寄って、焚火の炎を大きく沸きかえらせた。バチバチという薪のはじける音が大きく響き、小さな火の子が花火のようにならした。

「真理ちゃんのことが一番好きや」

幸一は、ひと際熱い風を正面に受けながら、真理の手を強く握った。舞上った火の子が自然に消えて、再び静かな炎に戻るまでの数秒間、二人の呼吸は止まっていた。星の瞬きも、人々の挙動も、すべてが止まっているように二人は感じた。

「うちも好きよ」

真理はじつと炎の波を凝視しながら、両手で幸一の右手を包み込んで、頭を彼の肩に預けた。大きく揺れる炎の灯りが真理の色白い肌を橙色に染めて、鼻の陰影が頬の上で大きく揺れていた。

この原始的で神秘的な雰囲気の中で、二人は無言で心確かめ合った。二人は身体が触れることで、そこから互いの愛情が交わるよう

な感覚を覚えた』

「お婆さんの家はどこにあるの？」

記憶の旅から戻った幸一は、雪のように白い、真理の横顔と再会して、胸を搾られるような熱い塊が、身体中を駆巡るのを実感した。

全く変わりなかった。二年前の彼女とも、幸一が時折思い起そうとする時の幻想的な彼女とも……。

相変わらずの、清純な笑顔を浮かべている真理は、幸一の中で凝固していた過去の感情を溶解させ始めた。

「上賀茂橋を少し下がった辺りよ。菖蒲園町いう所やけど知ってはる？」

「ああ、知ってる。バイトへ行く時によく通るさかい」

「幸一さんのところは？」

「あそこや」

幸一の指差す方向を振り返る瞬間の、まだ幼い仕草がスロー動画のように彼の瞳に映った。どこからか、夏草の蒸せるような香りが漂って来て、彼を故郷の思い出に誘った。

「いつから京都に来てはるの？」

幸一は川向こうでジョギングする若者を目で追いながら尋ねた。

「一昨日からよ」

「いつまでいる予定？」

「さあ、特に予定はしてへんわ」

真理はそう答えて、やや不器用な笑顔を浮かべた。話し相手を深く見つめる癖も相変わらずであった。その瞳の純粹さに思わず視線を外してしまいそうになるのは、自分に何か負い目があるのかと自問してみるのが常であった。

「もう星が出ているわ。あれが一番星かなあ」

空を仰いだ真理の幼い表情に心惑わされながら、彼女の視線を追った幸一は、夕風に運ばれた真理の甘い香りに、時の経過を実感した。
「高校時代にも一緒に星眺めたなあ」

「ええ、大晦日の夜やったわね」

真理は過去の星を眺めるかのように、二年や三年では微塵たりと変化しようとしないう大宇宙を見つめている。

「書写山の坂の途中で、岩の上に腰掛けて」

幸一も、真理と同じ過去の星を見つめた。

「まだ、哀しくならはるの？星眺めはったら……」

あの時の言葉を持ち出して、真理はからかうような笑顔で彼の瞳を覗き込んだ。

「もう一回あったよな、一緒に星を眺めたこと」

二人が数分前に再会した瞬間から、何時、この話題に触れようと、互いに模索しているように幸一は感じていた。

初めてのデートで真理と心を交わしたものの、美紀と出会ったことで、美紀に相手にされなかった期間、過去にばかりと空いてしまった空間を埋めるチャンスを得た幸一は、約二ヶ月間、真理と付き合いながらも、美紀と頻繁に会っていた。休日には、むしろ美紀と会うことの方が多かった。

幸一は、真理が自分の行動に理解を示してくれていることに甘え過ぎていることも自覚していた。そしてある日、真理とのデートで幸一は覚悟を決めた。

『三月を迎えたものの、二人に吹く風はまだ冷たかった。今日は久しぶりに真理と出掛けていた。彼女は、淡いピンクの薄手のセーターに、カーキ色のブルゾンをまとっている。膝上丈の淡い水色のスカートを穿いていた。ヒールが高めのパンプスを履いていたので普段より背が高くなっていた。』

幸一は、しとやかに公園のベンチに座っている真理の横に並んで腰掛けた。そうして彼女の横顔をさりげなく見つめた。今日も薄化粧をしていた。

「嫌な思いをさせてごめん」

幸一はずっと負い目を感じていたことを口にした。例えば中学時代の

後輩とはいえ、何度も二人きりで会うことは、真理にとって面白くない。ましてこの二ヶ月間、休日には一度も会えずに、その間幸一はずっと美紀と会っていたのだから、余程のお人好しでも怒って然るべきであろう。

「いいのよ、何も気にしてへんさかい。幸一さんは会いたい人と会わはったらええのよ」

真理は幸一の方を向いて自然な笑顔を浮かべてから、すぐに梅林の方へ目線に戻した。

今日は電車に乗って、姫路の西隣にある御津町の梅林公園に来ていた。海岸縁にある小高い丘にある公園で、梅林の向こうには瀬戸内海の静かな波が見えた。

「そうか」

幸一はポツリと呟いてから、真理と同じように梅林とその背景に広がる瀬戸内海をぼんやり眺めた。

幸一は、真理の親しい女友達から苦言を呈されたことを思い出した。真理は平気な態度でいるけれど、本当は幸一の気持ち揺らいでいるのではないかと不安で仕方がないそうだ。この手の女友達のお節介情報は、多分に大げさで間違いが多く、いわゆる親友の私見になり織り込まれているもので、すべてを信用するわけにはいかないが、真理が幸一の心を信用しきれなくなるのは至極当然のこと得心がいった。

だから、この段になってもまだ平気そうに可憐な笑顔を浮かべる真理が意地らしくもあり、いわゆる親友の情報に、混ざり物が多かったのかと疑ってしまうほど真理の笑顔は自然であった。

「泣いたらしいな」

いわゆる親友の情報だが、真理は不安と嫉妬に堪りかねて、親友の前で涙したらしい。

「嫌やわ、あの子そんなこと話さはったの？」

幸一は梅を眺めたまま軽く微笑んだ。しかし、真理は幸一の反応など気にも留めずにふいと立ち上がった。

二人は梅林公園の中の休憩所で雨宿りをしていた。休憩所といっても、ベンチとテーブルが二組設置されて、茅葺をあしらった軽量サッシの屋根があるだけで、雨や厳しい日差しを避けるだけの簡易な休憩所であった。天気が良ければ、ここでお弁当を広げて楽しめる自然の中の団欒場所でもあった。

今日一日、何とか持つかもしれないと期待していた天気が崩れて、昼過ぎからは、霧のような春雨が辺りを湿らせていた。観光客もまばらで、周囲のすべての音を、霧の春雨が吸い尽くしているかのよう静寂が広がっていた。風はまだ冷たいものの、既に春の匂いを含んだ風であった。

真理は、霧春雨の幕を前にして立ち尽くしていた。あと一歩踏み出せば霧を浴びる位置に立って、潮と、芳しい梅の香りが混ざった、肌寒い風に髪を流されながらブルゾンの前をゆっくりと閉じた。

「女の涙なんかに動揺しはったらあかんわよ。女の涙なんて、理由が有って無いようなもの。これからの男の人生の参考にして頂戴」そう言って、真理は大人びた笑みを浮かべて幸一に振向いた。そしてすぐにまた海に向き直って立ち尽くした。梅の花は八分くらい開花している様子であった。瀬戸内海も濃いグレーに染まっていて、海らしい青さはどこにも無かった。空の曇った色彩が海に映えているような憂鬱な風景が漂い、波の音は湿気に吸収されてしまったのか、ここまで届いては来なかった。

真理は霧雨の境界線に立つことで、霧に包まれた広大な自然を背景にする結果となった。幸一から見ると、しんしんと降り続ける雪の優しさに似た霧春雨の、紅梅白梅に柔らかく覆いかぶさる風景が、彼の視界一杯に展開し、その奥には静かに舞う瀬戸内の波があった。そんな、静寂で、綿々と営みを続ける自然の雄大な背景に、しとやかな真理が溶け込んでいた。

「そやけど嬉しいわ。今日は幸一さんと一緒にいられて」唐突に振り返った真理が、霧が、木の葉を濡らしていく風景のような柔らかな声で心根を言い表した。真理の華奢な身体は、冷たい春

雨をただじつと受入れる梅が枝の如く、健気で可憐であった。

「俺のことを信用出来なかった？」

幸一は会話を元に戻した。

「信用はしてるわよ、あほ。不安なだけ、幸一さんの結論が……」
「俺の結論は何？」

「いけずやわあ」

真理は目元に笑みを浮かべながら、幸一に数歩歩み寄った。幸一は思わず立ち上がってぐいっと伸びをした。このままでは可憐な真理を抱き締めてしまいそうであった。

幸一は、さりげなく真理をかわして霧のカーテンの手前まで数歩歩んだ。真理は幸一と入替わるようにしてしばらくは椅子に腰掛けていたが、鶯の声がどこからともなく響いてくると再び立ち上がって、瀬戸内海に向かって腕組みをしている幸一の横に並んだ。

真理は幸一の側にはいても、腕や肩に接触して肌を寄せるようなことはしなかった。幸一も、肌を触れたいとは思わなかったが、肩が触れ合う程の微妙な距離感に、焚火の前で手を握り合った時の動物的な感触を懐かしく思い出した。

「ごめんな、あほで」

幸一はそう言って、今度はテーブルに飛び乗って腰掛けた。真理は幸一には従わずにそのまま海を見つめていた。幸一は真理の後ろ姿がふと目に留まった。ハイヒールで腰の高さがやや高くなった彼女の色気を感じながらも、なぜか女性の後姿には哀れを感じる自分が不思議であった。

「美紀とは君が心配するような仲やないよ。可愛い後輩でしかない。俺が高校一年の時に今の家に引っ越した。その後美紀も引っ越して、しばらく連絡が途絶えていた。そやから色々と積もる話があっただけや。あ、もう何度も話したな」

真理は背中で幸一の言葉を聞いている。

「でも、もう美紀と二人きりでは会わへんよ」

幸一の言葉に静かに振向いた真理は、怪訝そうな瞳で幸一を伺ったが、霧雨のためか、睫毛から瞳まで、薄く濡れているようであった。幸一は、この二ヶ月間美紀と会うことで、ばかりと空いた美紀との空間をある程度埋めることが出来て満足し始めていた。美紀も過去のいろいろな思い出話や、最近の失恋話などを幸一と交わして、ある程度満足しているようであった。

しかし、幸一が決心した最も大きな理由は、これ以上美紀と会い続けると、中学時代に超えられなかった壁を越えたいという欲望が芽生えてきたからであった。

要するに、懐かしさだけで美紀と会っていた頃は、真理に負い目を感じることには無かったが、美紀のことを再び好きになり始めてしまっている自分を発見して、急に引け目を感じ始めたのであった。

「何で？何でもう会わはらへんの？」

真理が身体ごと幸一に振向いた。

「お互いに昔の話は大方話し尽くした。美紀も話したいことはすべて話したみたいやし。これからはクラブのOB会とか、友達同士で会うとかして、たまに話が出来たら十分や」

「ほんまに？」

思わず真理が近づいてきて幸一の横に腰掛けた。そして幸一の瞳をじっと見つめて、

「ほんまに、ほんま？」

と、切羽詰ったような声で幸一の心を揺さぶった。真理の睫毛に水滴が乗っていた。

「ほんまや」

幸一もじっと真理の瞳を見つめて心から誓った。

「じゃあ、信じます。絶対よ。今度二人きりで会わはったら……うち……うち死んでしまうから」

と、物騒な言葉を吐いて、やや涙目になった目尻を小指でさっと拭いた。幸一は、真理の健気さがこの上なく可愛いと感じた。

「死ぬなんて物騒なこと言うなよ」

幸一はそう言って真理の頭を軽く撫でた。

「ごめん」

真理はそう呟いて俯いたが、彼女の頭を撫でている幸一の手を取って自分の膝の上に置き、両手で彼の手を握った。そうしてそのまま、霧の向こうに浮かぶ瀬戸内の島影に視線を合わせた。幸一も同じように黙したままで、ゆっくり移動する船影を見つめていた。

湿った梅花の、かぐわしい香りが、心を握り合った若い二人を優しく包み込んでいだ』

幸一は今、自分と一緒に賀茂川のベンチに座っている真理と、霧に浮かんだ思い出の彼女とを比べてみた。そしてその複雑な思いを抱いたまま、約束どおりに美紀に別れを告げた時のことを思い出した。

実は、別れを告げるために美紀と二人きりで会うという軽はずみな行動が、幸一と真理の、その後の関係をおかしくしてしまったのだった。

『時折、桜の花びらが風に吹かれて散っていた。駅から十分程歩いた所に河川敷があり、そこに小さな公園があった。十数本の桜の木が植えてあり、子供用の遊具もあった。小さな子供連れの家族が数組、お弁当を広げて花見をしていた。子供達は声を限りに叫んで走り回っている。

「可愛いですね、子供は」

「時と場合によるけどね」

美紀と幸一は、家族連れから距離を置いてブランコに腰を下ろしていた。

「そうか、三浦さんの妹さんはまだ小学生でしたね。可愛いですか？」

「時と場合によるね」

二人の頭上でも、満開の桜が、柔らかい日差しを嬉しそうに浴びていた。

「でも最近は生意気になってきてね、彼女は、俺を遊んであげていると思っっている節がある」

そう言っ、幸一は地面をトンと軽く蹴って少し揺れてみたが、余り気持ちの良いものではなかった。どうして子供の頃は、こんな揺れが平気で楽しかったのだろうか。

「私も三浦さんを遊んであげていると思っっていますよ」

美紀はそう言っ、春風のように優しく笑った。

「それはご親切に……。どうもありがとう」

幸一も軽く微笑んで、暖かな春風が吹く度にひらひらと舞い落ちてくる花びらが、美紀の頭に載らないものかと目で追ってみた。真理には、どこか湿った大人の美しさがあつたが、美紀には、さらりとした明るさがあつた。真理には金木犀の香りと秋の夕暮れが似合うが、美紀には桜と春の陽気がぴったり似合っていた。

幸一は、こんなに可愛い美紀と、ずっと良い友達でいたいと実感した。真理に約束してしまったことを若干後悔もした。だが、もうこれ以上、真理を傷つけることはしたくなかつた。

「今日は何だか元気が無いですね？」

美紀も軽く地面を蹴った。二人は川に向かって前後に揺れた。

「そんなことないよ」

虚を突かれた幸一が、作り笑顔と明るい語調で誤魔化そうとした。

「穂積さんと喧嘩でもしたんですか？」

川面に小波を起こしている暖かな風が、幸一の胸をすり抜けて行った。

「いいや。仲良くしてるよ」

春の日差しは、川原にぎっしり群生する草の表皮にも反射して、まるで水滴が載っているかのようにきらきらと輝いていた。

「それは良かったです」

やっと桜の花びらが美紀の頭に載った。美紀は軽く目を閉じて、微

風の運ぶ春の香を味わうかのように深く呼吸した。

「でも……」

幸一は、そろそろ覚悟を決めなければならないと腹の中で自分を叱咤した。

「でも？」

美紀は目を閉じたまま春を楽しんでいる。

「最近、真理に悪いような気がしてきた」

「今頃ですか？ そんなの最初から気にして下さいよ」

美紀は目を開けて、青空のキャンパスに、白と淡いピンクの花模様が描かれている様を見上げたが、その美しさは彼女の心には届いていないようであった。

「最初は問題なかった。でも最近……。このままだと君のことを好きになってしまいそうで……。だから負い目を感じ始めてきた」

幸一は、今日は本心を包み隠さずに話そうと決心していた。

美紀の頭から花びらが舞い落ちた。

「またカーブですか……。ずるいですね」

美紀が、ちらりと幸一の方を睨みつけるような表情を浮かべ、苛立ちの感情を彼にぶつけた。一瞬、凍りつくような冷たい驚きが胸中で小爆発した幸一は、相変わらずの青空を見上げて、一気に胸中を吐露しようと覚悟を決めた。

「実は、中学時代には自分の気持ちが良くわからなかったけど、今思うと、君のことが好きだったと思う。ただの後輩ではなくて女として。でも、なぜかそれを認めたくない自分がいて、一度もちゃんと気持ちを伝えられないまま、君に嫌われてしまった」

「嫌ってなんかいませんでしたよ」

今度は美紀の左肩に花びらが静かに舞い降りた。

「じゃあ、どうしてあんなに俺のことを無視したの？」

幸一にはもうどうでも良いことであったが、長い間の疑問でもあったので、思い切って質問をぶつけてみた。もっとも、本当のことを言ってくれるかどうかは疑問であった。

「鈍感だから」

そう言って美紀はブランコから飛び降りて、川べりに数歩近寄った所にある、丸太をモチーフにしたベンチに腰を下ろした。肩に載っていた花びらは、再び宙を舞って着地した。

幸一も同じようにブランコから離れて、桜が枝の下にある丸太に美紀と並んだ。幸一には美紀の言葉の意味が理解できずに、もう少し彼女が言葉を発するのを待った。だが、美紀はなかなか次の言葉を発しなかった。彼女も気持ちを整理している様子であった。

「私ね、中学一年生の時から三浦さんのことが好きでした。先輩としてではなくて男として。二年生になる時、三浦さんと初めてお話し出来て、それ以来、三浦さんも、どちらかと言うと私のことを好きでいて下さったことは感じていました」

この公園は河口付近にあるので、時折潮の香りが流れて来た。

「三浦さんと、初めてお話しした時に見ていた野球の試合を覚えていますか？」

「ああ。俺の友達が投げていた」

「三浦さんはあのピッチャーみたいに直球を投げてくださいませんでした。いつも変化球ばかりでとても疲れました」

人騒がせな疾風が、桜吹雪を吹き荒らしてから走り去って行った。

「落ちるカーブに曲がらないカーブだったな。でも、直球も何も、自分の気持ちをはっきりわからなかったのだから、投げようがなかったけどね」

幸一はこんな風に言われたことは今まで一度も無かったから、正直なところとても驚愕した。もしかしたら、真理も同様に感じているのだろうかと不安が走った。

「だから三浦さんと離れてみようと思って……。私も最初は辛かったけど、一ヶ月もすると慣れてきました。そうしたら、男として好きだと思っていたけど、実は先輩として懂れていただけなのかも知れないと、疑問を感じ始めたんです」

「二人とも、同じような気持ちで、同じように迷っていたわけか」

幸一には自然に笑みが零れてきた。だが、美紀は川面の小波に視線を置いたままで微動だにしなかった。

「というのは、自分を誤魔化すためにつけた後付けの理由です。本当は、私が冷たくすれば、三浦さんが焦ってもう一步進んでくれるかも知れないと期待していたんです。少しだけ賭けを試みたくです。でも、三浦さんは進んでくれなかった。ストレートを投げてくれなかった。そうしたら何となく腹が立ってきて、少し嫌いになって。でも拗ねていただけなんです。いつか元に戻ろうと思っていたんですけど、時間が経てば経つほど戻り難くて……。しかも三浦さんは引越してしまった。とても後悔していたんですよ」

再び疾風が訪れて、地面に積もった花びらを舞い上げた。美紀は短いスカートの裾を少し直した。

『好きやから一時的に嫌いになることもあるんよ』

幸一は、焚火の前で聞いた真理の言葉を思い出した。真理の言った通りであった。彼は心の奥底で真理に感心した。

「君がそんな思いをしていたなんて全く気が付かなかった……」

幸一は、美紀が自分を避けるようにして、校舎の階段で、無言ですれ違った時の、身も凍りつくような冷たい思いが、心の記憶から蘇ってきて、折角の陽だまりで温まった心が底冷えしたようであった。

「だから、三浦さんは鈍感だって言ったでしょ」

美紀は一瞬、自然な笑顔を浮かべたが、ふっと灯が消えたような表情に沈んでいった。

「もう会うのは止めにしましょう」

美紀が、その言葉の意味するところとは正反対に、明るい語気で提案したが、幸一には刹那の視線もくれずに、桜を見上げて深呼吸をした。それから漸く幸一に瞳を向けて、

「実は私も、何となく潮時かなって感じていたんです。いつまでも三浦さんや穂積さんに甘えてはいけなく思っていました。思いう話もたくさん出来たし、三浦さんのことも色々教えて頂いたのもう十分です」

と、あっさりとした口調で胸のうちを吐露した。

「それに、何度か三浦さんに遊んで頂いて、中学時代に失った時間を取り戻せたような気がしました。私が変な意地を張って失ってしまったものを、少しは取り戻せたような気がします」

そんな彼女の言葉を聞いていると、幸一は急に寂しさがこみ上げて来て、ほんの二ヶ月間の楽しかった思い出が、ただただ寂しい感情の波となって、彼の胸の中で飛沫をあげた。

幸一も美紀と同様に、あたかも中学時代に戻って、失った二人の時間を取り戻しているかのように実感していた。そしてこの二ヶ月の出来事は、美紀に避けられていた頃の寒い記憶の穴を塞いでくれたように感じる。美紀も同じ様な感覚であったということは、幸一が感じた通り、二人で過去と現在を一緒に旅していたことになる。だが、確かに失った空間を埋められたような満足感はあるものの、美紀との関係においては中学時代と同様に中途半端な関係を築いただけであって、あの頃から何も進歩してはいなかった。

『またカーブですか』

と、さっき美紀が口走った言葉の意味が漸く理解出来た。そして気付かされた。自分が既に美紀のことを好きになっていることを……。きっと美紀にも感じ取られているのであろう。それを、好きになっってしまうかも知れないなどと表現したから、またカーブなのかと言われたのだ。

「俺も、君と同じように過去の空虚な記憶を埋めていた。俺たちは同じことをしていたことになる」

幸一は、自分の反省点に関しては何も言わなかった。

「そうですか。でも、過去を埋めてみたところで、少々の満足感はありませんでしたね」

美紀はまたしても、幸一と同じ感想を述べた。

「二人で過去と現在を旅していただけだね」

「うまいこと言われますね。いつからそんなロマンチストになられたんですか？」

「昔から、敏感な感受性を備えたロマンチストだと思っているけど」
幸一は、照れ笑いをしながら会話を少し茶化した。だが美紀は、悲しくなるほど春らしくて長閑な風景をぼんやりと眺めたまま、
「いずれにしても、もうお二人に迷惑をお掛けすることは出来ません」

と、強い口調で言い切った。幸一の心に氷の棘が刺さった。

「何も迷惑なんて掛かっていないよ。真理も全然気にしていないし」
幸一は暖かい日差しを受けながら、冷たい春雨の霧に浮かんだ真理の眼差しを脳裏に浮かべていた。

「そうですか。でも、三浦さんは鈍いから気が付いていないだけで、本当は穂積さん、嫌がっていると思いますよ」

幸一は、確かに自分は鈍いと感じた。真理の本当の気持ちを考えようとせず、彼女の思いやりの言葉を真に受けて、自分に都合の良いものだけを視界に入れてきた。

「鈍いのかなあ。昔から敏感な感受性を備えたロマンチストだと思っっているけど」

と、先ほど相手にされなかった冗談を再び吐いて、雰囲気や和らげようと努めた。

「鈍感ですよ」

目の前を川が流れているためか、不意に梓川の清い流れと、清々しい清涼感のある気の香りが脳裏に浮かんできた。すると、

『美紀ちゃんは幸一さんのことを今でも好いてはる』

という、焚火の前での真理の言葉が、一本の火柱のように記憶から蘇った。そして戸惑った。

幸一は、今も鈍感だと言われているような気がしてきた。美紀が無理して別れようとしているのに、無理をしていることに全く気付かずにいることを鈍感だと言われているような気がした。

過去の空虚を埋めて満足だと言った、美紀の言葉を鵜呑みにしていることを鈍感だと言われているような気がした。

今でも幸一のことを好きだという気持ちを、わかって欲しいと言

われているような気がした。

だが、自ら別れを言葉にして、平然としている美紀の隣にいと、どれも考え過ぎのような気もした。彼女はいつも真理のことに気を置き、迷惑を掛けないようにして過去の失敗を埋めようとしていた。

少しの間だけ、幸一とデートをして恋人気分を味わいたかっただけ。ただそれだけなのかも知れない。そう考える方が自然であるように思えてきた。

幸一はゆっくりと立ち上がった。別れは寂しいが、このまま一生会えない訳でもない。そうして、幸一にとっては一番の疑問であった、過去の経緯も明確になったし、当時言えなかった思いも、過去の言葉として伝えることが出来た。今更美紀の気持ちを色々推察してみても仕方の無いことであった。

「またOB会でもやろう」

幸一は大きく伸びをして、枝の隙間から青空を覗いた。もしかしたら、中学時代に言えなかったことを言いたくて、この二ヶ月間、美紀と接していたのではないかという思いが芽生えてきた。或いは、美紀が幸一のことを、突然避け始めた理由を聞くために接していたのかも知れない。

「そんなの行く訳が無いでしょう。どこまで鈍感なんですか！」

美紀が座ったままで幸一を睨みつけてから、

「どうして、たった一言を言ってくれないのですか？昔も今も、たった一言を……」

と叫んだが、最後は声になっていなかった。美紀の瞳から涙が溢れて、地面に咲いた桜の上に落ちていった。幸一は立ち尽くしたまま彼女の震える肩を見つめていた。

「ずっと待っていたのに。ほんの少しでも、私のことを好きでいて下さるなら、穂積さんへの愛情の百分の一でも愛して下さるのなら、言葉にして欲しい。どうすればわかって頂けるんですか……」

美紀は俯いたままで、涙を零しながら嗚咽した。

幸一は、再び彼女の横に腰を掛けて、嗚咽が止まるのをじっと待っていた。

『女の涙なんかに動揺しはったらあかんわよ』

真理の言葉が自然と思いい出されてきた。だが、幸一にはこの事態を放置することは出来なかった。しかし、いくら切望されたとはいえ、このタイミングで好きだと言っても白々しいだけで、却って失望させてしまう気がした。

十数分も経過しただろうか。漸く美紀の嗚咽が止まり、涙も止まった。いつの間にか風が強くなっていった。

「ごめんなさい。三浦さんとお別れすると思うと、気持ちが混乱したみたいです。今言ったことは忘れて下さい。三浦さんに一方的に期待ばかりして、自分は何もしていませんでした」

美紀は、涙の痕跡が残る瞳で幸一を見つめた。幸一もじっと美紀を見つめ返した。

「最初から私が言えば良かったんですね。三浦さんのことが好きですと。そして今も大好きです。愛しています。だから、穂積さんと幸せになって下さい」

美紀の瞳に残っていた涙が、風に流されて、桜と共に宙を舞ったように見えた。

幸一は、美紀の一寸な表情を堪らなく可愛いと感じた。そして、過去の思い出ごと抱き締めるように、美紀の肩を抱き寄せた。美紀は、幸一に身を委ねて彼の胸に顔を埋めた。潮の香りが、少しの間漂っていたがすぐに流れていった。幸一の胸の鼓動が大きく響き、美紀にも聞こえているはずだった。

その鼓動が百も打った頃、美紀は意を決したように、暖かな寢床から抜け出る時のような未練を残して、静かに彼の胸から離れた。

そうして、美紀が幸一を見上げた瞬間、幸一はそっと口づけをした。そのわずかの間に、二人の心は再び過去へと旅をした。過去に戻って心を開放しあった。正直に気持ちをぶつけ合った。二人の描いたすべての想い出を再び体験したような気がした。

「ありがとう」

旅から戻った美紀がにこりと笑った。

「口下手でごめん」

「やつと思いが叶いました。とても幸せな気持ちです。もう、お別れですけどね……。今日のことは一生忘れません」

そう言って美紀はすらりと立ち上がってから、

「いろいろお世話になりました。いつか二人とも大人になって、どこかでまた会えたらいいですね」

と言って、丁寧にお辞儀をした。そして、桜吹雪に包まれながら公園を抜けて、舞い乱れる桜に紛れて見えなくなっていった。美紀は、二度と幸一を振り返ることは無かった。そして幸一は美紀から一度も目を離すことは無かった』

幸一は、桜吹雪の中での別れを思い浮かべて、本来なら、この思い出だけでも切なくて悲しい大事件であったのに、その後に真理が引き起こした事件のお陰で、その印象さえ薄くなってしまっていた。霧雨に覆われた梅林で、美紀とは二度と会わないと真理に約束した。厳密に言えば、幸一は約束を破ったことになるが、彼にすれば、きちんと説明して別れたかった。別れるために会うのだから、別に構わないと思い込んでいたが、どうやら真理にはその論理は通じなかった。

あんな大騒動を起こした真理が、今、横に並んでいることが可笑しくもあった。幸一は、二人がこれから語ろうとしている事件を思い起こしてみた。

『美紀と口づけを交わした日から数日後の水曜日、いつものように、真理の教室を覗いて一緒に帰ろうとしたが彼女は不在だった。真理を目で捜しながら怪訝そうにしている幸一を見つけた例の親友が、幸一を廊下の隅に追い詰めてから、貴重な情報を提供してくれた。

彼女の情報によると、真理は午後から体調が悪いと言って帰った

そうである。だが、どうやら体調が悪いというのは嘘で、本当は、幸一が美紀と会っていたという噂が流れていたらしく、それを耳にした真理がショックを受けて帰宅したらしい。誰がどこで見ているのか不思議で仕方がない。

親友の話では、幸一が、美紀と二人きりで会わないと約束してくれたことを、真理がとても喜んでいたという。そして彼女の前でも、もし、幸一が嘘をついたら死んでしまうと云ったそうである。

幸一は親友に対して、美紀とあった目的と、予定通りに別れた旨を説明してみたが、約束を破るのは許せないとの一点張りであったので、情報提供についてのお礼だけを述べてさっさと帰宅した。

幸一は、何とはなしに不吉な感覚が脊髄に宿っていた。まさか本当に死んだりほしらないと思うが、真理と約束したときの、彼女の異様なまでの真剣な眼差しが記憶の中で不安を広げていた。

幸一の不安は的中した。その日の夜八時過ぎに、真理の母親から電話があった。真理が幸一の宅へ来ていないかという問い合わせであった。幸一は母親から状況を聞き出して、慌てて家を飛び出した。

父親のバイクを拝借して夜道を疾走した。三月の夜の空気はまだまだ冷たかった。エンジンの苦しそうなうねり声には構いもせず、アクセルを全開にして走った。風の冷たさのために目が潤んで、目尻から涙が飛び散った。真理の家まで電車を使うと一時間程かかるが、バイクだと三十分程で到着した。

幸一は、メットをハンドルに掛けてから少し気を落ち着かせた。ハンカチで鼻水や涙を拭いてから、髪を手櫛で直してインターフォンを押した。すぐに返事があつて、玄関の引き戸がガラガラと音を立てて開いた。そのドアを開けてくれた若い女性を見た瞬間、幸一は思わず叫びそうになった。真理にそっくりな少女であった。そして彼女の背後から母親の声がして、

「ごめんね、三浦君、わざわざ来てもろうて。今夜も主人は東京やさかい、助かるわ。女二人やと不安やさかい」

と、廊下に座りながら幸一を迎え入れた。

「妹の秋子です」

真理にそっくりな女性が挨拶をした。真理と同様に、小柄で色白であった。特に目元が極似していて、母親とも似ている。年齢は美紀と同じはずだが、美紀よりは幼い感じがした。

「どこか、真理さんのいらっしやいそうな場所は？」

と、幸一は尋ねた途端に恥ずかしくなった。そんなことを殊更確認しなくても、既に手を尽くしているのに決まっている。

「ええ。親戚とか、思い当る所はすべて連絡しました」

母親は丁寧に合わせてくれた。

「警察へは届けられたんですか？」

「ええ、ついさっき」

「とにかく捜してみましよう。どこか近くにいるかも知れないし」
そう言って、幸一は再び玄関を出ようとした。

「十時には一旦戻ってきます」

と、振り返って告げた後、さっさと外へ出て行った。

幸一は、バイクで近所の公園や川の堤防、神社、寺、図書館、喫茶店、彼女の通った小学校や中学校などを一通り捜したが見つからなかった。次に高校周辺の公園や、よく行く喫茶店、ファーストフード店などを覗いて回った。姫路の繁華街まで来たが、夜の繁華街で真理の行きそうな所など無かった。ゲームセンターなども見てみたが、彼女が入るような雰囲気のお店ではなかった。

駅前の地下街に降りて、暖房の暖かい空気に触れると、全身の筋肉の緊張がほぐれて身体は一休み出来たが、心の緊張は全くほぐれなかった。ぼんやりと、遠い耳鳴りがしているような感覚であった。

ほとんどの店がシャッターを下ろしていたが、今ちょうど閉じようとしている売店があった。幸一はそこで売れ残りのメロンパンを買った。彼はそのパンを革ジャンのポケットに押し込んでから地下街を飛び出して行った。どう考えても、ほとんどの店が閉店した薄

暗い地下街に真理がいるとは思えなかった。

十時半になろうとする頃、幸一は真理の家に戻った。真理を捜し出せないもどかしさと、真理の母親や秋子の落胆する表情を見るのが辛くて、俯き加減で力なく報告をした。そんな幸一の心根を察してか、

「ご苦労様、寒かったでしょ。ほんまにごめんね」

と言って、母親が彼を暖かく招き入れてくれた。幸一には、その明らかな作り笑顔が却って辛かった。

幸一は、案内された応接間の黒革のソファにどっかりと腰を沈めた。暖かな空気と冷え切った身体。不安を募らせる家族の哀れな心境と微かに感じる疲労感。ゆっくり目を閉じると、深い沼底に落ちて行くような、苦痛を伴う快感と、目眩に似た脳内の揺らぎが怒濤のように渦巻いた。幸一はすぐに目を開けた。まだ安らぎの時間を得るには早過ぎると思った。

「ご迷惑をお掛けしています」

秋子が湯気立つコーヒーを運んで来てくれた。少し膝を曲げてカップを優しくしなやかに置く姿を見ると、今度は美紀よりも大人びて見えた。幸一は、ぼんやりと疲れた瞳で秋子の目元を見つめていると、そこに真理がいるような錯覚を覚えた。

「ごめんな」

と、思わず口から出た自分の言葉に彼は驚いて、ばかりと幸一を見つめる秋子の瞳がより一層真理に似ていて、次の言葉を探し得なかった。

「え？」

彼女も軽く驚いた表情を浮かべた。その瞬間のあどけない幼さが幸一の心に特殊な興味を抱かせた。その幼さの上に滲んだ艶やかさは、美紀のからりとした明るい可愛さとは対照的で、真理と同様に潤いがあった、幸一の心に素直に溶け込んで来た。

「コーヒーをありがとう。お姉さんを見つけられなくてごめん」

「いえいえ、ご迷惑を掛けているのは私たちの方ですから」

秋子は少し頭を下げてから、

「母が何か作っていますから、お楽にしています下さい」

そう言い残して部屋を出て行った。幸一は、微かに残った秋子の淡い残り香を感じながら、再び、先の見えない不安な心境へと迷い込んでいった。彼は一人で温かいコーヒーをすすりながら、何度も何度頭の中で繰り返し返される、不安と罪悪感と自己弁護の言葉で、後悔する余裕すら与えられなかった。

万が一にでも、真理が自傷したり事故にあったりしたら……。真理の行動も確かに軽薄に過ぎるが、幸一が約束を破ったのは紛れもない事実である。美紀との別れを電話で済まされなかったのは、きちんと説明するのが礼儀だと考えたからであるが、微かに未練のようなものを感じていたのも事実であった。ちゃんと説明して友人関係を継続しようと目論んでいた。要は、二人の女を、それぞれ自分の都合の良い引き出しに置いておこうと努めたのである。どんなに自己弁護をしても、彼女の身に何か起これば、一生涯、罪悪感を背負っていかねばならないのは間違いないかった。

しばらくして、秋子がお盆に温かそうなうどんを乗せて、そよそよと歩いて来た。そして、はんなりとした出汁の香りが応接間に充滿した。幸一が思わず身を乗り出して、テーブルに置かれたうどん鉢を覗いた瞬間に、電話の冷たい呼び鈴が廊下で響いた。その刹那、不安と緊張と絶叫に近い、全員の心の波動がすべてのものを排他した。出汁の香りまでもが凍りついたように、幸一たちの意識から忘却された。

その無重力に近い心の状態でも、秋子は一心に電話機を目指して早歩きに努め、震える手で受話器を耳にあてた。幸一も、夢の中で疾走するような歯がゆい感覚で彼女のそばに辿り着いた。

そんな、極限まで張り詰めた空気の中で、動揺に耐えながらも、必死で電話の応対を始めた秋子がとても凜としていて、幸一の胸に熱い波紋が広がった。

『夏に生まれたのに秋子なの』

なぜだか、いつか聞いた真理の言葉が思い浮かんできた。

「はい、穂積です」

母親も走り寄ってきた。二人は、秋子の表情を瞬きもせずに凝視した。受話器の向こうの相手に回答する毎に、秋子の顔色が青ざめていく。

「はい、警察？ 事故？」

思わず口にした秋子の言葉で、母はその場に崩れかけた。幸一が母の身体を片腕で支えながら、秋子が手にしている受話器を奪おうとして、秋子の柔らかな手に触れた。一瞬の躊躇の後、彼は強引に奪い取ってから、秋子に母を支えるように目で依頼した。

「市民病院ですね、わかりました」

幸一の復唱する言葉に、母はしゃがんだままで、哀願するように幸一を見上げた。目尻に浮かんだ皺が哀れであった。幸一は受話器を置いた。

「大丈夫ですよ、暴走族の事故です。身元不明の重体で意識もないそうです。年齢が近いので、念のために連絡をくれたそうです。真理さんが暴走族と係わるはずはないですけど、一応確認してきます」

「申し訳ないけどお願いします。夜道なので気をつけてね」

母はそこまで言うのが精一杯で、秋子に腕を抱えられたまま廊下に塞ぎ込んだ。秋子は泣いていた……。

幸一はバイクで夜道を疾走しながら、どこかの川にでも突っ込んで死んでしまいたいという衝動に駆られた。秋子や母親には暴走族の事故だと言ったが、正確には、暴走族に巻き込まれた事故であった。十七八の少女が横断歩道を渡っていた。そこへ暴走族のバイクが数台、停車している自動車を追いついて信号を無視して交差点を突っ切ろうとした。歩行中の少女を発見し、急停車しようとして横転した一台のバイクに衝突されて、少女は重体となった。その少女はデニムスカートに濃紺のブレザースーツを着ていた。

それは、いつかの真理と同じコーディネートであった。幸一が急

に大人びた真理の姿に困惑して違和感を覚えた時の衣装と類似していた。真理は、家族が不在の時に出て行ったので、今日の真理の装いを誰も知らなかった。今はただ、重体の少女が真理である可能性が決して少なくないという事実だけが、幸一を自暴自棄な行動へと誘っていた。

もしも、その少女が本当に真理であつたなら、幸一も生きていてはならないような気がしていた。自殺ではなく、例え事故であつたとしても、彼女の生命が絶たれたり、生涯に残る傷を負ったりしたら、幸一は生きていく資格が無いと感じていた。

十五分程で市民病院に到着した。幸一はバイクのエンジンを切つてからふと星空を仰いだ。どこかで運命を操っている何者かが見下ろしているような気がした。そしてその何者かに、天に叫びたかった。幸一は心の中で叫んだ。力いっぱい懇願した。真理が無事であることを、被害者が真理でないことを懇願した。自分の寿命を十年縮めてもらっても良いと誓った。真理と初詣に行った夜、真剣に祈願をする人々を哀れんでいた自分が、今の自分を冷笑していた。しかし、数多の星たちは幸一に同情する様子もなく、普段どおりの単調な瞬きを続けていた。

幸一は、夜間専用の通用口から入り、受付で事情を話した。若い看護師がどこかに電話をして確認をとった後、幸一を案内してくれた。夜の静まりかえった暗い通路を、まるで見えないロープで繋がれて連行されるような心持で、看護師の後を付いて歩いた。看護師が、ある部屋の前に立ち止まってその扉に手を掛けた時には、ひたすら祈りの言葉を心の中で繰り返すことしか出来なかった。一步一步入口に近づきながら、早く確認したい気持ちと、結果に対する恐怖心が入り混じって、下半身の力が半ば抜けかけていた。耳鳴りと心臓の鼓動だけが頭に響く中、看護師に示された患者の顔を覗き込んだ。

彼女の顔を見た瞬間には、違和感と安堵感が幸一の中を駆け巡り、温かい血流が静かに緊張をほぐしていった。真理ではなかった。し

かし次の刹那には、目の前に横たわっている被害者の歴然とした事実を認識して、愕然たる悲哀の感情が押し寄せてきた。今は身元不明でも、やがてこの少女の身内や友人がここを訪れて、何とか幸一が免れ得た、悲痛のどん底に誰かが確実に陥るのであった。

幸一はとうとう下半身の力が抜け切って、その場にしゃがみ込んでしまった。

「大丈夫？」

と、看護師が優しい声を掛けて、幸一の横に膝を曲げて並んでくれた。

「大丈夫です。僕の知り合いではありません」

「そう、良かったですね」

幸一は小さく吐息をついてから、

「あまり喜べないですよ。実際に怪我をしている人が目の前にいますから」

と、包帯に包まれて、体中に管を通された患者の姿を見ながら呟いた。

「いいのよ、心の中では素直に喜べばいいの。後は私たちがしっかりと看病しますから、あなたは早く家に帰りなさい」

幸一は、大人の女性の優しさを感じた分だけ、自分の不甲斐無さを痛感した。幸一はゆっくりと立ち上がって、もう一度患者の寝顔を見つめた。何とか助かって欲しいという気持ちがかみ上げてきた。

「頑張れ」

と、幸一は小さく呟いてから部屋を後にした。看護師がしばらく幸一の腕を支えながら歩いてくれた。

「もう大丈夫です。ありがとうございました」

そう言って、幸一は看護師の瞳を見つめた。さっきまでは緊張で何も見えていなかったが、こうして落ち着いて見ると、彼女の年齢は幸一と左程変わらないような気がした。

「あなたは優しい人ね」

看護師が夜間通人口まで送ってくれた。

「看護師さんは強い人ですね」

彼女はにこりと健康そうに笑ってから、

「一応女性よ。強いと言われても素直に喜べないけど、でもありがたい。気をつけて帰ってね」

と言いついて仕事に戻っていった。

幸一は星空を見上げた。心の中で感謝の言葉を何度も繰り返した。しかし、やはり星たちはいつもと同じ態度で接していた。

第二話 再び一（前書き）

高校時代の別れの場面を思い出しながら二人の心は再び距離を縮めていけるのか？

第二話 再び 一

幸一は、あの事件での最大の緊張感を強いられた場面を思い起こして、少々冷汗をかいてしまったが、日没前の涼やかな川風に、過去から持ってきた冷汗をさらりと乾かしてもらった。隣にいる真理も、気持ち良さそうに涼風で髪を洗っている。幸一は更に深い刻印が残る、その後の事件の結末に思いを馳せた。

『柱時計が0時を告げた。控えめな音量で、深みのある音色を響かせた。応接間のソファーに、幸一と秋子が向かい合って座っていた。母は寝室で横になっていた。幸一が病院から戻った時には、ふらふらと部屋を出てきたが、幸一の報告を聞いて少しは安堵したものの、すぐに寝室に戻った。』

「もう0時やのに……。いったい何してはるのやろ」

秋子が、もう何度も口にしたフレーズを繰り返した。幸一が病院から戻って来てまだ十分程度しか経っていないのに、もう何時間も経っているような気分であった。応接間に置いてあるストーブの温かみで、幸一の冷えた身体が漸く元通りに活動できるようになってきた。

「お姉さんの部屋を見せて欲しいんやけど、かまへん？」

幸一が、手持ち無沙汰を紛らわせるために提案した。秋子は一瞬迷ったようだが、幸一を労わるような優しい笑顔を浮かべて、

「いいですよ」

と、真理にそっくりの声色で幸一を惑わせた。秋子の後について階段を上がって行った。一段上を歩いていると、秋子は幸一より背丈が低かった。

「お正月にもお邪魔したんですよ」

幸一の声に振り返った秋子の肩が、彼の胸に触れた。

「ええ」

彼女はそう言うと、やや歩を速めて幸一との距離を空けた。秋子が先に部屋に入って灯りを点けた。主のいない部屋は、寂しい雰囲気

に満たされていた。

「お邪魔します」

そう言って幸一は、部屋に足を踏み入れて周囲を見渡した。そして彼の視線は一点に釘付けとなり、再び鼓動が激しくうなり始めた。秋子は、恐る恐る幸一の瞳を横から覗き込んだまま、なす術も無くその場に立ち尽くした。

「俺は何て馬鹿なんや。何で、もっと早く気が付かなかったんや！」
そう言ってから彼は秋子に振り向いて、

「お姉さんのいそうな場所がわかったよ。今から行ってくる」
と、やや興奮気味に告げてから階段を駆け下りて行った。幸一が見つめていたのは、壁に掛かった、襟元にファーの付いた白いコートであった。

幸一は円教寺に続く、書写山の西坂参道を駆け上っていた。秋子に手渡された懐中電灯を片手に無言で登り続けた。次第に息が上がってきて、口と鼻から吐く息が、白い軌跡を残して闇に消えていった。若い女が、こんな人気の少ない山中に一人にいるとは常識では考えられないが、幸一には自信があった。秋子に話した時もすぐに同意してくれた。

『初めて二人で出掛けた所でしょ？わかるような気がします』

秋子はそう言って、幸一のために懐中電灯を用意してくれた。二人の心に希望が出てきたためか、玄関で、秋子から懐中電灯と搜索の委託を受けた時に、今まで全く感じていなかった羞恥を覚えた。

幸一は、時折立ち止まって息を整えながら星の瞬きを見上げた。今度は祈る気持ちはなかった。自信があった。そして、真理は幸一の到着を待ち侘びているような気がしてならなかった。彼は再び走り始めた。徒歩で四十分程度の道のりを二十分程で駆け上り、『妙光院』の横を通り過ぎた。『湯屋橋』を渡り、正月に御神籤を引いた『魔尼殿』の前を通り過ぎた。そして『三つの堂』の広い境内に辿り着いた。

だが、そこには人影も人の気配も無かった。幸一は、月明かりとわずかな電燈の明かりと懷中電燈を頼りに、駆け足で辺りを捜し回った。

「幸一さん」

大講堂と食堂の間から人影が現れた。

「よお。やっぱりここにいたか」

そう言って、幸一は彼女に駆け寄った。真理は嬉しそうに笑っていた。月明かりに白く浮かんだ笑顔が妖美であった。

「きつと来てくれると思うてました」

幸一は、真理を抱き締めたい衝動に駆られた。

「こんな人気の少ない場所に、一人でいたりしたら危ないやろ」

幸一はそう言いながら、月明かりが届きやすい、大講堂の石階段に真理を誘ってゆっくり歩んだ。

「だから隠れてたの。誰も通らはらへんかったわ」

こんな平日の夜中に、寺の関係者以外に人がいるはずもなかった。

「それはそれで不気味やろう」

「人がいるほうが怖いって言わはったのは幸一さんよ。」

二人は、ゆっくりと大講堂の中心にある石階段を上がり、大講堂の板敷きの縁に腰を下ろした。

「ごめんなさいね。みんな心配してはるやろね？」

「当たり前や。秋子さんも心配してたぞ」

なぜか、秋子の名前が一番に思い浮かんだ。真理は幸一の身体にびたりと身を寄せてきた。

「ああ、しんど」

幸一は、真理の顔を見て安堵したためか急に疲労感を覚えた。

「ほんま。幸一さんの身体は火照ってはるわ。うちは冷め切っているのに」

幸一には彼女の言葉が冷たく胸に残った。

「お腹空いたやろ」

そう言って、幸一は地下街で買ったパンを取り出した。革ジャンの

ポケットに埋もれていたメロンパンは、押しつぶされて変形していた。

「ありがとう。温かいわ、このパン。見場は悪いけど」

幸一も、反対のポケットにあるもう一つのメロンパンを取り出した。無意識のうちに、同じものを二つ買っていたことに自分で驚いた。

彼は袋を開けてひとかぶりしてみたが、温かくなかった。真理も少しちぎって口に運んでから、

「温かくておいしいわ」

と、再び意味深な言葉を吐いた。

「星空って温かいなあ」

幸一は病院に入る前のことを思い出した。あんなに冷ややかな態度だった星たちが、真理を、いや、幸一を救ってくれたような気がした。

「この前は、悲しいて言うたはったやないの」

真理は細かいことを指摘する割には、別にどちらでも良いといった風であった。

「御守りのおかげかな？ 君を見つけられたのは……」

本当は、最悪の事態を免れ得たことを御守りのお陰だと言いたかった。

「私があげた御守り？」

嬉しそうに、真理が幸一の瞳を覗き込んだ。

「ああ」

そう言って、幸一は内ポケットから財布を抜き出し、御守りを取り出した。

「持っていてくれはったんやね、ありがとう。とっても嬉しいわ」
しかし、真理は言葉ほどには嬉しそうな表情は浮かべずに、静かに俯いていた。

「ごめんな、約束破ってしもて」

真理は俯いたまま、膝を抱えるように身を丸めて幸一に身体を寄せていた。

「でもな、美紀と会ってきちんと話をして、理由も説明して、もう二人きりで会わないで美紀も納得してくれた。電話で済ませるのも失礼やし、正しく伝えにくいから会ったんや」

「でも、約束は約束です」

幸一には、真理の言葉が意外であった。真理は、幸一が美紀と会ったという事実だけで腹をたて、無謀な行動に出たと思っていた。だから、本来の目的を達するために美紀に会ったことを説明し、目的が果たせたことを伝えれば誤解は解けると考えていた。それ故、真理の頑固な言葉は幸一には解せなかった。ただ拗ねているだけなのかも知れないと考えて再度説得してみた。

「確かに約束を破ったことは申し訳ないと思うし何度でも謝る。そやけど、美紀に会いたくて会った訳でもないし、君との約束を守るために会ったんや。一度くらい余計に会っても問題無いやろ」

幸一は、この際多少の嘘は仕方ないと思った。最後に美紀に会いたかったのは事実であった。心のどこかで、友人という形で細く長く付き合いたいという希望もあった。

「そうやね、何度も会ってはるもの。今更、一回位余分に会わはったかて何がどうなるものでもないわね」

真理の声は快活で、何かが吹っ切れたような感が漂ってきた。

「幸一さんは、大きな約束を守るために小さく約束を破らはった。目的達成のためには少々無理な手段でも使う。男の人らしい行動やし、私たちがこれから人生を生きていくには必要な考え方やと思うそやけどね、女は……いえ、私は、嘘を吐かれると、その人そのものが信じられへんようになるの。まして『絶対よって』大袈裟やっただかも知れんけど、私が命を懸けるとまで言った約束を破られたりしたら……。もう幸一さんが何を言わはっても、何をしはっても、幸一さんのすべてを疑ってしまう。信じたくても心のどこかで幸一さんを疑ってしまう。そんな自分が嫌やし、そんな葛藤を続けるのは耐えられへんわ」

「ごめん。もう二度と嘘はつかへんよ」

「もう遅いわ。何言わはっても、幸一さんの言葉が軽く聞こえます。そやさかい、もう、今までみたいに親しいお付き合いはやめましょ」真理はそう言いながらも、先刻より更に身体を寄り添って幸一に密着していた。身体はこうしてしっかりと触れ合って温かみを生み出しているのに、心はねじれ方向にすれ違って、真冬に窓を開けた時のように、冷たい気が心の空間に流れ込んで来た。

幸一は、これが振られる側の気持ちなのかと、初めての体験を心の隅で冷静に眺めながらも、何かの検定試験などで不合格を突きつけられて、現実の不甲斐無い自分を目の当たりにした時のように、心細い切なさで無力感と惨めさが入り混じった落胆が、一瞬で身体中を駆け巡った。

「あつ、流れ星！」

真理が、もう別れ話を打ち切りたいとばかりに声を変調した。幸一は、まだ別れ話を振り出しに戻せないかと、真理が押しやった会話の流れに未練を残しながら、ゆっくりと流れ星の去った星空を見上げた。そこには流れるような光の波はなく、普段の単調な輝きの小波が静かに揺れていた。

「あの子が死んだのかな……」

「あの子？」

「君の身代わりかも知れへん」

「身代わり？」

薄い闇にも目が慣れてきたのか、真理のあどけない表情が悲しくらいに愛らしかった。

「君と同じくらいの歳格好の少女が交通事故に遭って重体だと、警察から連絡があつてね、慌てて病院まで確認に行ったけど君ではなかった。正直ほっとしたけど、目の前の少女は現実に重体で、気の毒で、俺が免れた悲惨な思いを誰かが確実に体験すると思ったら辛くて……。何もできずに出てきてしもた」

「そうやったの……。幸一さんにも辛い思いをさせてしまったわね、ごめんなさい」

幸一は、今も十分辛いよと、心で呟きながら星空を見上げて両手を合わせた。

看護師は、他人の幸一に詳しい容態は言わなかったが、警察からの最初の情報では、危険な状態だから早く確認に行くように言われた。また、ベッドに横たわって全身に管を通された姿を見た幸一にとっては、彼女が死んでしまったことがごく自然に感じられた。真理も同じように手を合わせて目を閉じた。

しばらくの間、星の輝きに打たれるように、二人は静かに膝を抱いて、互いの身体の温かみを有難く感じていた。

「もう信じてくれへんのか」

吐息を吐くついでに放ったかのような力ない声であった。

「そうね」

真理の声にはどこか力強い響きがあった。

「君にとって人を信じるってどういうこと？」

幸一は美紀とも交わした話題を思い出した。

「難しいわね。その人が私に誠実に接してくれるかどうかやと思う。誠実に接してくれる人は信用できるわ」

「誠実ってなに？」

一瞬のしじまが訪れて、真理は足元の石段を足で撫でた。

「一時的には自分の我を捨ててでも、相手のために行動できる人かな。相手が家族であったり、恋人であったり、仕事であったり。夢であったり目標であったり」

幸一は真理の言葉に違和感を覚えた。

「じゃあ、自分を犠牲にしても君に尽くす人が信用できる人っていうことか？」

「尽くしてもらわなくて結構よ。他の人たちより少しだけ私のことを大事に思ってくれはって、嘘を言うたり、約束を破ったり、私のことを試したりしはらへんかったら、簡単に信用するわよ」

「たった一回でも約束を破ったらもう信用されへんのか。厳しいな」
幸一は自嘲気味に軽く笑った。真理も笑顔を浮かべて、

「幸一さんが約束を破らはったのは確かに一つのきっかけやけど、幸一さんを信用出来なくなったのはそれがすべてやないの……」
と言って、両手で口元を覆ってから息で手を温めた。

「じゃあ、なんで？」

幸一は、真理の両手を彼の両手で包みこんで温め始めた。

「感じたから……」

幸一は真理の言葉に啞然として、しばらく呼吸をすることさえも忘れた。

「幸一さんは信用できない人やって感じたから。いつも誠実でいてくれはる人やないって感じたから」

真理の手は氷のように冷たかった。幸一は、どうにも理解し得ない彼女の説明に絶望的な距離感を感じながら、まだどこかで修復を望んでいた自分の甘さを嘲笑した。

「非論理的やな」

幸一は、糸の切れた凧が谷底に舞い落ちて行く様な絶望感と、諦めの決意をしたことによる、ある種の開放感を同時に感じながら彼女の手を温め続けた。

「女の脳はね、男ほど単純やないから、何から何まで論理的に説明できないのよ」

そう言って真理はくすりと笑った。

「なかなか都合のええ理論やなあ」

幸一も苦笑に近い笑い声を漏らした。

「君は感性で判断するんやね。俺は信じたいと思ったら信じるし、信じたくないと思ったら信じない」

「幸一さんらしいわ」

真理は少し幸一の肩に頭を預けてから、

「そうやね。そういう部分もあるわね。もしかしたら私はずっと幸一さんのことを信じたいと思って来ただけなのかも知れへんわね」と、付き合ったというには余りに短すぎる数ヶ月を思い起こして、懐かしむような語気を漂わせた。

「ずっと心のどこかで、胡散臭い奴やと感じていながら、信じる努力をしてくれていた訳か」

幸一は明るく笑いながらも、真理は、自分の心の動向をずっと把握していたのではないかといった薄気味悪さを感じた。

幸一は、このままもう少し別れの余韻を味わっていたいような気がした。この山を降りてしまえば、もうただの友人になってしまいういや、きつとろくに口も利けない関係になってしまいうと予感した。結局、真理のことも美紀のことも美しいと思ったし、愛らしく感じたし、熱く感じるものもあった。いつも側に居たいとも思った。だが、こうして側に居ても左程幸福感はなかった。いつものことであった。

真理の心は離れてしまっているのに、こうして別れの絶望と、自然と蘇ってくる思い出の中の甘い空気を味わっている時間が自虐的でもあり、心地良くもあり、このまま二人で死んでしまおうかといった衝動的な波も訪れて、なかなかこの空間からの離脱を決意しかねていた。

「そろそろ帰らないとみんなが心配しはるわ」

彼女の手がもう少し温まったら帰ろうと決意しかけていた幸一の心を、真理の言葉が落胆させた。ここでも先に大人の行動をされてしまった。この『三つの堂』に来てからというものの、常に、真理に先導されているようで嫉妬さへ覚えた。彼女が急に大人になったように感じた。もしかすると、今まで幼い振りをしていただけなのかも知れない。案外、試されていたのは自分なのかも知れないと、再び自虐的な反省をせざるを得なかった。

「もう、充分心配させてるよ」

幸一は皮肉交じりの冗談で嫉妬を晴らした。

「そうやね。ごめんなさい」

真理はそう言って幸一の膝を軽くつねってからさっと立ち上がった。その瞬間、彼女のポケットから小さな瓶のような物が零れて石段を転がり落ちた。真理が慌てて石段を駆け下りて小瓶を拾い上げた。

「わあ、危なかった。壊れたら父に叱られるところやったわ」

そう言うってからその小瓶をポケットにしまい込んだ。

「何？それ……」

「父の催眠剤。こっそり持って来たの」

あっさりと告げた真理の、眼底に潜む本物の覚悟が、幸一の心に一気に流れ込んで来て彼の心を瞬く間に冷却した。幸一はまだ立ち上がれぬままに凝固した。真理は本当に死ぬ気であったのだろうか……。幸一がここに隠れている真理を捜し出さなかったならば、実際に死ぬ積りだったのだろうか……。幸一は先ほどのまでの身体の熱などは完全に奪われて、真冬ほどの寒さを感じる書写山の冷氣と、真理の頑なな思いに骨の髄まで凍りついてしまった。

幸一が真理を連れて帰ると、玄関で秋子が出迎えてくれた。山を降りてすぐに、公衆電話で連絡を入れておいたので、出迎えた秋子も落ち着いていた。

「さようなら」

真理の言葉は至極自然で、明日には再び爽やかに挨拶をしてくれそうな感じすら覚えた。彼女は一度も振り返ることなく二階にある自分の部屋へと姿を消して行った。ふと、桜吹雪に紛れて消え去った美紀の後姿がそこに重なった。表まで秋子が見送りに出てくれた。

「本当にありがとうございました」

バイクにまたがった幸一に、その横に立っている秋子が深く頭を下げた。幸一は健気な秋子に新鮮な魅力を感じた。秋子はまだ他人を傷つけたり、他人に傷つけられたりしていないと感じた。だがそれは、何の根拠もない幸一の虚しい切望に過ぎなかった。

「今夜はそつとしておいてあげて」

「はい」

と、幸一の言葉に彼女はにこりと清潔に笑った。その笑顔は、後輩であった頃の美紀が、幸一に対する好意を含んだ瞳で、歯切れ良く返事を返してくれた頃のことを思い起こさせた。

「じゃあ元気でね、おやすみ」

幸一はエンジンを掛けてクラッチを握った。

「おやすみなさい。三浦さんもお元気で」

秋子の言葉に、幸一ははっと振り向いた。初めて名前を呼ばれた時の小さな興奮であった。秋子は肩をすぼめて、やや羞恥を含んだ瞳で、上目使いに彼の瞳を伺った。そして、不意に彼女が手を伸ばして、革ジャンの肩に付いていた真理の髪の毛を取り除いた。幸一は真理の妹に髪を取り除かれたことで、周囲のすべてが、幸一に別れを覚悟させているような錯覚を覚えた。

発進する寸前に秋子が軽く会釈した。その瞬間、彼はそこに真理と美紀とを同時に見たような幻想を抱いた。とても美しい瞬間であった。

『さようなら』

と、幸一は心の中で呟いた。もう二度と会うことは無いであろう。例え会う機会があったにせよ、もうこの清純さは失われていることだろう。それは彼女の問題ではなく、今のこの状況が特殊であり、幸一にそう感じさせているからである。そんなことを考えながら寒い夜風の中を疾走した』

「もう一回あったよな、一緒に星を眺めたこと」

過去から舞い戻った幸一が、二人が口にすることを躊躇していた話題に思い切って踏み込んだ。

にわかに、真理の表情が硬く曇った。そしてその変化を彼に悟られまいと窮する仕草が可憐であった。幸一は、まっすぐに真理を見つめて静かに言葉を吐いた。

「あの時は本当にごめん。何度謝っても、何も修復されないことはわかっているけど」

真理もじっと幸一を見つめてから、

「いいえ、私の方こそごめんなさい。私も幸一さんのことをいつまでも傷つけていたと思う」

真理もそう謝ってから、当時の気持ちを思い出すかのように、虚ろな瞳を浮かべて川の面に視線を落とした。

あの事件の後、学校で出会っても真理は幸一を全く無視した。二度と口を利くことは無かった。当然幸一は深く傷ついたが、自業自得であることは百も承知していた。

別れてから半年もすると幸一の心も平静を取戻してきた。思い出の真理のことはいつまでも愛していたが、現実の真理を見ても、もう別人のように感じていた。結局、さようならも言えないまま卒業し、後味の悪い関係をそのまま高校時代の思い出の中に封じ込めていた。

「だいぶ日が暮れてきたなあ」

「ええ」

周囲はほとんど闇に包まれて、星の輝きが一層鮮やかであった。

「俺の部屋へ行こうか」

「かまへんの？」

彼女の言葉は夕風にさらりと流れて、幸一は大きく背伸びをした。

「へえー、なかなかきれいに片付けてはるわ」

「皮肉か？」

幸一は床に散らばった新聞紙や雑誌やらを、腰を曲げて拾い集めながら横目使いに言った。

「きれいな方やわ、男の子の部屋にしたら。相変わらずいろんな女の子が好きなんやね」

真理が、壁に張り巡らされた様々なアイドルポスターを一枚一枚見ながら言った。

「まあな、美しいものは目の保養になる」

幸一はベッドに掛かったタオルケットを隅みに押しやってから、そこに腰掛けて弁解気味に言った。

「目の保養ねえ……。幸一さんらしいわ」

真理はくすつと笑いながら幸一の示した座布団の上に膝を畳んだ。

そんなしおらしい彼女の影を見ていると、胸を絞られるような熱い血潮が全身を駆け巡った。幸一がベッドから立上って電気ポットで湯を沸かし始めた。次第に大きくなっていく沸騰音が妙に二人の間に響き渡った。それで、オーディオのスイッチをいれて音を流した。「テレビがないもので」

真理は幸一の言葉の意味が解せなくて小首を傾げた。そんな何気ない彼女の仕草にも、彼は過去の思いからときめきを蘇らせた。

「秋子さんはどこの大学？」

彼は軽い調子で尋ねながら、種類の違うマグカップを二つ取り出して、インスタントコーヒーの粉末をスプーンも使わずに流し込んだ。

「D大よ」

「へえ、すごいね。で、真理ちゃんは？」

「私は地元のさる有名大学です」

幸一は詮索するのも面倒なので、ちょっとだけ首を傾げて話題を変えた。

「いくつ？」

「二十歳よ、もう」

「砂糖の数やけど」

「なんや、お砂糖はいらんわよ、太るし」

「少しは肥った方がいいのに」

彼女は相変わず、ややともすると病弱に見える程の細身であった。だが、以前より女らしい身体つきになった感もあった。

幸一は、二度と会うことは無いものと確信しながらも、時々懐かしく思い出していた女が目の前にいるという信じ難い幸運を実感しながらも、万に一つの偶然を尋常に受けとめている自分が不思議でもあった。

「二年なんてあつと言う間やなあ」

幸一は、コーヒーの入ったマグカップを真理に手渡しながら呟いた。「ありがとう」

真理は両手でカップを受け取った。

「あつ、冷たい飲み物の方が良かった？」

「いいえ、これで充分」

「良かった。冷たい飲み物なんて置いて無いから」

真理はにこりと微笑んでから一口コーヒを含んだ。幸一は再びベッドに腰掛けてカップを口に運んだ。

「なんか不思議な気持ちやなあ。高校時代には、あれ以来一度も口を利かなかったのに、今はまた、何にも無かったみたいに話せるのやから」

幸一が座った勢いでコーヒが揺れて、思ったよりも大量にコーヒが口に入って舌を火傷した。

「そうね」

真理はカップの中の褐色の液体を見つめていて、幸一のハプニングには気付かなかった。

「少しは大人になったのよ、二人とも」

真理がカップを見つめたまま呟いた。幸一は、彼女が俯いているのを良いことに、口を半開きにして犬の様に舌を出して冷やした。

「俺は相変わらず我儘やけど」

そう言うのと再び舌を出して冷却した。

「私はあの当時、幸一さんのことが何も信じられへんようになってしまったの」

幸一は舌を冷やしながら、書写山で過ごした最後の夜の、冷たい空気を懐かしく思い出していた。

「どうしはったの？」

窓の外を見ながら、思い出の冷気を味わっていた幸一は、舌を出したままにしていることに気付いた。

「コーヒが熱くて」

真理は大きく笑ってから、

「幸一さんは、感性で判断するんやなくて、自分の意思で、信じたかと思ったら信じるって言わはった」

と言って、火傷をしないように優しくカップに唇を寄せた。

「そんなこと言ったか。なかなか格好いいセリフや」

真理は、照れ屋の幸一を優しく見つめてから、

「私はあの時、感じたからと言ったけど、やっぱりどこかで信じることを諦めていた。信じることを止めたかった。信じるのが辛かったのかも知れへんわ」

と、胸の奥から搾り出してきたような言葉を静かに語った。

「やっぱり女の脳は複雑や。男には理解できん」

照れ隠しの言葉に、真理もふっと笑いを零してから、

「お別れの話をしてから半年もするとね、もう一度信じたくなかったの……」

と、さりげなく呟いた言の葉は、過去と現在を往来して浮ついていく幸一の心を熱く目覚めさせた。

「その割にはかなり厳しく無視されたけど」

幸一は茶化し気味に微笑んでからカップに口をつけた。

「仲直りする機会がなくて……。仲直り出来なくても普通に接したかったのに、顔を見るとなぜか冷たくしてしまって……。自分でも良くわからなかった」

一瞬間の沈黙が、たった六畳の空間に染み渡り、呼吸の音までも抑制するようであった。真理への思いを過去から背負って来てしまった幸一は、失った大切なものが再び目の前に現れている幸福に戸惑いながらも、傷ついたままになっていた心の一部が癒されていく安らぎを感じていた。そして、真理への想いがゆっくりと再生されていた。

だが昔のように、一方的に理想像を創作して現実の真理に幻滅するようなことは無かった。むしろ現実の真理が欲しいと思った。

「涼しいわね、この部屋」

時折迷い込んでくる川風が、二人の肌を穏やかに撫でては去っていった。

「今夜は特別涼しい風が入ってくるなあ」

だが、真理は幸一の言葉には別段注意を払わずに、

「本が好きなんやね」

と立上って、ぎっしり詰まった本棚の前に立った。

「本があるからといって読んでいるとは限らない」

幸一の言葉に真理は少し微笑んだものの、沈黙を嫌がるかのように話題を絶やさなかった。

「あれ、卒業写真やわ。見せてもらってもかまへん？」

「いいけど、君が持っているのと同じやと思うよ」

「そうかもね」

彼女は優しく答えておいて、本棚から厚い表紙のアルバムを重そうに引き抜くと、再び床に足を畳んで、アルバムを膝に置いてから、白い手で繰り始めた。

やはり、彼女の心も過去に遡っているのかと、幸一はコーヒを口にしながら、左側に足を崩した彼女のふくらはぎを見るときもなく見つめていた。

「みんな、どうしてはるかなあ」

「まあ元気にしてはるよ、みんな若いし」

傷一つない真理の手が、アルバムを真中までめくった時、アルバムに挟まれた数枚のスナップ写真が出てきた。幸一は、後悔と焦りの紅潮を浮かべて視線を外した。その写真は、体育祭や文化祭の時の真理が写っていた。

「まあ、若い」

彼女は嬉しさを目許に浮かべて、空々しく窓の外の賀茂川に視線を外している幸一をちらりと見た。幸一が、カメラ好きの友人に頼んで、望遠レンズで遠くから隠し撮りして貰ったものであった。

幸一は心の動揺を悟られまいと、どっかとベッドに腰掛けて、冷めたコーヒをすすった。ちょうどその時音楽が止まった。

「そろそろ帰った方がいいのと違う？ バイクで送って行くよ」

と、幸一は窮地を脱し得た明るい声で言った。

「ありがとう。お願いするわ」

真理は、何かを語りかけているような深い笑顔を浮かべた。

第二話 再び 二（前書き）

真理を家まで送った幸一は、秋子に会って欲しいという真理の言葉で家に入った。しかし、秋子は戻ってこない。そこへ秋子から驚く内容の電話が入る……。

第二話 再び 二

幸一は真理の身体の温かみを背に感じていた。だが、昔彼女を自転車の後ろに乗せた時のような熱い感動はなかった。北山橋を渡って堤防沿いに少し上がり、彼女が示す所でバイクを止めた。真理はメットをとってから、

「寄っていかはったら？」

と、乱れた髪を左手で軽く整えながら幸一を斜めに見上げた。

「でも、夜に迷惑やし……」

「大丈夫よ、祖母は部屋に籠もりきりやし、秋子に会って欲しいわ。可愛いくならはったわよ」

真理はそう言くと、不意に左手を伸ばしてバイクのキーを右に回した。エンジンが止まり幸一もメットを脱いだ。

「大胆やね」

幸一は強引な真理の行為に面食らって、そのまま彼女の指示通りに動いた。真理は幸一を応接間に案内して、部屋の真中に置かれたソファーに座らせて出て行った。

立派な建物であった。京都の旧家によく見る光景で、苔むした庭に、松の木が壮麗な枝振りを披露している。内部は少々手を加えていて、和洋折衷の造りになっていた。彼がいる所はフローリングになっていて、二人掛けのソファーが一脚と、一人掛けのソファーが二脚、テーブルを挟んで並べてある。戸棚には高級そうなブランデーやウイスキーが並んでいた。

幸一が、応接間の縁側から、薄灯かりに照らされた庭を眺めていると、スリッパの軽い足音が廊下から近づいてきてドアが開いた。真理が両手で赤い漆塗りの盆を持って慎ましく入って来た。巻寿司とお吸い物とお茶を、しなやかな所作でテーブルの上に置いた。その仕草が部屋の気品に溶け込んでいて、思わず白い指先に見とれてしまった。

「どうぞ」

彼女の声に少し驚いた幸一は、大人びた美しさに揺れた心根を悟られまいと、うつ向いたままで手を合わせた。

「頂きます」

幸一と向かい合ってソファに腰を沈めた真理は、何とはなしに不安気な心の内をその澄んだ瞳に浮かべていた。

「どうかした？」

幸一は、箸の動きは止めずに、視線だけを彼女に注いだ。

「うん、大したことやないけど、秋子がまだ帰ってへんの。遅うなるときはいつも連絡してきはるのに」

「まだ十時前やし、大丈夫や。そのうちに連絡してきはるよ」

しかし刻々と過ぎていく時間が、そんな幸一の言葉を空々しいものに変えていき、昔話しも、途切れがちで空虚な会話になっていった。

「こんなこと一度やってなかった。祖母もそう言うたはるわ」

「お婆さんは？」

「最近、少し身体の具合を悪うしはって、部屋に籠もりきりやの」

幸一は背筋に不気味な寒気を感じて、思わずくしゃみをした。

「冷房効きすぎてる？」

真理が労わるような瞳を幸一に向けたとき、彼は、真理が行方不明になった夜の、秋子の意地らしい程の明るい振る舞いを思い浮かべた。そして夏だというのに、当時の寒くて心凍るような緊張感が懐かしく蘇ってきた。

「部屋、見せてもらってもええかな？秋子さんの部屋。何かわかるかも知れへんさかい」

幸一の言葉に真理は小さく頷いて、すらりと立上った。白いショートパンツに履きかえた、彼女の白い脚がきれいに伸びた。こんな時であるのに、幸一は背丈が自分の肩ほどしかない小柄な真理を後ろから抱きしめたいような衝動を覚えた。

「どうぞ」

真理が先に入って灯かりをつけた。女の子の部屋らしく、明るい色

調でまとめられており、化粧やら香水やらの甘い香りが充満していた。秋子の部屋は二階にある。幸一は、部屋の香りに胸が詰まりそうになって窓を開けた。

ここでも賀茂の流れが、街の灯かりをその川面に反映して、まるで細長い鏡が四条辺りまで敷かれているかのようであった。

幸一はまず机の上を調べた。教科書や辞書の類が右隅に積んである以外には、閉じられた文庫本と銀ぶちの眼鏡が置いてあるだけであった。

「友達の所にも泊まらる積りかしら」

「出掛ける時には、コンタクトレンズをはめていかはるの？」

幸一はドレッサーの隅に置かれた小さなケースを手にとった。

「ええ。眼鏡かけた顔は嫌いやって、よう言うてはったし」

幸一はレンズの収容ケースを開けてみたが、洗浄液が入っているだけであった。

「最初から泊まるつもりなら、このケースを持っていかなるやろうなあ、普通」

「忘れることもあるわ」

「そうやね」

幸一は敢えて反論はしなかったが、秋子は泊まる予定で出掛けたのではないような印象を受けた。

幸一がケースを元の場所に戻した時、下の階で電話が鳴り始めた。はっと、真理が期待と不安とをその瞳に浮かべて、階段を駆け降りて行った。幸一もゆっくりと後に従った。幸一には不安の方が大きかった。この電話が、何か悲劇的なものをもたらしそうであった。

「秋子！」

第一声で真理が大きく叫んだ後は、安堵と不安が混じったような複雑な表情を浮かべて、じっと秋子の話しに聞き入っている様子であった。

「こっちは大丈夫よ、何も変わらないわ。あっ、幸一さんと偶然会ってね、今来てはるんよ、そやさかい早よう帰って来て」

真理はそう言った後、更に、相槌を打ちながら集中して聞いていた。
「ちょっと待って」

と、最後に真理が叫んだが、やがて静かに受話器を戻して小さな溜息を一つ落とした。幸一は、彼女の手元から零れた色気を感じながら、小さな唇が開くのを待った。ほんのわずかなしじまが不気味に拡がった後、真理が穏やかに身を翻して、不安をいっぱいに湛えた視線を投げ掛けてきた。一輪の草花が冷たい雨に耐えているような健気さを感じた。

「秋子から。母の昔の女友達と、円山公園の料亭で食事してはるって。今晚はその人と旅館に泊まるけど心配いらないって。それから母には絶対言うたらあかんで言わはった。理由を聞いたけど、とにかく言うたらあかん、後でちゃんと説明するさかい、今はお願いを聞いてって……。それで切られてしもたわ」

「女友達？」

「ええ、昔の女友達としか……」

「明日戻るって言わはった？」

「尋ねたけどはつきり言わはらへんの。とにかく大丈夫や、心配いらんて……」

「そうか。でも、秋子さんは無事やったし、とにかくひと安心やな。事情はわからんけど身体が元気ならええやないか」

「そうやね。元気な声やったし、安心安心」

そう言って真理は明るく作り笑顔を浮かべた。幸一は、電話機の前で突っ立って話している不自然さに気付いて、

「もう一度、部屋を調べてみよか」

と、やや強い口調で提案して、返事も待たずに一人で歩き始めた。真理も、彼にすぎりつくようにして階段を上がって行った。

「引き出しの中も見せてもらうよ」

「ええ」

幸一は、秋子の机にある二つの引き出しを静かに引いた。上の段には、文具などがあって別段変わったものは無かった。

だが、下の引き出しには少々変わったものがあった。変色した古惚けた紙袋と、新しく白い封筒、それから、どこかの店の古いマツチ箱が一箱あった。

新しい封筒には住所が書かれていたので、郵便物のようであった。古い紙袋には何も記載されておらず、長い間どこかに保管されていた感じであった。

幸一はまず古い紙袋を手にとって、中のものを机の上に広げた。

「やあ、お母さんの写真やわ。えらい若い時の写真みたいやわ」

真理は嬉しそうに二三十枚の写真を手にとって、一枚一枚眺めていった。幸一も、彼女が見終わった物を順次見つめていった。

今の真理と同じ年頃の写真であった。モノクロでなかったら、真理の写真だと言われても疑えないほど良く似ている。京都の名所で写してある風で、幸一は裏に書かれた年月日順に分類してみた。

すると、それらはすべて昭和四十八年の九月二十七日から三十日まで撮られた写真であることがわかった。

「昭和四十八年。今からちょうど二十年前やなあ。旅行にでも行かあった時の写真かしら？」

そう言って怪訝そうに首を傾げている真理に、

「京都生まれの京都市育ちの人が、四日間もかけて京都を旅行しはるのかなあ」

と、幸一が助言した。彼の言葉に少し納得した真理は、ちょっと考えてみてから、

「そしてら、父と一緒に回ったとか。父は京都生まれやないさかいと、自身ありげに提言した。」

「それやったら、お父さんと一緒に写真が一枚位あってもええやろう。全部お母さんが一人で写ったはる」

漠とした疑問に包まれた幸一は小さな吐息をついたが、もう一つの、最近の物らしい白い封筒の中身も取り出してみた。

中からは、同じく母の若い時の写真が一枚だけ出てきた。どこかの橋の上で撮った物らしい。しかも、なぜか写真の縁が切り取られ

ていて傷みが激しかった。幸一は再び写真の束を手早く繰った。

「無いなあ」

幸一は怪訝そうに呟いた。

「何が無いの？」

「こっちの写真の束には、この橋の上で撮った写真が無い」

「そう」

真理はなぜ幸一そんなことを気にしているのかわからず、彼の瞳を覗いた刹那、その輝きに胸を突かれて息を飲んだ。

「何でこの一枚の写真だけ縁を切り取ってある？何で日付がない？何でこんなに古びて傷んでいる？何で新しい封筒に入っている？」

幸一はやや興奮気味に疑問点を声に出した。

「知らんわ、そんなこと……」

熱くなってきた幸一に置いてきぼりにされたようで、真理は少し口を尖らせた。

「これを見て」

幸一は、新しい封筒を真理に手渡した。それは、秋子宛てにはなっているが、送り主の名前も住所も書いていない。

「何か怪しい手紙やわ」

裏表を何度も返してみながら、彼女は小首を傾げて左手でそつと前髪を横へ流した。なぜかその仕草に幸一は安堵した。

「スタンプが擦れていて郵便局名はわからんけど、消印は七月二十五日で今日は八月三日」

真理は口をつぐんだまま頷いた。

「お母さんの昔の友達とやらがこの手紙で秋子さんを呼び出したんだと違うやろか。昔の友達であることを示すために、若い頃の写真を同封してきたんやろう。手紙の到着日は消印の翌日位やろうから日程的には辻褄が合う」

「その秋子を呼び出した手紙はどこにあるの？」

「秋子さんが持って行った。手紙に待ち合わせ場所の地図でも書いてあったんやろう。円山公園いうたかて広いさかい」

真理は感心したように頷いた。

幸一は古いマッチ箱を手にとって見た。『クラブすみれ』と書いてあり、これもあり古いた物であった。

「『クラブすみれ』は知ってる？」

「さあ、知らんわ、クラブなんて行ったことあらへんし」

「祇園、新橋か。聞いたことない店やなあ」

幸一はマッチ箱の横に書いてある佳所を読んでみた。

「幸一さん、祇園のこと詳しいの？」

「以前、祇園の店でバイトしていたことがあるから」

「へえ、私も飲みに行きたいわ」

真理の言葉に、ふと二年前の元旦に二人で酒を飲んだことを思い出した。ほんのりと頬を紅く染めた愛らしい酔い方が懐かしくて、あの時の香りがふっと流れて来た感じがした。

「何でお母さんの若い時分の写真や、古いマッチ箱を秋子さんが持ってはるのかな？」

幸一は真理の言葉には軽く微笑んだだけで次の疑問を口にした。

「この部屋は昔、母の部屋やったの。その机もドレッサーもみんなそやさかい、押入の奥からでも出て来たのと違うやろか」

真理は、自分の情報提供に幸一が熱心に耳を傾けていることが嬉しい様子で、自慢げに幸一を見つめた。

「なるほど。お母さんもこんな物を置いていることすら忘れてはるのかも知れへんなあ」

そう言って幸一は、窓から吹き入る快風に誘われるように、ふらふらと窓際に近寄った。そうして外の空気で肺を満たしながら自然に星の瞬きに視線を向けた。

「あれ？前の道路、工事してるの？」

工事の赤い表示灯が何列にも並んでいた。

「道路と違うわよ、堤防をきれいにしてはるの」

竹原建設という文字が赤い灯に照らされた。

「人間の意識は不思議やなあ。さっき門から入るときに前を通った

のに、家に気を取られて全然気づかなかった」

真理も机から離れて秋子のベッドに腰掛けてから、

「昼間やったらもっと賑やかやし、気づかはるわ」

と言って、些細なことを面白がる彼の背中を見つめて軽く笑った。

真理も窓からの涼風を心地よく肌に感じた時、突然幸一が振り返ってじっと真理を見つめた。

「どうかした？」

微かに狼狽する真理。幸一はゆっくりと白いジーンズのポケットからパスケースを取り出して、中を開いてじっと見つめた。幸一は自分の発見に興奮して僅かに手が震えてきた。

「ねえ、どうしたん？」

「さっきの縁なしの写真、どこかで見覚えのある写真やと思って記憶を辿っていたんや」

そう言って、幸一は手にした彼のパスケースを彼女に手渡した。中には一葉の写真が入っていた。

「ああ、高校の時に幸一さんにあげた写真やね、ずっと持っていてくれはったの？嬉しいわあ。高校一年の時に、秋子と嵐山の渡月橋で撮った写真よ」

嬉しそうに話している真理の目の前に、幸一はモノクロの写真を差し出した。

「やあ偶然やわ、同じ場所で撮ったみたいやわ。母が二十年前に撮らあった所で私らも撮影したんやわあ。そやけどこれがどうかした？渡月橋ではみんな写真撮らはるし、そんなに不思議やないでしよう？」

「問題は写真の大きさや」

「大きさ？」

幸一も真理の横に腰掛けて、パスケースから中の写真を取り出した。

「ほら、同じ位の大きさ」

幸一のパスケースは、電車の定期券がちょうど入る位の大きさであった。

「本当。そしたら秋子を誘い出した人は、母の写真をパスケースに入れて持ち歩いていったということ？」

「そう、二十年も持っていたら、この位傷むのは当然だろう」

真理は不可解な表情で幸一をじっと見つめながら、彼が次に口にしそうな言葉を恐れているようでもあった。

「そう。俺なら男友達の写真をパスケースに二十年も入れて持ち歩かへん。真理ちゃんは？」

「普通は、同性の写真は持ち歩かへんわ。家族でも無い限り」

そう言いながら、真理の表情は硬く固まっていた。幸一はそんな彼女を哀れに感じたが、意識は疑問解決に執着してしまっていた。

「まあ、男にせよ女にせよ、お母さんと仲良しでないことは確かやな。少なくとも今は」

幸一はパスケースをジーンズのポケットにしまい込んだ。

「秋子と話しがしたいなら、普通は母を経由して連絡が来るものね。わざわざ写真付きで直接手紙なんか出さなくても」

真理は少し固さを崩したものの、憂鬱な表情を浮かべながら幸一と共に真相を探ろうとした。

「その通り」

幸一は、真理の暗い横顔を心配そうに見つめながら相槌を打った。

「じゃあ、何で秋子は嘘言わはったんやろう？」

「そら、君やお婆さんを心配させたくないからや」

「母に連絡したらあかんでいうのは？」

「お母さんに心配掛けたくないから」

幸一はそう言ったものの、まだ釈然としない、漠然としたわだかまりがあった。彼は真理と並んでベッドに腰掛けたまま、秋子の机をぼんやりと見つめて、自分の頭を整理するかのようにぼつぼつと語り始めた。

「お母さんの知人の男は、ここにあるお母さんの写真と同じ写真を持っていると思われる。その中のお気に入り一枚を二十年間持ち続けていた。そして、何らかの目的で秋子さん呼び出した。その

際に、お母さんを知っていることを示すために、肌身離さず持っていた写真を送ってきた」

と、幸一はテレビドラマの探偵口調で呟いた。

「なかなか鋭い推理ですねえ」

真理は、探偵を気取っている幸一を茶化すようににっこり笑ってから、

「でも探偵さん、その男の人がたくさん写真を持っているとしたら、お気に入りの一枚を送ってくるかしら？ 私なら他の写真を送るけどなあ」

と愛らしい反問を試みた。幸一は彼女が笑顔を浮かべたことに少し安堵した。

「ごもつとも。ということは、その男は昔、お母さんに一枚の写真をもらったと言うことかな、俺みたいに……。つまりその男は、お母さんに想いを寄せていた人、或いは寄せている人」

「嫌やわ、そんなん」

真理は幸一の言葉を受け入れられないようにそっぽを向いた。

「もらった写真とも限らへんなあ」

幸一はもう一つの可能性を思いついた。その男と母が一緒に旅して、男が写したと言う考えであったが、明言する前に彼女の反応を伺った。

「幸一さんみたいに望遠レンズで隠し撮りしはったのかも」

真理は少々不機嫌な声で幸一に言葉を返した。彼は、まだ言い出す時期ではないと考えて推論を引っ込めた。

「そやけど」

何かに気付いたかのように、真理の表情が静かに曇り始めた。

「そやけど？」

幸一は、彼女を興奮させないように優しい瞳で尋ねた。

「その知人がほんまに男の人やったら秋子は……」

幸一は気休めの言葉が見つからずに、ベッドから離れて窓際に歩を進めて星空を見上げた。

「仮にも君のお母さんに想いを寄せていた男やったら、その娘に危害を加えるようなことはしないよ、絶対に。それに、危険を感じたら秋子さんは逃げ出したはずや」

窓の外を見ながら放った幸一の苦しい慰めが、虚しく夜空に吸収されて行つた。

「それに、秋子さんを呼び出した知人が一人とは限らへん。写真を送ったのは男でも、今晚は女性も一緒にいるかも知れへん。目的はわからんけど、秋子さんとゆっくり話したいのなら女性がいる方が安心するさかいな」

「星がきれいね」

いつの間にか、真理が幸一の横に並んで、窓から身を乗り出して星を見上げていた。彼女の声が妙に明るくて、澄みきった夏の夜空に響き渡るようであつた。

「ありがとう」

そう言つて幸一の手を握つた真理に、これ以上空虚な言葉を浴びせるのは止めにした。真理も覚悟を決めた様子であつた。ここで二人があればこれ推察して心配したところで仕方が無い。そんな風に真理が語りかけているような気がした。

「お願いがあるの」

真理はやや落ち着きを取り戻した瞳を幸一に向けた。

「今夜、この家にいて欲しいの」

少々刺激的な言葉ではあつたが、この状況下では言葉以上の意味は一切頭を過ぎらなかつた。

「もし秋子に何か起きて急に連絡があつたら、うち一人では何もできひんさかい」

「いいよ、喜んで」

幸一がそう答えて微笑んだ時、彼女が静かに幸一の胸に頬を埋めてきた。彼は無言のまま、胸の高鳴りを悟られはしないかと些細を気にしながら彼女の髪を優しく撫でた。

朝陽がカーテンの隙間より漏れ入り、応接間で眠っていた幸一の寝顔を清々しく照らしていた。彼は真理の声で目を覚ました。遠くで聞こえていた彼女の声が足音と共に近づいてくると、ドアの前で一呼吸置いてからノックした。

「どうぞ」

幸一の寝ぼけた声とは対象的に、爽やかな朝風のように真理が舞い込んで来た。

「おはよう。良く眠れた？」

「ああ」

幸一は小さく答えてから眩しげに真理を見上げた時、自分の愚かさに恥じ入った。明るく幸一に尋ねかけた真理の表情は、一見しただけで睡眠不足であることが伺えたからであった。

「朝食の用意が出来ているさかい、すぐに来てね」

『秋子さんは？』と問いあぐねている幸一のさえない瞳を見抜いたのか、

「秋子はまだ帰ってないの」

と、真理の方からさりりと言ったのけた。

幸一は居間に通された。畳部屋に、同時に八人は食事出来そうな大きな木製テーブルがあった。味噌汁の香りと焼魚の香りが旅館の朝食を思い起こさせた。

「いつもこんな贅沢な朝食食べてはるの？」

全部で五品程の惣菜が並んでいた。真理は当然のように頷いてから、

「幸一さんはいつもどんな朝食食べてはるの？」

と、却って疑問を持たれた。一人暮らしをしていると、まともに朝食を摂ることなどほとんど無い。

「秘密」

そう言って味噌汁を一口飲んだ。

「美味い」

別段真理にお世辞を言うつもりは無かったが、自然と言葉が出てしまった。彼女はにこりと笑ってから幸一にお茶を差し出した。

「お婆さんは？」

幸一がだし巻きを頬張ってから尋ねた。

「朝早くに起きて食事しはったけど、また寝たはる。秋子のことは、友達の家遊びに行っただるて誤魔化しといたわ」

「俺のことは何て説明したの？」

「男友達が遊びに来てるって」

「それで何て？」

「別に……。あまり興味なさそうやった」

幸一は真理の言葉を聞きながら焼き鮭と飯を頬張って、味噌汁を流し込んだ。

「相変わらずせわしい食べ方はるわ」

真理は、昔と変わらない幸一の食べ方を懐かしむような目をして、子供のように黙々と食べる幸一を微笑みながら見ていた。

「食事が済んだら円山公園に行ってみよか？」

幸一の言葉に、真理がはっと胸を突かれたような愛らしい驚きの表情を浮かべて、

「そうやね、秋子とばったり出会うかも知れへんしね」

と、どこまで本気で言っているのかわからない、やや空虚な言葉を吐いた。幸一が濃いお茶を口に運ぶと、苦味を含んだ熱い香りが、まだ半分しか覚醒していない彼の脳裏を刺激した。そしてほっと息を吐いて虚空を見つめた。

彼は複雑な心境に陥った。秋子が今日中に帰って来なかったら、日常生活からかけ離れた『事件』となって家族を不安の渦中に巻き込んでいくだろう。だが、今日中に帰ってくれば、どんな問題を持ち込まれたとしても、また元のような日常生活の中で徐々に解決されていくような気がした。

「聞くだけ無駄やと思うけど、お母さんの秘密みたいな話しとか、怪しい過去の噂なんて何も聞いたことないよなあ？」

幸一は、プライバシーな情報なので遠慮気味に尋ねてみた。

「当然。知っていたら秘密やないわ」

真理は笑顔を浮かべて温かいお茶をすすった。

「秋子さんに何らかの情報を渡して特をする人がいるのかなあ。または秋子さんから情報を聞き出したいのか……」

幸一は、覚醒してきた頭に浮かんできた疑問を、ひとり言のように口に出した。

「家族のことを聞き出したいなら、私でも良かったのに。姫路の家の住所は知らないのかしら、その男は」

真理もわりと客観的な口調で推理し始めた。

「もし、男がここの住所しか知らないなら、お母さんがここに住んでいた頃の知り合いで、それ以降は付き合いが途絶えているということになる。そもそもお母さんはこの家にいつ頃までいたはったの？」

「結婚するまで居たらしいわ」

「結婚して家を出て行かかった。と言う事は、秋子さんが子供の頃にこの家で暮らしていたことは無かった。じゃあ、何で秋子さんが今ここに住んでいることがわかったんやろう」

「祖母の知り合い関係かな。秋子と一緒に住むことを祖母が知り合いに話した。その話が回りまわって男の耳に入った。それしか考えられへんわね」

「お祖父さんは？」

「私らが小さいときに亡くならはった」

真理は幸一の瞳を見つめてからお茶を飲み干した。そして、

「そやけど、旅館に泊まり込んでまで何を話してはるのかしら。何か怖い気もするわ」

と言って幸一の湯飲みをちらりと覗いた。

幸一は、真理の自然な疑問に脳裏を針で刺されたような閃きを感じたが、まだ安易に口にすることは自制した。

流石に平日の午前中では、左程多くの観光客はいなかった。二人は四条通りから八坂神社の朱塗の西楼門をくぐると、門外の騒々し

い生業の協奏曲とは打って変って、神木に囲まれてひっそりと落ち着いた冷厳な気に包まれた。

幸一には、全くとって良いほど興味を起こさせない、小さな祠がたくさんあって難解な漢字が並んでいた。数多の提灯で装飾された鳥居をいくつかくぐり抜けると、祇園造の荘厳な本堂が現われた。祇園造というのは本殿と拝殿が一つの屋根で覆われた珍しい造りである。

参拝の人々がいた。鳩もいた。敷き詰められた小石の隙間を、鳩たちが呆れるほど素早い動作で突いていた。

「御参りしていきましょ」

と、真理が過去に吸い込まれそうな語気で呟いた。

「御参り？」

交錯した二人の視線は、同時に過去の記憶へと散っていった。二人の最初のデートは、書写山という標高四百メートル程度の小山の頂にある、天台宗円教寺への初詣であった。そして、二人が最後の時間を過ごしたのも同じ場所であった。あれから二年の月日を経た二人が再び神仏を参詣して、ここから何かが始まるかのようにであった。「そう言えば、幸一さんは御参りするのが嫌いやったわね」

初めてのデートだというのに、幸一は神仏に手を合わせるのが嫌いで、真理が詣でている姿をじっと見ていた。そのことを思い出した真理は爽やかな笑顔だけを置き去りにして、一人ですたすたと歩いて行った。幸一も静かに彼女の後に続いた。

「最近は何も御参りするようになつた。京都にはたくさんのお寺や神社があるのに、御参りしなかったら罰が当たるさかい」

真理は軽く幸一を見上げて、本当に神仏を敬う気持ちができただのか、それとも何でも女子に合わせる軟派な男になってしまったのかを探るように、清潔な笑いを浮かべて幸一の瞳の奥を覗いた。

「いつも、どんなことをお願いしてるの？」

真理は玉砂利の音を立てないように、俯いたまま小さな歩幅で歩んで行った。

「この世から、ありとあらゆる災害や人災が無くなって、人類すべてが平和に暮らせますように……」

そう言って、幸一はふと空を見上げた。今日も一日暑くなることを、背に感じる強烈な日射しで予感しながらも、青空を美しいと思った。「ほんまに？ 誰かさんと仲良くなれますようにとか、お願いしてはるでしょ、ほんまは」

「たまにはね、真理ちゃんともう一度仲良くなれますように、とか……」

真理は軽く笑ってポシェットの中を探り始めた。幸一はその一瞬の美しい恥じらいを目に捉えながら、初詣の夜もそうしたように、ポケットから小銭を一掴み取りだして彼女に差し出した。真理もまた、あの夜のように小首を傾げて彼の瞳を伺ながら、百円玉をつまんだ。二人は拝殿に立って厳肅に合掌した。

「なんてお願いしたの？」

幸一は、わかつているのに敢えて尋ねてみた。

「勿論、早く秋子が帰りますように、て。幸一さんは？」

「一刻も早く秋子さんを見つけ出して見せます」

幸一の言葉を聞くと、真理は口元に笑みを浮かべただけで、黙したまま静かに拝殿から離れて歩き始めた。

「どうかした？」

幸一もゆっくりと玉砂利を踏みながら彼女の横顔を覗き込んだ。

「何でもないの、おおきに」

そう言った瞬間、鳩たちが群れを成して舞い上がり、その嵐のような羽根音に周囲のすべての音が飲み込まれて、すべての動きが停止したかのような錯覚に陥った。

二人は八坂神社を抜けて円山公園へ進んだ。そして花の無い桜並木の下を歩いた。

「春はきれいでしょうねえ」

真理は青葉しか付いていない枝を見上げて、その隙間を群青色で敷

き詰めている夏空に嘆息を投げ掛けた。

満開の桜を想像した感嘆の嘆息なのか、現在の不安から零れ落ちた溜息なのか、幸一には推し測れなかった。

春には円山公園の中心となる枝垂れ桜の大木や、幕末志士のモニュメントを眺め、幕末の頃から営業しているという御茶屋で一休みした。

「まあ、ざっとこんな所ですけど、円山公園は」

幸一は、今日初めてのコーヒを味わいながら真理の瞳を見つめた。

「知ってるわよ、家族で夜桜を見に来たことがあるさかい」

「なんや。はよ言ってくれよ」

「でも、幸一さんの案内は参考になるわ」

「何の参考？」

「観光客が喜びそうなポイントを押さえてはる。多分、たくさんの女の子を案内しはったんでしょうね」

そう言って真理は紅茶を口に運びながら、上目使いに幸一の瞳をからかう風に覗きこんだ。

「……」

「ほんま、昔から幸一さんはわかりやすいわ」

そう言っつて、今度は手を口に当ててくすつと笑った。

幸一は、昔から自分を子供扱いする真理の態度にどう反応すれば良いのか困惑することが多いが、やはり苦笑するしか術は無かった。「これからどっちへ行く？」

幸一は分の悪い状況から速く脱したかった。

「清水の方へ行ってみたいわ」

真理は軽く語尾を上げて、紅茶を飲み干した。

茶屋を出た二人は円山音楽堂の横を抜けて、趣のある石畳の町並みを通り抜けた。高台寺へ通じる、青葉のトンネルのような階段を、少しの間立ち止まって見上げてから、産寧坂まで歩いてきた。

「清水も来たことがあるの？」

幸一の間に真理は小さくかぶりを振った。円山公園でもそうであっ

たが、彼女は周囲の風景や店には興味を示さず、行き交う若い女性を全員確認するくらいの集中力で、眼球が迅速な動きをしていた。

産寧坂を上り、清水寺への長い参道を上り詰めると、幾筋もの汗が背中を流れた。強い日射しが、嫌がらせのようにじりじりと照り付けて来た。

清水寺の舞台からの眺めは絶景であった。青葉と日向と日影がくつきりと境界線を描いた盛夏の風景であった。二人は舞台の手摺に並んで身をもたげながら、まばゆい風景を全身で吸い込んだ。

「ここから見える街のどこかに秋子はいるのかなあ」

そんな、真理の吐息のような言葉を聞いた幸一は、秋子がすぐに帰って来ないと真理も感じているのではないかと思ったが、彼女の不安を吸収するように、優しい気持ちだけを胸いっぱい湛えた。

「ごめんね、秋子のことばかり考えていて。折角、幸一さんが側にいたはるのに」

と、真理が申し訳なさそうに謝った。彼は小さく首を振って、

「俺も秋子さんのことばかり考えていたよ……」

と、笑顔を浮かべた。

「でもわかっていたことやけど、ここへ来てみても秋子とは会えへんかったし、手掛かりも無かったわね」

真理は、幸一に笑顔を返してから音羽山の方をぼんやりと眺めた。

幸一は真理の作り笑顔が悲しくて、

「そんなことあらへん。ここへ来たお陰で、あることがわかりかけてきた」

と、ほんの些細な気づきを大袈裟に表してしまった。

「あること……。て？」

真理の瞳が鋭く輝いて幸一を振り返った。彼は音羽の滝に視線を落とした。

「まだ確信はない。家に帰ったら確かめるよ」

幸一はそう力強く言ったものの、さしたる発見は無かった。ただ、秋子の机から出てきた多くの写真の中に、清水寺で撮った物があっ

たような気がしただけである。それだけであつた。不安と落胆に見舞われているにも関わらず、健気に作り笑顔を浮かべる真理に少しでも希望を与えたくて、少しでも安堵させたくて、確証も無いことをつい口にしてしまったのだつた。

太陽が益々高く上り始め、大地を照りつけている。幸一は左の手首で額の汗を拭ったが、真理は全く無表情であつた。

第二話 再び 三（前書き）

母の昔の写真から秋子の行き先を推理する二人は、写真の裏に書かれた日付から驚愕の事実を知る。幸一は自分の推理に従って、真理に内緒で秋子を捜しに出る。幸一は秋子を捜し出すことが出来るのか。

第二話 再び 三

秋子の部屋で、幸一は一人でモノクロの写真を一枚ずつ確かめてみた。秋子の椅子に座って、机の上に写真を広げていた。そうしてその中の二枚を取り出して目の前にかざしてみた。

やはりあった。清水の舞台で音羽山を背景に一枚。音羽の滝の前で一枚。幸一は他の写真も順々に繰ってみたが、平安神宮と銀閣寺、それに嵐山で撮ったと思われる物が数枚判別できる程度で、他の物はどこで撮った写真なのか良くわからなかった。

建物や自然の風景が部分的に入っているだけで、場所を確定できるような物は写っていないし、モノクロで、二十年も前の風景であるから、明確に場所を特定できない物がほとんどであった。

そこへ、一階でお茶を入れていたはずの真理が、心持ち緊張した面持ちで秋子の部屋に飛び込んできた。

「今、秋子から電話があったの。大原にいるって」
「一人で？」

幸一の声に彼女は首を振った。そして自分を落着けるかのように静かにスカートの裾を整えながらベッドに腰掛けた。

「大事なことは何も言わはらへんの。大丈夫やさかい心配せんといて、二三日で帰るとしか……。後は何を聞いても、とにかく安心して待っていて。それからお母さんには絶対言うたらあかん。て、念を押されたわ」

彼女の声は、だんだんと沈着な語気に落ち着いてきた。

「やっぱりしばらく帰って来ないか」

幸一は、そうつぶやいて再び写真を繰り始めた。

「やっぱりって、何でそう思われるの？」

真理の鋭い目の光が幸一に注がれた。彼女には、あまり認めたくない推測なのであろう。

「何となく……。気に障ったらごめん」

幸一は、真理もそう感じていたはずだと思ったが言葉にはしなかった。真理の表情が一時は硬くなったが、やがていつも通りの涼しい表情を浮かべて幸一の仕草を見つめた。彼の次の言葉を待っているかのようにあった。しかし、幸一はそんな彼女の視線には全く気付きもせずに、写真を見つめながらじっと考え続けた。

「そうか、大原か。三千院やなあ、恐らく」

幸一は一人で納得したかと思うと、写真を左手に束ねてから真理のそばに近づいた。そして軽く彼女の肩に手を添えてからその隣に腰を降ろした。

「秋子さんは、大丈夫やさかい心配しないでと言わはった。秋子さんは君の心を案じて、君がこうして不安がったらあかんと思って電話しはったんや。彼女には、君の事を心配出来るほど余裕があるさかい、きつと大丈夫や。そやから冷静に事実を受け止めなあかん」

幸一は、真理の肩を優しく叩きながら静かに諭した。真理は彼の右肩に額を当てて小さく頷いた。

「ほら、これ見て」

幸一は彼女の肩を抱いたままで、数枚の写真を真理のデニムスカートの上に広げた。スカートからはみ出た白い脚が気になったが、今はそんな状況ではないと、敢えて意識から外そうとした。真理は幸一のそんな動揺など全く気付かない風に、彼の肩に頭をもたげたままで、広げられた写真をぼんやりと見つめた。

「この二枚は円山公園で撮ったものや。そしてこれは清水寺」

幸一の言葉に真理は反応することなく、示された写真を見つめたまままで彼の言葉の続きを待っていた。

「これは多分、三千院の中庭やと思う」

「それで？」

きょとんと見上げた彼女の長い睫毛が、まるで付け睫毛のように綺麗に上向いていた。

「それだけのこと」

幸一はあっさりと彼女への回答をはぐらかした。

「ちゃんと言うて。もう何を聞いても大丈夫やさかい」

幸一は、ちらりと彼女の瞳に視線を置いてから、

「要するに、昨日から今日にかけて秋子さんが行かあった所は、昔お母さんが行かあった所と同じなんや。秋子さんは二十年前のお母さんの知り合いと、二十年前の旅行を再現しているのかも……」

と、静かだが、部屋に響き渡る低い声で呟いた。

「旅行？何のために？」

真理は思わず反発的な語気で疑問を投げたが、すぐに冷静な表情に戻って、

「母が一人で写った写真しか無いのに、幸一さんは、母が二人で旅行したと思わはるの？」

と、客観的な意見を幸一にぶつけた。

「この写真を撮った人が必ずいるはずや。京都生まれの京都市育ちのお母さんが、京都の有名観光地を一人旅して、カメラの自動シャッターや、通りすがりの人に頼んで自分の写真を撮ってもらうなんてかなり不自然や。一緒に旅した男とお母さんが恋愛関係やったかどうかはわからへんけど」

「本当は二人で写った写真もあったのかも」

真理は、写真をきれいに束ねながら呟いた。

「俺の別れた彼女に聞いたけど、彼女は俺が写った写真を全部破いたらしい。別れた夜に……」

真理は、相変わらず何でも正直に話してしまう幸一を、驚きと愛情を含んだ視線で包んでから、

「そう考えるのが一番自然やね。母はその男と旅をした後、喧嘩でもしたのか、男が写った写真を全部捨ててしまった。自分が写ったものだけ思い出に置いてはあったけど、そのうち置いていることすら忘れてしまわはった。それをたまたま秋子が見つけた」

と、かなり客観的な結論を出した。

「そうやとしたら、何のために秋子さんと一緒に過去の旅を再現する必要があるのか。電話の内容からしても、何となく秋子さんもそ

の男に協力しているようにさえ感じるけどなあ」

幸一が疑問だけを置いて立上った。そして真理の手から写真の束を取って、秋子の机に戻った。

「私もそう感じていたの。秋子が男に協力しているような感じ。そやから、母に連絡したらあかなくて何度も言うのも、心配させたくないだけでなくて何か理由があるのかも……」

幸一は真理の言葉に背中を刺されたような驚きを感じて、

「なるほど。確かにあり得る話しや」

と、驚嘆の表情で彼女を振り返った。

真理は幸一に、にこりと微笑み返しをしてから窓際へ歩んだ。幸一はすべての写真を集めて、裏の日付順に分類を始めた。

「昭和四十八年九月二十七日」

彼は、ぶつぶつと口籠りながら仕分けをしていった。

「秋子ももつと電話くれたらええのに」

開け放った窓から割り込んでくる堤防工事の音が、折角の川風を暑苦しいものにしていた。真夏の強い日差しが、彼女のやや陰鬱な表情に反射して、妙なコントラストを醸し出していた。

「無理やり協力させられているのかも」

真理は唐突に振り返って、やや張り詰めた声を出したが、幸一は別段驚きもせずに、

「その可能性は大やと思う。何の接点も無かった男にいきなり協力するなんて普通は有り得ないよな」

と、平然と答えた。真理は微かな笑みと、信頼の眼差しを幸一に送ったが、彼は全く気づかずになっていた。真理は手持ち無沙汰に部屋の中をうろつき始めた。そうして、時折幸一の方を盗み見たが、彼は秋子の椅子にふんぞり返って頭を抱えたり、目を閉じたりしてしきりに悩んでいた。真理はふと、煤ぼけた戸棚の上に陶器の灰皿が置いてあるのを見つけて、

「煙草、やめはったの？昔はよう吸うてはったのに」

と、幸一の興味を引くように話題を提供した。だが、真理の言葉に

幸一は苦笑いを浮かべるだけで返答しなかった。

「二十歳にならあったんでしょ？」

「ああ」

「ほんなら堂々と吸えるわね？いつ二十歳にならあったの？」

「七月四日」

彼は粗暴に答えたが、真理は気にも止めずに、

「私は四月十日よ、覚えていてくれはった？」

と、冗談気味に語尾を跳ね挙げた言葉を残して部屋を出て行こうとした。と、その瞬間、

「何やて！」

幸一の張り詰めた声が彼女の背中を貫いた。

「どないしたん？大きな声ださはって」

驚愕した彼女の顔が青ざめて可哀想であった。

「ごめん。君の誕生日は昭和四十八年の四月十日なんやね？間違いないね」

「そうよ。やっぱり忘れてはったの、悲しいわ」

真理は平静に戻った様子で、わざと拗ねた表情を作って見せた。

「いいか、この写真は昭和四十八年の九月二十七日から三十日の間に撮影されたものや。つまり、男とお母さんが旅をしていた時、君はもう生まれていたんや。お母さんはもう結婚してはった。普通に考えると……」

真理は、幸一の言葉のすべてを聞き終えるまでに、柱に寄り掛かったまま力なく床に崩れ落ちた。

「秋子さんはこの写真を見たときに、日付のことに気づかあったんやなあ。そやけど相手が知れへんさかい、不可解なまま放っておいた。そこへある日手紙が来て、お母さんの写真が同封してあった。しかもその写真は、この束になった写真と同時期に撮られたもののようにやった……」

真理はぼんやりとうつ向いたまま身動き一つしなかった。

「秋子さんは、この辺りの事実をねたに、何かに協力させられてい

るのかも知れへんな、お母さんを傷つけまいとして。だから執拗に、お母さんに連絡したらあかんと言った」

真理にとって冷たい現実を突きつける幸一の言葉が、真理の心を凍らせたみたいであった。彼女はしばらく床を見つめたまま呼吸すらしていないかの風であったが、やがて静かに立ち上がり、精一杯の作り笑顔を幸一に向かって浮かべた。

「冷たいコーヒ飲まはる？」

「ありがとう」

真理の夢遊病者の如く不規則な足音が、静かに階段を降りて行った。

一階からアイスコーヒーを運んできた真理は、幸一の横顔を確認してから秋子のベッドの枕元にある五十センチ四方位のガラステーブルに盆を置いた。

「写真をじっくり見て二人のコースを整理してみたんや」

真理の動きなど全く気にしていない様子の幸一が、そう言って小さなメモを手にながら自慢げに彼女の表情を伺った。真理は落ち着いた表情で幸一のグラスをコースターと共に秋子の机に運んだ。

「シロップはいらなかったわね？」

「うん」

彼女はコースターを敷いてグラスを置き、フレッシュミルクを幸一の手元に置いてから、

「どんなコース？」

と、ベッドに戻りながら尋ねた。余り興味が無さそうな雰囲気であった。

「一日目、円山公園―清水寺―平安神宮―銀閣寺。二日目、大原三千院―寂光院。三日目、銀閣寺―龍安寺―清滝―高雄高山寺。四日目、松尾大社―大覚寺―嵐山。お母さんが一人で写ってる写真ばかりやし、写さなかった所もあるやろうから、抜けている所があるかも知れへんけど、だいたいこれくらいやと思う」

幸一は静かにそう言った後、目を閉じて椅子にもたれ掛かった。レ

ースの白いカーテンがなびいて、涼しい微風が舞い込んで来た。真理は、ベッドに腰掛けてから自分のグラスにシロップを注ぎながら、「そう」

と、他人事みたいに呟いた。もっと関心を抱くだろうと期していた幸一はちよつと落胆した。しかし、真理はまだ先ほどの衝撃が尾を引いているのだと感じて、彼も無表情のままフレッシユをグラスに注いだ。そして白い液体がコーヒの中に、地下水のように潜り込んでいく様子を見て、不思議な落ち着きを覚えた。

「じゃあ、三日目のコースを辿ればどこかで秋子に会えるかも知れないわね」

真理がストローに口を付けて氷の音を響かせた。

「二十年前のこの日はあまり天気が良くなかったみたいで、影がぼやけてよく見えない」

幸一は数分前に真理と同様なことを考えていたので、すぐに返答できた。

「だから？」

「だから時間の見当がつかない。何時頃にどこへ行ったのか、どういう順番で旅したのか確証がない。さっき言ったのは俺の勝手な旅行プランやからな」

幸一はそう言って小さく吐息をついた。

「なるほどね……」

真理も少し目を伏せてコーヒを咽に流し込んだ。幸一は、しばらくの間ぼんやりと写真を見つめていたが、突然笑みが浮かんできた。

「どうしたの？」

真理も、小首を傾けて小さく笑った。

「何でもない。でも、こんな時にこんなこと言うたら悪いと思うけど、俺は今とても幸せなんやて気づいたんや」

「……」

「君とこうして一つの問題に取り組んでいることが」

「問題が他のことやったらいいのにね。でも、私も幸せよ。それに、

こんなに真剣になったはる幸一さんを見るのも久しぶりやもの」

真理がそう言ってグラスをテーブルに戻した時、雫がきらりと輝いて床に落ちた。

「そもそも口を利くのも久しぶりやから」

幸一はグラスから雫が流れ落ちる前に一気に飲み干してしまった。

「でも、口は利いてないけど、時々は幸一さんのこと見てたんよ。」

高三年の秋にあったソフトボール大会の時は真剣に投げてはった」

「君のクラスと決勝で戦ったな。敵を応援している君にむかっていたけど」

「だって自分のクラスやもの、応援するわよ。幸一さんはピッチャーで、球が速かった。でもうちのピッチャーも上手かったから投手戦で締まったゲームやったわ」

真理は懐かしそうに話しながら脚を組んだ。

「良く覚えてるな」

幸一はグラスを置くとゆっくりと立ち上がった。

「そりゃあ、あんなに印象に残るゲームやもの、覚えてるわ。七回裏ツーアウト満塁。得点三対二。後ひとつアウトを取ったら幸一さんチームの優勝。最後の打者が打った当たりはボテボテのゴロ。運悪くピッチャーとサードの間に転んで、幸一さんがダッシュして捕球。ファーストに投げた剛速球が暴投。ボールがミットを弾いて転がる隙に逆転サヨナラ。楽しいゲームやったわ。うちの優勝に貢献してくれてありがとう」

真理はそう言って明るく笑った。

「今の解説にはひとつ誤りがあるよ。俺の送球は暴投やない。あれはファーストのエラーや」

幸一はどうでも良いと思いつつも悔しいので訂正した。そしてベツドに腰掛けている真理の横に座った。

「まあ、俺の人生あんなものよ」

幸一は軽く笑いながらも、何をやっても中途半端だった高校生活の虚しさが蘇ってきた。

「たかがソフトボール大会でも全校三十チームの中で優勝するのは大変なことやと思うわ。決勝まで進んだだけでもすごいやないの」
幸一はもうそんなことよりも、ミニスカートから伸びている彼女の白い脚が気になって平静を装うのに苦労した。

「今夜、木屋町にでも飲みにいこか？」

「連れてってくれるの？嬉しいわ。焼鳥屋さんに行きたい」

真理は喜々として幸一の腕を握った。

「焼鳥ね、了解。じゃあ、五時に上賀茂神社バス停に集合しよう」

幸一は、立上って窓の外に視線を伸ばした。工事の音が再び大きくなって幸一の耳に不快な響きを与え始めた。

清滝川の川辺は涼やかであった。堤にあるベンチに腰掛けて木陰の恩恵を受けていると、涼風と清流の流れる音で眠気に誘われた。

昨夜は真理と焼鳥屋で食事をし、ショットバーで少し飲んでから彼女の家まで送った。幸一は少し飲み足りない思いのまま部屋に戻ったが、偶然友人が訪ねてきて朝まで飲んでいた。

幸一は昼まで寝ていたが、昨夜ショットバーで不安に苛まれた真理の瞳に映ったダウンライトの輝きが、あの大晦日の焚火の輝きのようで、彼女が今一番望んでいるものを叶えてあげたくなった。それで、大した考えもなくバイクで飛び出した。

まずは金閣寺の駐車場で半時間程周囲を見渡しながら過ごした。次に龍安寺へ移動して境内に入ってみたが、広すぎてどこを探せば良いのか迷った。鏡容池で佇むのも束の間、はっと気づいて、龍安寺を訪れた観光客が必ず見に行く石庭の入口付近に移った。そこで行き交う人々をさりげなく確認しながら、秋子と謎の男が通るのを待ってみた。一時間ばかり待ってみたがやはり出会わなかった。そもそも、二人がどんなルートで巡るのか全く見当がつかない。ただ何となく、宿泊するなら風情のある清滝とか高雄や嵯峨野辺りが良いと感じた。だから昼間は金閣寺や龍安寺など、比較的賑やかな所から巡っているように考えてみた。

幸一は龍安寺で捜すことを諦めて、清滝までやって来た。道端にバイクを止めて清滝川の堤を少し歩いた。程良い所にベンチがあったのでそこに腰掛けた。幸一は眠気に誘われながらも真理のことを考えていた。

高校二年の終わりに別れたきり、一度も口を利いていなかった。何度か校内ですれ違う事はあっても、挨拶すらしてもらえなかった。完膚なきまで心を叩きつけられた。真理はいつしか思い出の女としてしか生きられなくなっていた。幸一にとって実際の真理はもう別人物であった。高校を卒業し、思い出の真理はそのまま幸一の記憶の中で行き続け、現実に戻りなど露ほども思っていないかった。

それが全くの偶然から二人は再会し、昔の事など何もなかったかのように自然に振舞っている。経る年月というものの力に感嘆しつつも、どれだけ経ても、まだ胸の奥深くに眠っていた真理への情熱が再燃していることに、自然の矛盾を覚えていた。

幸一の半ば眠った脳裏には、修学旅行で訪れた、上高地が梓川の流れと、さわさわとした空気の中で清潔な笑顔を浮かべている真理の映像が浮かんでいた。清滝川の流れのためかも知れなかった。

卒然、身体がピクリと痙攣して目が開いた。眠っている積りは無かったが頭はすっきりとリセットされていた。もうここへは二人は来ないと結論付けて高雄へ向かった。高山寺参道の入口付近にある食事処にバイクを止めて、店内に入った。考えてみると起きてからまだ何も食べていなかった。秋子の搜索は後回しにしてとりあえず腹ごしらえをしようと思いついた。

自動扉をくぐると、店員の歓迎の声と視線が集まった。空席を探して他の客との間隔を考慮した席に腰を降ろした。と、その瞬間幸一の感性は、昔の同士に会ったような懐かしさで満たされた。二年前に真理が失踪した時の不安と重圧に、共に耐えた同士に出会えた懐かしさで満たされた。間違いなく秋子であった。幸一の席から五メートルほど離れた席に、男と向かい合って微笑んでいる女性は秋

子であった。二年ぶりであったが一目でわかった。真理よりもやや顎が細くてシャープな印象であった。

幸一は真理のために二人を見つめようとしていたのに、発見した瞬間は秋子への懐古の情で一杯になった。いや、あの夜の緊張感が懐かしかったのかも知れない。その緊張の渦の中で、時折愛らしい表情を浮かべていた秋子に、特別な魅力を感じていたのも事実であった。だが、それは特殊な状況であるが故に生まれた感情であるので、時の経過と共に忘却していたが、今、あの時の感情が津波のように打ち寄せてきた。

しばらく、呆然と秋子を見つめていた幸一は、我に戻って、ざる蕎麦を注文した。そして二人を観察した。男は幸一に背を向けて座っている。顔は見えないが小柄であった。白髪交じりの頭髪で、グレーの落ち着いた色彩のボタンダウンを着ている。五十代前半の印象であった。だが、幸一が一番驚いたのは秋子の表情であった。とても楽しそうに話している、自然な笑顔であった。何かに無理やり協力させられているような雰囲気ではなかった。仲の良い親子か不倫カップルに見えた。仕事の仲間には見えない。秋子が若過ぎるためかも知れない。

幸一は迷った。ここで声を掛けて秋子を連れ戻すべきか、後一日そっとしておくべきか。この雰囲気なら、明日の旅程が終われば秋子は戻ってくるような気がした。いや、もっと正直に言うとなを掛けられるような雰囲気ではなかった。あまりに楽しそうで柔和な空気に楔を打ち込むようなことは気が引けた。当然ながら秋子の幸福そうな笑顔は初めてであった。

幸一は目の前に運ばれたざる蕎麦を見ると、急に食欲が湧いてきて思考が切れた。秋子のことより蕎麦を食べることに意識が集中して、ずるずると大きな音をたてて蕎麦をすすった。店内は空いていた。昼食時とはとくに過ぎていて四時前であった。幸一の蕎麦をすする音が大きく響いて、他の客がちらりと幸一に視線を送った。幸一がふと視線を上げた時に、秋子と視線が合ったような気がして、

慌てて蕎麦を見つめ直した。

やがて幸一が蕎麦を食べ終わった頃、秋子たちは立上って店を出ようとした。二人が幸一の横を通ってレジに向かった。幸一は男の顔を盗み見た。やはり五十代前半位だが、細身で顔色が良くなかった。しばらく病気で寝込んでいたのではないかと疑える程であった。男の後ろを秋子が付いて歩いた。まっすぐに前を向いて歩いていたが、幸一の横を過ぎる瞬間、軽く微笑んでから、人差し指を自分の唇に当てて、幸一の行動を制した。

幸一は驚いて微笑むことすら出来なかったが、明るいグリーンのショートパンツから伸びた、白くて細い脚に視線を落した。後は男に気づかれぬようにこっそりと二人を見送った。

幸一は部屋に戻る前に真理の家を訪ねてみた。

「秋子から電話があったわ」

幸一が玄関に入るなり、台所から小走りに近寄ってきた真理が、濡れた手をエプロンで拭いながらやや堅い口調で報告した。

「どこから？」

彼は、全く興味がないかのような冷淡な尋ね方をした。

「場所はわからへんけど、きれいな川の側で昼食を摂ったって。それから明日には必ず戻るさかい心配しないで、て言わはったわ」

真理は堅い表情で早口に話した。彼女はふと、玄関で立ち話をしていることに気づいてにこりと照れ笑いを浮かべた。

「ごめんね、つい興奮して……。どうぞ上がって」

と、明るい声で空気を変えた。スリッパを彼の前に並べる慎ましやかな仕草に大人の女を感じる反面、生活臭さも同時に感じた。

真理は幸一を応接間に通そうとしたが、幸一の要望で秋子の部屋に入った。

「周りはどんな様子やった？ 静かやったとか、車の音がうるさかったとか」

真理は記憶に耳を立てるような幼くて可憐な仕草をして、幸一の美

的感觉を満足させた。

「そうねえ、とても静かやったわ。多分、川の流れ落ちる音かな、どおーっていう音が、声の後ろでしていたような気がするわ」

「上出来や」

幸一の、妙に落ち着いた声に真理は不思議な表情を浮かべたが、すぐに愛想笑いを浮かべた。

「幸一さんは秋子の居場所知ったはるの？」

彼は真理の純朴な表現を面白く感じながら、

「だいたいね」

と、さらりと答えた。真理の表情がぱっと生気を漂わせて、

「どこ？」

と、澄んだ瞳で幸一を見つめた。そんな純真な表情が素敵で、思わず唇を奪いたくなるような衝動に駆られた。

「清滝」

「ほんなら今から行ってみましょう」

しかし、幸一はかすかに首を振って優しく言った。

「もう、そこにはおらへん」

真理も実はそう考えていたのか、彼の言葉に念押しされたように静かに消沈して行った。

「でも、明日には帰って来るって言わはったんやろう？」

幸一は、高雄での二人の雰囲気と秋子のサインを思い浮かべながら、秋子は無事に帰って来ると実感していたから、真理にも大人しく静観していて欲しかった。だが、事情を話しても、余計に厄介なことに成りそうだったので、態度で示唆するしかなかった。しかし、真理はそんな幸一の態度など全く気づかない様子で、

「明日は四日目やから嵐山に行かはるはず。四日目の写真に嵐山の風景が撮った写真があったもの。そやさかい嵐山に秋子を迎えに行くわ」

と、固い意志を全身で示した。

「そやけど嵐山言うても広いで、どうやって捜し出すんや？」

幸一の問いに、真理は不安な眼差しを隠すように、ゆっくりと瞬きをしてから、

「嵐山を訪れた人が必ず通る場所があるやないの」と呟いて幸一をどきりとさせた。

「渡月橋」

幸一はぼそつと諦め口調で呟いた。

「これこれ」

真理は、母が橋の欄干に寄り掛かり、保津川を背景に撮っている写真を幸一に示した。男がずっと持っていたと思われる、秋子に送られてきた写真である。

「お母さんの影が橋のほうに伸びているし人通りも少ない。つまり夕方の遅い時間に訪れてはる。恐らく、明日も夕方に橋を通る」
幸一は仕方なく真理の企みに協力した。真理は彼の言葉を聞きながら、やや不安そうに前髪を掻き撫でてから窓際に近づいた。

時折、石を砕くような音が堤防の方から伝わって来た。ここに来る度に耳にしている音なのに、今日はとりわけ気になった。

「外はうるさいね」

「そう？」

真理は全く気にならない様子で、さっきの写真を片付けていた。

「ほんなら明日の午前中はどこか行こうか？夕方まで」

幸一が明るく提案した。

「連れてってくれはるの？うれしいわ」

真理もぱっと明るい表情に移って彼を見つめた。

「どこがええ？」

「平安神宮。お正月にしか行ったことあらへんし、正月はすごい人で何にも見えへんさかい」

まるで答えを用意していたかのように即答した彼女の瞳は、素朴な輝きを放っていた。

翌日、岡崎公園の駐車場にバイクを置いた二人は平安神宮を目指

して歩いた。

「あれは何？」

疎水の向こうに見える古い建物を、真理が細い指で差し示して幸一を見上げた。

「美術館やったと思う」

「興味なさそうね」

「ない」

そっけない幸一の返事だが、真理は気にもせず、興味津々に辺りを見回して足取り軽く歩いた。公園のグラウンドでは野球をやっていた。その隣では、白いテニスウェアに身を包んだ若い女性たちがラケットを持って不器用に駆け回っていた。幸一は眩しそうに彼女たちの汗を眺めながら、自分は汗をかかないようにゆっくりと歩いた。「テニスしたいんでしょう？ 本当は」

不意に、真理が幸一の心を覗き込んだ。

「あんな疲れること……嫌や」

「情けない」

真夏の太陽に反射して、真理の笑顔は眩しいくらいに輝いた。幸一には耐えがたいこの直射日光も、真理にとっては、より美しく輝くためのエネルギーでしかないようであった。冷泉通りを渡る時にふと手が触れ合って、自然に握り合った。真理は眩しそうに応天門を見上げて、

「大きいわあ」

と感嘆の声を上げた。

「境内に入る前に手を清めるんやったな」

幸一は、大晦日の夜に真理に教わったことを思い出して、手水所まで彼女の手を引き、杓子で神水を掛けた。冷たく透き通った水が彼女の白い手を濡らせていく様を、どこか別世界の風景を見ているような気持ちで眺めた。今度は真理が幸一の両手に神水を掛けた。こちらの方が、汚れた物を清めているという実感が湧いた。

幸一は掌を神水で清めた後、二三度手を振ってズボンで拭いた。

「そんなところで拭いたら、せっかく清めた手が汚れてしまうわ」
真理は、大笑いしながら自分のハンカチを差し出した。

「いいよ。ハンカチ位持っているさかい」

そう言った幸一は、ポケットからよれよれの汚れたハンカチを取り出した。

「ズボンで拭きなさい」

真理は先程よりも大きく笑って、明るい空気を周囲に振りまいた。

応天門をくぐると、壮麗な建物に囲まれた境内が目の前に広がった。丹朱が艶やかで、幸一は昔ながらの歩き方で、踵を引きずりながらだらだらと歩いた。こうして歩いていると、二年のブランクなど無かったかのような、ずっとこうやって二人で歩いて来たような錯覚を覚えた。二人は拝殿で賽銭を投げてから参拝の礼をとった。

「また、例のお願いしはったの？」

「うん」

幸一は頷きながら小さく笑った。

「この世からありとあらゆる災害や人災が無くなって人類が平和に暮らせますように？」

真理は、八坂神社で幸一から聞いた祈りの言葉を記憶の奥から引き出してきた。彼女は、真剣に手を合わせている幸一の姿を見て、秘かに感心している様子であったが、実際のところ幸一は、神仏に祈ったところで願いなど叶うはずもないと確信していた。だから、どうせ叶わないのなら絶対に叶うはずもないことを、平和、平和と唱えるだけで平和になると思っている、無責任な平和主義者に対する皮肉をこめて祈っているのであった。

二人は神苑の中へ入って行った。神苑に足を踏み入れた途端、夏を忘れさせる冷厳な空気が二人を包んだ。

「春と秋が最高。らしい……」

幸一は花びらの無い枝垂れ桜に、勝手に花を着色して感嘆した。

「前はその時分に来はったの？」

「いや、初めて」

「そう、上品な庭ね」

真理は幸一の細かい嘘など気にも留めない様子で庭を見渡した。二人は、しばらくは何も話さずに歩いていたが、白虎池の淵で幸一が不意に立ち止まった。

「今はどう思う？俺のこと……」

深緑色の池にたくさんの錦鯉が優雅に泳いでいた。

「好きよ、昔と同じくらい」

池にこぼれ落ちた真理の恥じらいを、錦鯉が拾って行った。

「ありがとう。でも俺はいい加減な男やで、相変わらず」

「みんな同じやわ。まだ若いし、中途半端」

妙に大人びた真理の言葉に幸一は胸を突かれて、松の枝の透き間から青空を覗いた。

「人を傷つけてばかりいる……。自分勝手に、我儘で、強情で。自分を十分に制御できない」

幸一は、真理と視線を合わせるのが嫌で、鯉が跳ねるのをじっと待ちながら言葉を続けた。

「君と接するとまた傷つけてしまいそうで自信が無い」

彼の言葉は微風のように、真理の頬をさすって去って行った。彼女は微風を味わうかのように深く息を吸ってから、

「そんなお互いさまやわ。鯉が泳いだら、右にも左にも波紋が広がるわ。人が何かをすれば、必ず誰かに波がぶつかる。その波が都合のいい時もあれば悪い時もある。若い時は起こす波も高いし、耐える力も弱い。みんなお互いさまよ」

と、言い残して歩き始めた。幸一は、昔から、大人びた言葉で真理に諭されている自分を可笑しく感じながら、彼女に惹かれるように後を追った。二人の、玉砂利を踏む音が夏空に突き抜けて、実に静かな夏であった。と、にわかには真理が幸一を振り返り、なぜだか赤ん坊のような微笑みを浮かべてから、すぐにまた背を向けて歩き始めた。幸一は、真理に導かれるように歩みを速めて、彼女と平行に歩んだ。そして幼児のような白い手を再び柔軟に握った。

深緑の池に太陽が乱反射して、雅な古の世界へ吸込まれてしまいうのであった。二人は白虎池に架かった渡殿に足を踏みいれて、手を繋いだままのぎこちない動きで欄干に身を寄せた。そして静かに泳いでいる鯉を覗き込んだ。

「幸一さんは？」

遠くで鯉がぴしゃりと跳ねた。

「どう思っているの？」

その波紋がこちらまでやって来ないかと、幸一は波の紋をじっと目で追ってみた。しかし、波紋は自然に消えて、元の静かな池の面に戻ってしまった。

「好きや」

幸一は小声で呟いた後、もう一度どこかで鯉が跳ねないかと目を凝らして捜してみた。

「ありがとう」

真理も深緑の面に目を凝らしながら、繋いだままの手を握り直した。幸一も彼女の手を包み込むように柔らかく力を入れた。

再び鯉が跳ねた。今度は二匹が同時に跳ねて、その波紋が二人の心の波のように思えた。そしてその二つの波紋が重なった時、幸一は心静かな満足感を覚えた。

拝観順路の中でも目玉である泰平閣は、たくさんの人が往来する。そしてみんな決まり事のように、欄干に身をもたげたり、腰を掛けたりして写真を撮っていた。

「写真が好きやなあ、日本人は。過去を振り返るのが好きな民族なのか」

と、幸一が観光客を横目に見ながら呟いた。

「思い出を大切にしているのよ。人生を大切にしたいから」

と、真理が軽い調子で答えた。

「思い出を振り返って、過去を肯定することが人生を大切にすることになるのかなあ？」

「振り返ることが過去を肯定するとは限らない。同じ過去でも、振

り返る度に肯定したり、否定したり、主観的に変化するものやさかい、思い出なんて……」

二人の間に、この二年間、お互いが相手のことをどんな過去として捉えていたのだろうかという疑問が自然に発生して、気まずい雰囲気は漂った。幸一は焦燥気味に言葉を探しながら深い呼吸をした。そうして語気を明るく変えて、

「今が愛おいしいから思い出に残したいだけなのかも知れへんな」と少し照れくさそうに呟いた。

「そうやね。写真に残したことで安心できるのは事実やわ。いつでも思い出すことができるから。そやけどまあ、その写真のおかげで、今回はいろいろと手掛かりが出来たわね」

真理は軽く左目を閉じて幸一に新鮮な笑顔を送った。またどこかで鯉の跳ねる音がした。

第三話 モノクロームな風景 一（前書き）

渡月橋で秋子と謎の男を待ち受ける幸一と真理。秋子は無事戻ってくるのか？秋子の冷たい表情の理由は……。秋子は無事戻って

第三話 モノクロームな風景 一

陽が傾いて夏の夕方の雰囲気に含まれる頃、二人はバイクに乗って西に向かって疾走していた。夏の風ではあるが、バイクで走っている心地よい風であった。背中だけが、真理の身体で熱かった。

御池通を堀川まで進んで南下。四条通を嵯峨野に向かって風を切った。自動車の往来も多いが、バイクの特性を生かして渋滞をすり抜けた。道路標識に嵐山の案内が出始めた頃には、長い夕影が濃い色を落とし始めていた。幸一の背中にしがみついている真理とは声が届きにくくて話せないのに、身体が触れ合っているだけで心が通じているような安堵感を覚えた。三十分程で嵐山の渡月橋付近に到着した。

「さすがに人は少ないわね」

真理は片手でヘルメットを幸一に渡しながら、もう一方の手で髪を掻き撫でて爽やかな口調で言った。

「お店はまだ開いているなあ」

どこの土産屋も忙しいピークを過ぎて、一段落しているような雰囲気があった。

「おなか空いたんでしょ？ 帰りに三人で何か食べましょう。そやさかいもう少し我慢してね」

と言った真理の言葉は、夕風に流されて行った。

二人は駐車場から川に沿って渡月橋まで歩いた。川べりのさわさわとした空気の中で、水のぶつかり合う音が、絶間なく峡谷の空間を抜けて行った。二人は橋の中ほどで立ち止まった。

「ほんまに通るのかしら？」

ちよっぴり不安気に真理は幸一を盗み見た。

「間違いない」

と、実のところ自信が無いにも拘わらず堂々と答えた。来ることには自信があったが、何時くらいに来るのかはわからなかった。夕方

と言っても、もうとつくに通り過ぎているのかも知れなかった。

「秋子さんも、きれいにならあったやろうなあ。あの時に会ったきりやけど」

幸一は、澄んだ川の流れを目で追いながら、昨日見た秋子の表情は敢えて思い出さずに、二年前の記憶の映像にまで視線を向けた。

「ええ。でも、あの娘も去年の数ヶ月間、非行に走っていたんよ。随分心配させられたわ」

「へえ、あんなに真面目そうな娘がねえ。信じられへんなあ」

幸一は意外な表情を浮かべて真理の横顔をちらりと覗いた。幸一は橋の欄干にお腹を当てて川を見下ろすようにしていたが、真理は背中を欄干に預けて、橋を通る人々に目を配っていた。

「お酒は飲むわ、煙草は吸うわ、夜遊びして帰って来ないわ。随分やったわ。」

「ごく普通の高校生やないか、そんなことくらい」

真理は彼の言葉にふっと笑いを零してから、

「幸一さんならね。でも我が家では大騒動の連続やったんやから」と、人通りを見つめたままで呟いた。

「そう、それは大変やったね」

「ほんまにそう思てる？」

真理は幸一をちらりと斜めに見上げて疑わしそうに呟いた。

幸一が初めて秋子に出会ったのは、真理が蒸発騒ぎを起こした寒い夜であった。秋子は目元が真理にそっくりであった。いや、二人とも母親にとっても似ている。心底真理を心配しながら、緊張と不安に耐えている健気な秋子を、幸一はとても愛らしく感じた。

あの夜、真理を連れ戻した後、幸一が真理の実家から帰る際に、最後まで見送ってくれたのは秋子であった。その時の秋子の清純な印象は、その後も漠然と彼女の面影の記憶として、幸一の脳裏に焼き付いていた。

「何で非行に走ったの？まあ、非行に走るのに明らかな理由なんてないと思うけど……」

「ええ、その通りやわ。半年もしたら元通りに戻ったしね。でも関係はないと思うけど、今から思うと一つだけ、なんや妙にタイミン
グが一致する騒ぎがあったの」

「騒ぎ？」

幸一の表情が突然興味を深めた。

「確か去年の春頃かなあ、父の健康診断の結果が病院から郵送されてくるはずやったのに、なかなか来なかったの。父が病院に問い会
わせたら、病院側は既に送ったと回答したそうやの。何やその時の
父の慌てようは恐いくらいやったわ。家中を捜し回らはったけど、
結局見つからなかった。その頃から秋子の様子が変になったの」

「お父さんは何かの病気？」

「いいえ、元気よ。持病なんてひとつもあらへんわ」

「不治の病であることを秋子さんが知ってしまったとか……」

「生憎、まだ元気に生きてはるわ、うちの父は」

真理はそう言って、幸一の横腹を人差し指で突いた。幸一はふっと空
を見上げて、少しずつ寂寥の感を呈し始めている夕空を、寂しい風
景として心に刻んだ。

そんな会話を続けているうちに、一時間程が経過した。次第に人
通りも少なくなり、観光バスの姿も数台になってしまった。幸一の
腕時計が五時前を表示していた。

「そろそろ、やなあ」

まだかなあ、と言う言葉の代わりに彼はひとり言のように呟いた。
俄かに真理の緊張が伝わってきた。

「何でわかるの？」

「もう、夕食時から」

幸一は身体の向きを変えて、橋を往来する人々の顔に視線を走ら
せた。真理は少し怪訝な瞳を浮かべて不満気に幸一を睨んだ。

「お腹が空いただけでしょ」

真理はそう呟いてじっと彼の反応を待った。

と、幸一の表情が唐突に堅くなるのに気づいてその視線を辿った。

真理の視線は、渡月橋の北詰から近づいてくる五、六人の群れにたどり着き、その後にいる二人の男女を捉えた。女は俯いていたが、真理にはすぐにそれが秋子だと感じ取ることができた。幸一の瞳が緊張の輝きを放ち、目立たぬようにそっと歩き始めた。が、その刹那、

「秋子！」

思わず叫んだ真理の声が、夕闇に静かに沈んで行こうとする周囲の空気をぴんと緊迫させた。

『バカ！』

幸一は心で叫ぶや否や反射的に駆け出していた。二人とは三十メートルばかりの距離があった。

秋子の驚いた表情が寂寞の氣にぼんやりと浮かんだ。男は驚いて逃げ出した。男は秋子を残したまま周囲の人を押し退けて走り去ってしまった。小柄な男で、薄い茶系のシャツを着ていた。白髪まじりではあったが、童顔であった。高雄で見た時よりも更に小さく映った。

男は一度振り向いたきり全力で走り続け、タクシーに飛び乗って去って行った。反射的に幸一も後を追ったが、男を捕まえることに何の意味も無いことに気づいてすぐに引き返した。

荒い息を吐きながら幸一が戻ってくると、真理が悲しそうな表情を浮かべて、秋子の手をしっかりと握って立っていた。だが、秋子は微かに表情を緩めただけで、ほとんど無表情であった。

「ごめんなさい。私、つい興奮して……」

真理は心持ち紅潮して幸一に詫びた。

「かまへん、秋子さんも無事やったことやし」

そんな風に明るく笑いながら答える幸一を、秋子はしばらく見つめてから、

「三浦さんでしたね？ お久しぶりです。ありがとうございました。おかげさまで助かりました」

と、礼を述べると深く頭を下げた。幸一は、秋子の言葉の含みを色

々と推測してみたが、真意は解かりかねた。それは、今の秋子が、昨日の秋子の表情とあまりに差があることであった。昨日は男との旅を楽しんでいるかのようにも捉えることが出来たのに、さっき二人で歩いている時の様子や今の表情は、全く別人であるように感じた。血が通っていないと言うか、気持ちいここに無いと言うか……。やけに冷静とも取れる秋子の態度に、幸一は気味の悪いものを感じ取った。

その後の秋子は、全く口を開こうともせず、その場に突っ立っていた。通行人が怪訝そうに三人を盗み見ては、そしらぬ風に通り過ぎて行った。

「ほんなら、どうしましょう？　こちらはタクシーで帰るさかい、気の毒やけど、幸一さんはバイクで帰ってくれはる？」

『ごはんは？』

と思わず心で呟いた幸一は、

「ああ、そうする。気を付けてね」

と、さりと答えた。真理はちよつと笑みを浮かべてから、通りかかった空車タクシーに秋子と乗り込んだ。

「アパートに居たはるでしょ？　また電話するさかい遊びに来て頂戴」と、真理がドアの開まる間際に明るく言い放った。彼女はいつまでも後ろを向いて幸一に手を振っているが、秋子はまっすぐ前を向いたまま、人形のように身動き一つしなかった。

『またって、いつ？』

さっきは秋子が見つかったら食事をしようと言った。この夕食前の微妙なタイミングで、また連絡すると言われても困惑した。だが、次の瞬間にはそんなことは忘れ去って二人を見送った。

幸一は電気ポットのコンセントを差し込んで、湯を沸かし始めた。オーディオデッキの再生ボタンを押すと、この前聞いていた曲の途中から再生された。彼は買ってきた弁当を開いて、カップラーメンの下準備も行った。ビールは冷蔵庫にしまってから、お湯が沸くの

を心待ちにした。

とにかく、秋子が無事に戻って来たことで一段落した。後は他人が口を出す事ではない。彼は満足感と一種の充実感を覚えた。やや疲労感も感じたが、それ故、美味しいビールを飲めそうであった。

いよいよ湯が沸き始めて沸騰を示すランプが点くのをじっと待った。そうしてそのランプが点灯した瞬間、突然電話の呼出音が響いて幸一の幸福な心を打ち碎いた。

いかにも憎らしい音だった。仕方なく、座ったままで上体を目一杯伸ばして受話器を取った。

「幸一さん？」

張り詰めた真理の声が飛び出して来た。幸一のささやかな至福の時は一気に冷え込んだ。

「どうした？」

「秋子が、秋子がおらへんの……。あの娘がお茶を飲みたいと言うさかい喫茶店に入ったの。そしたら、私がちよっと席を外している間におらへんようになってしもうて。辺りを捜してもおらへんし、家に帰ってみてもおらへんの」

真理の声は不安に震えているようであった。

「わかった。すぐに行くさかい、じっとしときや。ええなあ」

幸一は、弁当を冷蔵庫に仕舞い込み、ビールを眺めてため息をついた。

「と言うことで、また後ほど」

ビールに語りかけた幸一は疲労感を覚えながらも、やはり行かずにはおれなかった。彼は再び冷蔵庫を開けて、弁当のおにぎりを一つ頬張って、ヘルメットを小脇に抱えた。

「秋子は、何でおらんようになるのよ……」

真理は溜息交じりに言葉をこぼした。彼女の吐息が部屋じゅうに拡がって、幸一の肩にも覆い被さってきた。幸一は彼女の電話を受けて馳せ参じたものの、真理の部屋でこうして時間を費やすだけで何

らなす術はなかった。

真理の部屋は秋子の部屋の隣にあって、広さも作りも同様であった。真理の部屋のほうが階段から遠かったが、窓から見える賀茂川の風景に変わりは無かった。

「母にもさっき電話したの。もう、隠していられへんさかい」

「そうやな。帰るって言うてはった秋子さんがいなくなっただんや。状況は変わっているしな」

「そやけど、母はもう事情を知ってはった。今から京都へ来はるけど、うちに来る前に知り合いと会うって言わはったわ」

真理は不安げに幸一を見つめて、彼の口から出て来るであろう冷たい現実に耐える覚悟をしている様子であった。恐らく、秋子から聞きだした実家の連絡先に男が連絡をして、母と話をしたのであろう。秋子と旅することが目的であったのか、実は実家の連絡先を聞き出して母と会うことが真の目的であったのか……。

「そう」

だが、幸一は思うところを胸に仕舞ったままで口に出さなかった。

秋子の居場所をつかむ手掛かりも無いし、電話もない。何の手も打てずに、真理と二人して焦燥の念に駆られながら無為に時を過ごしていた。真理が時々思い付いたままのことを口にするが、何も結論を出せないまま沈黙が訪れた。そして何も考えが浮かばなくなる

と、

「何でやの……」

と言っでは頬杖を突いてため息を吐いた。

幸一はいつのまにか真理のベッドに身体を横たえたまま眠ってしまった。ほんの少し居眠りしたつもりであったが、彼が目覚めた時には窓の外はどっぴりと闇に染まっていた。

「ごめん、眠ってしまった。もう九時か」

そう言いながら真理のベッドから離れて、畳の上に置かれた三人掛けのローソファーに腰を下ろして真理と並んだ。

「いいえ、うちの方こそごめんなさい。こんなことに幸一さんまで

巻き込んでしもて。でも、今は他に頼れる人がいないの」

「俺のことはかまへんから、気にするなッて」

幸一の言葉に真理は小さく頷いた。

「お母さん遅いね？」

幸一は何の意図もなくぽつりと言った。

「帰って来はらへんわ、きつと……」

投げやりに真理は言い捨てた。

「そんなことあらへん、もうすぐ帰って来はるよ。昔の友達に会うてはるから、話が弾んでいるんやろ」

そう言いながら、幸一は彼女の横顔を見つめた。

「そうね、今頃あの男と会うてはるわ」

真理は自分の吐いた言葉に表情が硬くなっていった。一番恐れていたことを思わず口に出してしまった様子であった。幸一も想像していたことであるが、彼女の気持ちを案じて口にはしなかった。

「会うて何してはるのかしら？」

真理は、恐れながらも幸一の意見を聞き出そうとした。

「お話ししてはる」

「何の話？」

「昔話に、現在のこと。それから男が現在の苦悩を打ち明けて、お母さんにお金を無心しているかなあ、昔の秘密をねたにして」

幸一は真理の瞳を直視できなくて、窓から伺える夜景に視線を外した。

「いったい、どんな秘密があるのかしら」

「それは知らん方がいい。知ったら、家族と一緒に居られなくなるさかい。秋子さんみたいに……」

真理は幸一を凝視し、幸一も彼女の視線をしっかりと受けとめた。

「俺は他人やからこんなこと平気で言えるけど、事実は事実として認めなあかん。誰にでも他人に知られたくない秘密ぐらにあるし、その秘密を子供が知ったら、親と顔を合わせられなくなるのも当然やろう。秋子さんは心配ない。時間が経てば元通りに戻るよ。何と

言っても血のつながった親子なんやから……」

幸一はそう言った刹那、胸の中を木枯らしが吹き抜けたような冷たさを覚えた。だが、実際に吹いているのは、扇風機と、賀茂川から流れる涼やかな風であった。

真理は凝固した表情を浮かべていたが、幸一の一瞬の燃焼に溶けるように表情が和らいで行った。

「渡月橋で話してくれたよね、秋子さんが非行に走ってしまったこと。確かお父さんの健康診断書が無くなったタイミングと関係するとか」

幸一が何かを思い立ったように語気を変えて尋ねた。

「ええ。それが？」

「健康診断書くらい再発行してもらえば済むことやのに、何で必死に捜さはったんやろう、病気でも無いのに……」

真理は不安げに虚ろな瞳を揺らしながら、

「血液型？」

と、誰に言うともなく呟いた。

「君の血液型は何型？」

「私はA型よ」

「お母さんは？」

「母もA型で父はB型よ」

「秋子さんは？」

幸一は、身を乗り出して真理の返答を促した。

「秋子はAB型よ」

幸一は大きく息を吸いながら、両足を投げ出して背もたれに倒れ架かってから天井を見上げた。

真理はゆっくりと瞬きをして、潤みかけた瞳で彼を見つめた。幸一は、その瞬間の彼女の表情がこの上なく美しいと感じた。

「診断書には本当の血液型が書いてあった。当然やけど……」

「もしも父がB型でなかったら？」

「A型かO型。秋子さんが疑問を感じたとしたら、そう言うことに

なる」

幸一は自分の推論が間違いであることを祈りながら言葉にした。

「秋子は、自分が本当の子供やないことを察して、一人で辛い思いをしてはったんやなあ」

真理は目尻に溜まった涙をそっと指で拭ってから、

「もしかしたら、私も偶然A型やっただけで、ほんまは両親の子やないかも知れへんわ」

と、床に目を伏せて呟いた。

「さあ、そこまではわからへん。自分で言っておいて悪いけど、何の証拠も無い推測やから、あまり気にしたらあかん」

幸一は無理に微笑んだ彼女が愛らしくて、そっと頭を撫でた。

と、その時階下で電話の呼出音が大きく響いて、やや落ち着きかけた真理の心臓を再び激しく刺激した。二人は足早に階段を降りて真理が受話器を上げた。

「もしもし、秋子？今どこにいるの？」

真理は張り詰めた声を廊下じゅうに響かせたが、静かに言葉を飲み込んで幸一に受話器を手渡した。

「秋子が替わって欲しいって」

幸一も怪訝な気持ちで受話器の向こうの秋子に思いを馳せた。

「もしもし……」

秋子の声は静かで落ち着いており、言葉もしっかりしていた。真理と声が似ているので、真理と話しているような錯覚を覚え、目の前にいる真理を見ながら不思議な体験をした。

「わかった。必ずな、約束やで」

幸一は最後にそう念を押してから受話器を置いた。早く情報を求める真理の瞳に向かって、

「秋子さんは、しばらく大学の同級生のマンションで世話になるそうや。学校もちゃんと行くし、今までのことを話せる時が来たら必ず話すし、気持ちが悪く着いたら必ず戻るから、心配しないで待っていて欲しいって言うてはった」

と報告して部屋に戻ろうとした。

「何で幸一さんやの？そんな話うちにしたらええやないの」
やや怒気を含んだ声が幸一の背中に刺さった。

「そんなこと俺に言われてもなあ」

幸一は早く戻ろうと目で真理を促した。だが、彼女はじっと突っ立ったままで、

「何か隠してはるでしょ。幸一さんの嘘がわからへんとも思ってるの？」

と、頑なに食い下がってきた。

「相変わらず鋭いなあ」

「幸一さんがわかりやすいのよ」

「とにかく部屋で話そう」

そう言って幸一は時間を稼ぎながら、どこまで話すべきかを考えていた。

「何で幸一さんの住所や電話番号を教えてはったの？」

部屋に戻るなり真理が質問を始めたが、彼女の言葉からは怒気が抜けて、いつもの口調に戻っていた。

「秋子さんは、しばらく家族と直接話したくないそうや。そやから何か用事が出来た際には俺が仲介する。そのために連絡先を教えただけや」

幸一はそう言ってからメモを走らせた。

「それから、これが秋子さんの連絡先。本当は家族にも教えるなど言われたけど、これは俺の責任で君とお母さんに教える。そやから、ほんまに緊急の時だけ使ってくれ。ええなあ、約束やで」

「わかった。おおきに」

真理は優しい表情に戻って幸一を見つめた。幸一は真理の視線を受け止めながら、これ以上隠していることを追求されないかと内心怯えつつも、彼女に見抜かれないように明るく笑った。だが、真理のまっすぐに見つめる視線にさらされていると、どう考えてもばれていると感じた。

翌日、真理の母が戻って来たのは昼前であった。幸一と真理は一晚中、一睡もしないで待っていた。空が白んで、元気な太陽が強い陽射しを射し始めた頃に、二人は居間に降りてテレビを見始めた。

幸一は、テレビを見ながらうとうととしていたが、真理に眠れと言われると、余計に意地になって眠らなかった。真理が台所で遅い朝食の準備をしている頃に玄関の扉が開いた。

廊下を小走りする真理の足音が聞こえて、彼女の挙動が手に取るようにわかった。

「どこ行っってはったの？心配したんよ」

泣き声のような真理の声が小さく震えていた。

「堪忍な。古い友達と会ってたの。そしたら他にも懐かしい友達が訪ねて来たりして、楽しく話し込んでるうちに遅うなってしもうてそれで泊めてもらったの。電話すれば良かったんやけど、夜も更けていたし……。ほんまに堪忍え」

真理はそれ以上追及せずに、幸一の方へやって来た。

「母が帰って来はったわ。心配掛けてごめんね」

真理は疲れた笑顔を幸一に送った。

「まあ、三浦君、久しぶりやねえ。一緒に居てくれはったの。堪忍へ、心配掛けてしもうて」

幸一は、母の疲労を感じ取って、昨夜の出来事が言葉のように楽しいものではなかったことを読み取った。そもそも、秋子が失踪したという連絡を受けて京都へ来たはずなのに、旧友と話し込んでいたなど、言い訳になっていなかった。

「じゃあ、俺は帰るよ」

幸一はそう言って立上った。二人の女は、少しでも食事をして仮眠してから帰るように説得されたが、バイクでわずか十分程の距離であるからと強引に辞した。

自分の部屋に戻った幸一は、冷蔵庫を開けて、昨夜の弁当とビールを取り出した。

「ただいま」

そう言って、冷たいおかずを口に入れて冷たいビールを流し込んだ。
「うまい」

ビールのアルコールが脳に回ると、さっきまでの色々な出来事がまるで夢の中の出来事のように感じられて、瞼が重くなってきた。瞬きをするたびに瞼が開いてこなかった。力を込めないと目が開かなかった。ビールだけは残してはならないと、早いペースで飲み干した。瞬きの度に目に集中して瞼を開け続けた。そんな努力を続けているうちに、いつの間にか弁当を残したまま深い眠りに落ちてしまった。

翌朝、幸一は早くに目が覚めた。さすがに昨日の昼から眠り続けただけあって、朝の五時頃には目が開いた。久しぶりに部屋を片付けて洗濯もした。それからトーストを焼いて質素な朝食を摂った。

コーヒを飲んで雑誌を眺めていると、また眠くなってうとうととしていた。そしていつの間にか浅い眠りに入り、夢を見た。バイクで真理と旅している夢を見たが、渋滞に捕まってあちこちで車のクラクションが鳴っていた。とても不快な音であった。それが次第に現実の音となって幸一は覚醒した。電話が鳴っていた。

「今度はお婆さんでも居なくなったのか？」

幸一はそうひとり言を言いながら受話器に手を伸ばした。案の定、真理の緊迫した声が受話器から飛び出してきたが、もう慣れてしまったのか、彼は動揺しなくなっていた。

「どうした？」

幸一は真理を落ち着けるように優しく尋ねた。

「母が警察に連れて行かれたの。森っていう人が自殺したらしいの。その死に母が関与している可能性があるさかい事情を聞きたいって……。さっき刑事さんに連れて行かれたの」

「わかった。すぐに行く」

さすがに幸一は、心臓の鼓動が激しくなるのを感じた。もう自分の

力など遥かに及ばない世界に入ってしまった。自分にはもう何も出来ないように感じた。自殺に関与とはどういうことか。真理の母が原因で自殺したのか？母が自殺を幫助したのか？それとも自殺に見せかけて……。テレビドラマでよく演じられるような場面が次々と脳裏に浮かんできたが、一方では冷静にそれを否定しながら、逆にその可能性を探ってもみた。

「幸一さん」

幸一が玄関に入るなり、真理が心細い声で彼の名を呼んだ。

「うち、どうしたらええの？もうわからへん」

幸一はにこりと笑ってから、

「大丈夫や。自殺やろ？その森とかいう男との関係なんかを確認するだけや。お母さんは何て言うてはった？」

「心配しないでいい。お母さんは何も疚しいことしてへんさかい、お父さんにもまだ連絡しなくて良い。て」

「警察の人は？」

「あくまで、参考までに話を聞きたい言うてはった」

幸一はまだ不安が拭えなかった。自殺と明言している以上、事件性は無いと判断しているのだろうが、警察が全く母を疑っていないとも言切れない。

「まず心配ない。恐らくその森という男が秋子さんを連れまわして、一昨日お母さんと会っていたんやろう。そやから自殺する前に最後に会ったのがお母さんということになる。遺書があるのかどうか知らんけど、きつとお母さんのことなんかも書いてあるのかも知れへんな」

真理は幸一の言葉を静かに聞いていた。

「新聞見せて」

幸一は、やや緊張気味な指先で、受取った紙面をめくりながら目で走査した。

「これや」

幸一は紙面に掲載された顔写真を指差した。例の男であった。地方

紙であつたので、割に大きく事件を取り上げていた。名前は森修二。そして、太い字で首吊り自殺という文字が事務的に並んでいた。

幸一は、激しい動悸を覚えながらも新聞の文字を目で追った。文字以外の周囲の物体すべてがゆっくりと回転していた。心臓が大きく響いて、その鼓動音が口から出て来そうであつた。

自殺の動機についてはまだ明らかではないが、すい臓ガンで限られた命であつたことが第一の原因であろうと報じられていた。年齢は五十五歳。職業は竹原建設に勤務していた。

幸一は、はっと窓の外の賀茂川の方を振り向いた。確か堤防工事をしているのは竹原建設であつたはずだ。彼は玄関を飛び出した。真理も付いて来た。そして、そこで働いている人達に森修二のことを尋ねて回った。

彼らの話しによると、森は六月からこの堤防工事に加わったが、七月末には体調不良で辞めてしまったという。前科があつて、ずっと一人暮らしであることもわかつた。そして、森に対する印象は、総じて大人しく真面目であると言う点で一致していた。

又、森は二十年前に惚れた女の写真を今でも大切に持ち歩いてたという事実もわかつた。恐らくその写真は秋子に送ってきた母親の写真であろう。

「恐らく森は、この堤防で働いている間に、このうちに出入りしている秋子さんを偶然見つけて、二十年前のお母さんを思い出した。そして表札を確認したんやろ。西原というお母さんの旧姓を確認して、秋子さんがその娘であることを知った」

部屋に戻った幸一は、ドラマの台詞でも読むような口調で呟いた。すると真理がその言葉を引き継いで、

「そして二十年間大事に持っていた写真を同封した手紙を秋子に送って呼び出した。でも、何のために？」

夏の日没は遅いが、それでもうつすらと静かな闇が幸一の周囲を包み始めた。東の空には、一番星がもう夜だとばかりにちらちらと

輝き始めていた。西の空を振り向けば、半紙の上に赤とグレーの絵の具を同時に垂らしたような、複雑なにじみ模様が空に描かれていた。普段の光景と違わず、賀茂川の堤には若いカップルたちが所々で熱い空気を漂わせていた。

秋子が嵐山からの帰宅途中で消え、母親が警察から戻った頃からもう二週間ほどが経過していた。真理の母は警察から即日戻ってきた。母が戻るとすぐに幸一は真理の宅を辞したが、その後、母は詳しい話はしなかったらしい。森とは昔からの知り合いで、余命わずかであるという連絡を受けて会いに行った。森の部屋で朝まで語ったが、やや衰弱している印象は受けたものの、自殺をするような素振りは一切無かった。ただそれだけのことしか真理には話さなかったようである。

真理もそれ以上は追及せず、もうこの話題は封印しようと言った。逆に、真理は母親に対して、秋子の状況と緊急連絡先、それから幸一が仲介役になっていることを説明したらしい。

母は一晚だけ京都の実家で過ごしてから姫路に戻った。真理も、祖母の容態が安定してきたのでそろそろ姫路へ戻ろうとしていた。そんな連絡を受けて、幸一は北山の炉ばた屋で真理と会う約束をした。

夏の終わりを感じさせる夕暮れの風景を横目に見ながら、足早に約束の店に向かった。真理の祖母の宅から十分程度。幸一のアパートからでも歩いていける距離であった。北山橋を東に渡ってすぐの所にある店であった。

幸一が店に入ると、既に真理が席に着いていた。カウンターの端で、窓から賀茂川の風景を見渡せる席であった。

「こんばんは」

真理がにこやかに幸一を迎えた。

「よお」

幸一はいつものように振舞おうとしているが、ぎこちない自分を自覚した。

「瓶ビール一本」

席に着くや大将に飲み物を注文した。

「何を慌ててはるの？」

真理の落ち着いた瞳が彼の心底にある隠し事を射抜いた。

「別に慌てているつもりはないけど。でも真理ちゃんが地元に戻るって言うから、何かいつものように振舞えなくて」

「そう、おおきに。でも電車で二時間程の所やし、いつでも会えるやないの」

幸一は先週、秋子と会って、森との旅の話を聞いたが、真理には何も言っていなかった。幸一のアパートからこの店に来るまでの間、真理に話すべきかどうか迷っていた。真理はもう、今度の事件について封印しようとしている。秋子の旅の話で全容がわかるのであればまだしも、肝心なことは何一つわからなかった。そんな話をしたところで、却って真理に不安を与えるだけのような気がした。

「何食べはる？」

真理が小さな両手でビール瓶を支えて幸一のグラスに傾けた。

「そうやな。ハモの天婦羅と鶏皮に豆腐ステーキ」

「珍しいわね、お造りと枝豆は頼まはらへんの？」

真理が瓶を戻しながら彼の瞳を覗いた。幸一はビールを一口飲んでから、

「さんまの造りでも貰おうか」

と言ったが、はっと気づいて、慌てて真理のグラスにビールを注いだ。真理はにこりと笑みを浮かべた。

「乾杯。あの時はいろいろお世話になりました。幸一さんにちゃんとお礼を言わなあかんと思いつながら、なかなか気持ちが悪く落ちて着なくて……。今晚はうちのおごりやさかい、好きなだけ飲んで食べて頂戴。あ、実は母にお小遣いもろたの。幸一さんにお礼しなさいって。そやさかい遠慮しなくていいわよ」

そう言って静かにグラスを口に運んだ。

「おおきに。そう言うことなら遠慮なしに頂くよ」

幸一はやや高価な肴を二三追加して、冷酒も頼んだ。真理もサラダや煮物を頼んで冷酒も少し飲んだ。酒が進んで幸一の心が柔らかくなってきた時、

「秋子と話したんでしょ？どんな話しはったのか、うちにも聞かせて頂戴」

と、幸一の心を鋭く突き刺す言葉の割には、ほろ酔い気分の朗らかな表情で幸一に自白を迫った。幸一は、一瞬躊躇して枝豆を手にとった。

「秋子から電話があったのよ。幸一さんと話したからって」

「何や。君にも連絡があったんか」

そう安堵した幸一は枝豆を口に運んでから玉光たまひかりを口に含んだ。

「うちももう気持ちは落ち着いたさかい、大丈夫よ。何を聞かされても驚かへん」

「そんな驚くような話やあらへん。ただ、秋子さんがどんな状況で森という男と一緒に旅していたのか話してもらっただけや」

「どんな風？」

真理が幸一の方に身を寄せて肩が触れ合った。ほんのりと酔った仕草がこの上無く可憐であった。

「まず、秋子さんは高校時代にお父さんの健康診断書は見えていなかった。というより、そんな騒ぎがあったことすら忘れかけていた。

当然、秋子さんは自分の出生に関して何の疑問も持っていなかった。この件は俺達の思い過ごしやっただな」

幸一はちらりと真理を見てから、すぐに露の付いたグラスに視線を落とした。確かに秋子はそう言ったが、幸一は言葉どおりには受け取っていなかった。秋子の表情に動揺が浮かんでいたからである。

だが、真理には秋子の発言通りに伝えた。

「そうやったの。幸一さんの推理が外れたわね」

真理はからかう風に幸一の横顔を覗き込んだ。

「ある日郵便ボックスにあの封筒が入っていた。中にはお母さんが写った渡月橋の写真と手紙が入っていた。手紙の内容は、森の氏名

と住所、電話番号。それから森がお母さんの古い友人であることと、娘である秋子にどうしても伝えたいことがあるから、指定日時に指定場所に来て欲しいという旨やった。また、話したい内容の性質上、家族の方にも内密で来て欲しいと書いてあった。

秋子さんも最初は疑っていたらしいけど、調べてみたら、住所も電話番号も正しいものやった。指定された場所も八坂神社近くにあるホテルのロビーで、昼前の時間やったさかい、話くらい聞いても良いと思って会ってみた」

幸一は刺身を一切れ口に入れてしばらく味わった後、酒を運んだ。真理もサラダに箸を伸ばした。

「森の話によると、お母さんが祇園の『クラブすみれ』で働いている時に森と知り合った。秋子さんの部屋にあった例のマッチがその店のものや。森は当時、小さな建設会社を経営していて、結構羽振りが良かった。お母さんとはしばらくの間恋人関係やったけど、お母さんに新しい恋人が出来て別れた。そしてその恋人、つまり君たちのお父さんと結婚する前に、森が頼み込んで最後の京都旅行をした。その条件は、どこの宿でも部屋は別にする、二人の写真は撮らないこと、旅が終わったら今後二度と連絡を取らないこと」

「それである写真のルートで旅をしてみたわけか。何で母はそんな旅行しはったんかな。うちなら絶対嫌やわ、別れた人と旅行するなんて」

幸一はハモの天婦羅を口に運びながら、笑いがこみ上げてくるのを抑えた。真理は、幸一と別れたはずなのに、こうして一緒に食事をしている。

「二人の間にどんな事情があったのかまでは、森は話してくれなかったみたいや。森は秋子さんに、一緒に旅して、二十年前のお母さんとの旅を再現させて欲しいと頼み込んだ。森はすい臓ガンで、あと半年も命が持たないと告白した。本当はお母さんと旅したいが、他人の妻を誘うわけにもいかず、第一、二度と会わないと約束をしている。これは俺の想像やけど、森は秋子さんを見て、二十年前の

お母さんを見ているように感じた。まるでタイムスリップでもしたかのような錯覚を覚えたんやないやろか。ある意味、秋子さんや真理ちゃんやから二十年前の旅を再現できる」

「何か微妙やわ。要するに、おばさんになった母より、若い時の母と旅したいってことでしょ。母が聞いたら怒らはるわ。幸一さんの発想やって付け加えとくけど」

酒のせいか、真理はやや大きな笑い声をたてた。

「だって森は、一枚きりのお母さんの写真を見て過ごしてきたんやで、その後のお母さんを一度も見ることがない。会いたい気持ちもあったやろうけど、いきなり二十年後の最愛の女に会うのは怖いという気持ちもあったやろう」

「男は女に比べて、過去の恋愛に引きずられやすいそうよ、本に書いてあった通りやわ、おもしろいなあ」

「おもしろい……か。心理学の本か」

幸一はビールグラスに残っていたビールを飲み干して、ひとり言のように呟いた。

「それで秋子も、その再現旅行に協力したんやね。親子そろってお人好しやなあ」

真理は彼のひとり言には触れずに、呆れ顔で冷酒に口をつけた。

「優しい親子やないか。君もちらっと見たと思うけど、白髪混じりの病弱そうな男が、余命半年の人生を懸けて頼み込んだ。君もきつと同じことをしたと思うよ。森は二十年前と同じように、秋子さんと約束を交わした。どこの宿でも部屋は別取る。写真は撮らない。旅が終わったら二度と会わない。最後の約束は切ないけどな。しかも思い切り贅沢をすと言った。旅の準備をしていない秋子の持ち物も全部買い揃えたと約した。何せ森は、残り半年の命であるのに独り身。お金なんて残しても仕方がない。この旅にすべてを懸けるつもりやったと思う。その強い思いが、秋子さんを協力に導いたんやろう」

幸一は鶏皮串をつまんで目の前に掲げた。

「それで秋子は、家族に連絡したらあかんで執拗に言わはったんやね。母に知れたら旅を中断させられるかも知れへんさかい」

「そう。お母さんは旅のコースも泊まった宿も知ってはるから、秋子さんを連れ戻されてしもたら終わりや。一日目は秋子さんを説得したり、買い物をしたりしていたから、二十年前のコース通りではなかった。円山公園にある料亭で食事をした後、蹴上げの高級ホテルに泊まった。清水寺と平安神宮には行かなかったらしい」

「なんや、うちらが行った所だけパスしはったなんて、皮肉やわ」真理も、肝を串から外す作業を行いながら片手間に呟いた。

「二日目は大原にある老舗の旅館で宿泊。山菜料理がおいしかったそうや。俺は好きやないけどな、山菜料理。そして三日目が高雄の旅館で宿泊。巡った名所はだいたい予測した通りやった。まあ、今となってはそんなことどうでも良いけど」

幸一は串の半ば辺りを噛んで、一気に鶏皮を口に入れた。ぱりぱりと良く焼けていた。

「俺は良く焼けた皮が好きや。これは美味しいなあ」

「そう、この前焼鳥屋さんへ行ったときも同じこと言わはったわ。何か隠してるの？」

幸一は、相変わらずの真理の勘の良さにどきりとした。真理はふつと笑いを漏らして、ねぎを箸でつまんだ。

幸一は秋子と会った時に、秋子からお礼を言われた。高雄で自分を探しに来てくれた幸一の姿を見つけた時、とても嬉しかったらしい。だから、今回も信頼して家族との仲介をお願いしたいと言った。彼にはなぜ、探しに行ったことぐらいがそんなに嬉しかったのか理解できなかったが、深く考えるのは止めにした。女の心理など考えてわかるものではない。

「何も隠していることなんて無いよ」

幸一は口に皮を残したままで弁解した。真理は俯き加減に笑みを零してから、

「秋子は写真の日付のことは知ってはった？」

と言ってねぎを口に入れた。幸一は、鶏と一緒に食べたほうが美味しいのにと反射的に感じながら、

「知ってはった。そのことも森に確認したらしい。そうしたら、単に先に子供が出来て、結婚の準備が後手に回っただけやって。そう言われてしまうと、つい興奮してしまった俺達が馬鹿らしく思えるけど、まあ、良くある話に落ち着いて良かった」

と、さりと説明して真理がこれ以上質問しないことを祈った。

「じゃあ、何で秋子は家に帰って来はらへんの？」

「俺にも良くわからん。聞いてみたけど、何となく顔を合わせづらいついしか説明してくれなかった。また俺の想像やけど、森から当時の赤裸々な恋愛関係の出来事を聞き出したんやないかな。お母さんが、森からお父さんに移り気はったんやから、多少の揉め事があったても不思議やないと思う。それで顔を合わせづらいのかも知れへんな」

幸一はそう話し終えた後、冷酒をくいと飲み干した。そして、

「焼きお握り食べる？」

と、話題を変えようとした。真理はじつと幸一の瞳を見つめて、「相変わらず幸一さんはわかりやすいわ。でも、可哀想やし今日はこのくらいにしといてあげるわ。幸一さんの言葉に騙されてあげます」

と言って、彼の頬を軽くつねって笑った。幸一は騙している積りなどなかったが、自分が感じたことを隠していることも、彼女を騙すことになるのかと自問してみた。

「うちも幸一さんを騙したし、お相手ね」

真理はそう言ってもう一度笑い声を上げた。幸一は陽気な彼女を見つめて酔っているのかと勘繰ったが、不意に背中に衝撃が走って思わず声を張ってしまった。

「秋子さんから電話があつたって言うのは嘘か？」

「ごめんね」

真理はにこりと愛らしい笑みを浮かべて、幸一の怒りに向かう心を

萎えさせた。彼も苦笑しながら串を串入れに放り込んでから、焼きお握りを二つ注文した。真理の頬はほんのりと紅く染まって、窓から見える夕暮れの風景に映えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8235x/>

モノクロームな風景

2011年11月26日15時51分発行